# 奈良国立文化財研究所年報

1980

奈良国立文化財研究所

1．平城宮第一次内裏発掘遺構と第二次内裏整備状況

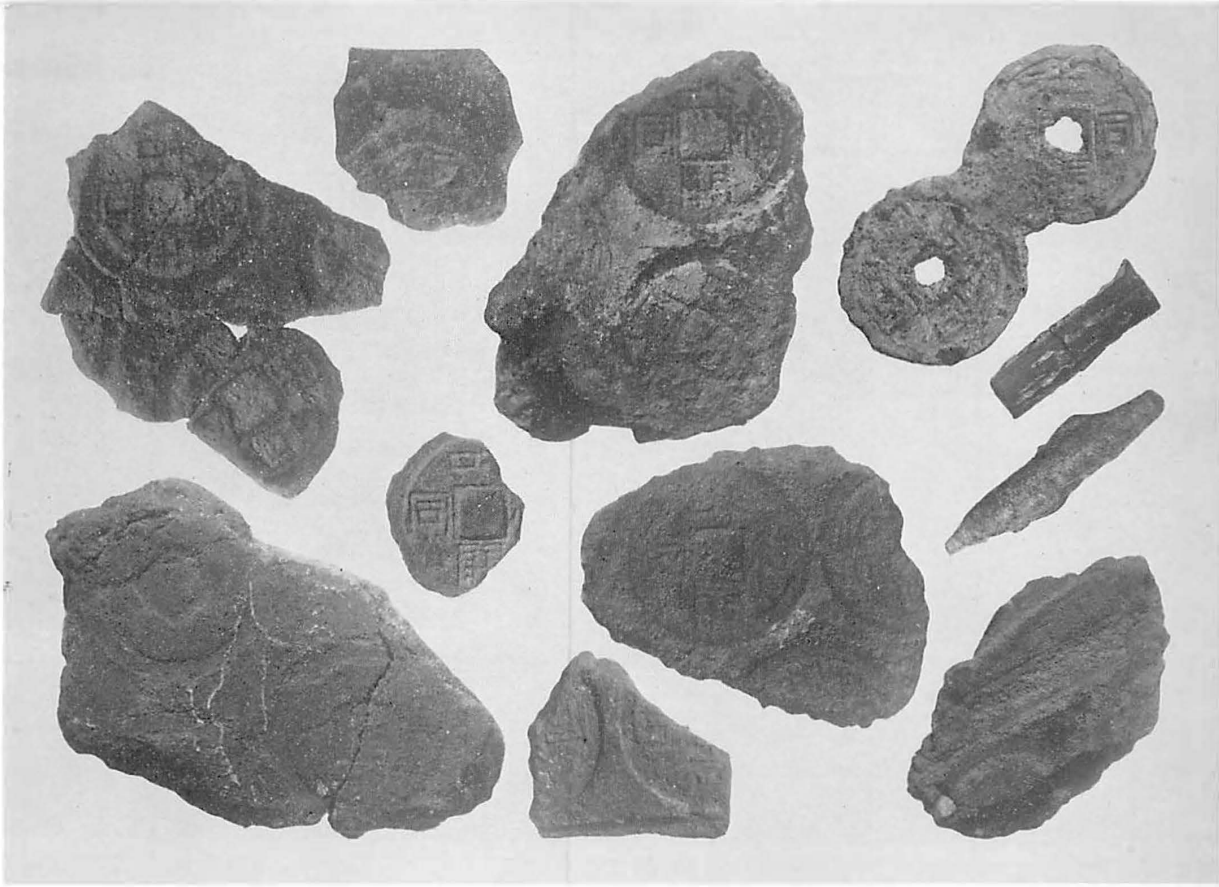
撮影　佃 幹雄

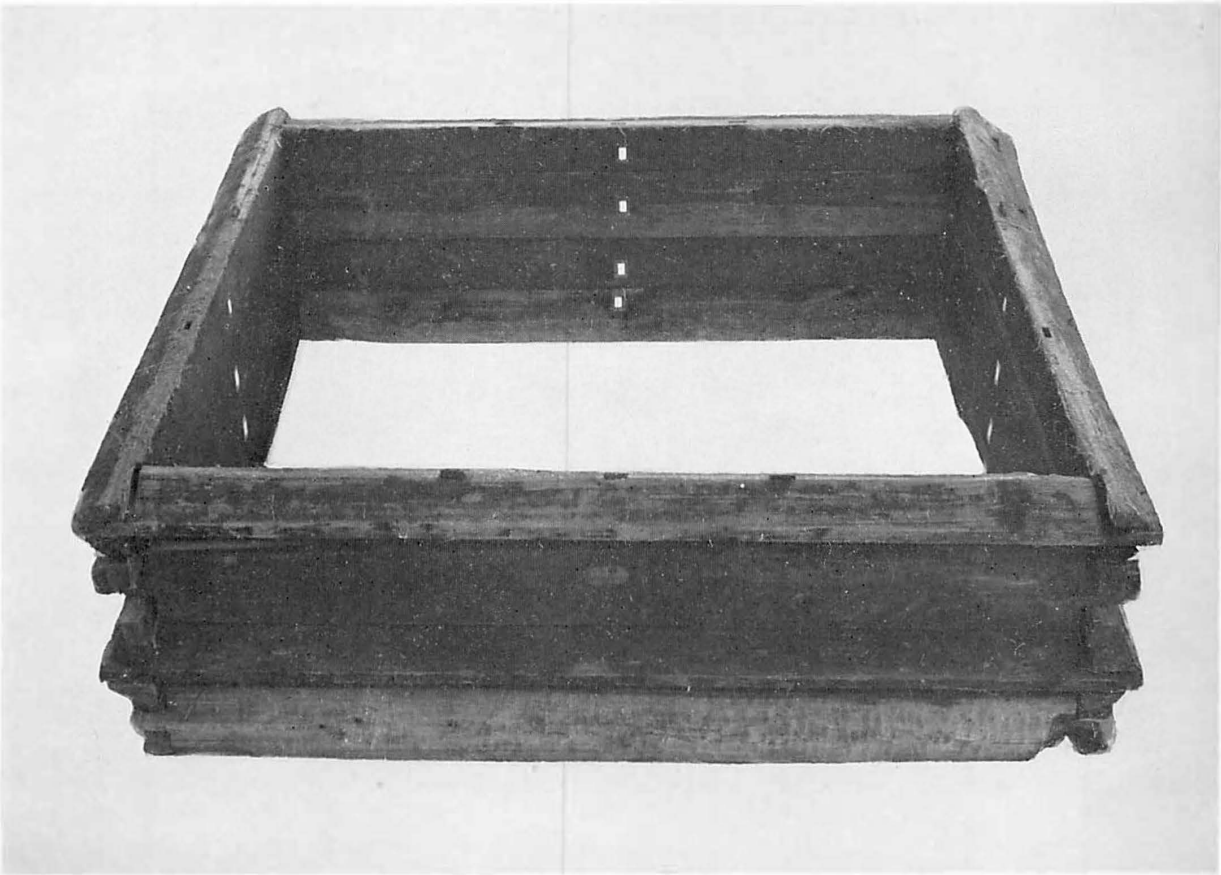
2　長泉寺毘沙門天立像（正面）
納入状況（体部）

長泉寺毘沙門天立像（背面）
納入状況（頭部）

3　十一面観音印仏
納入品

毘沙門天印仏
如来印仏



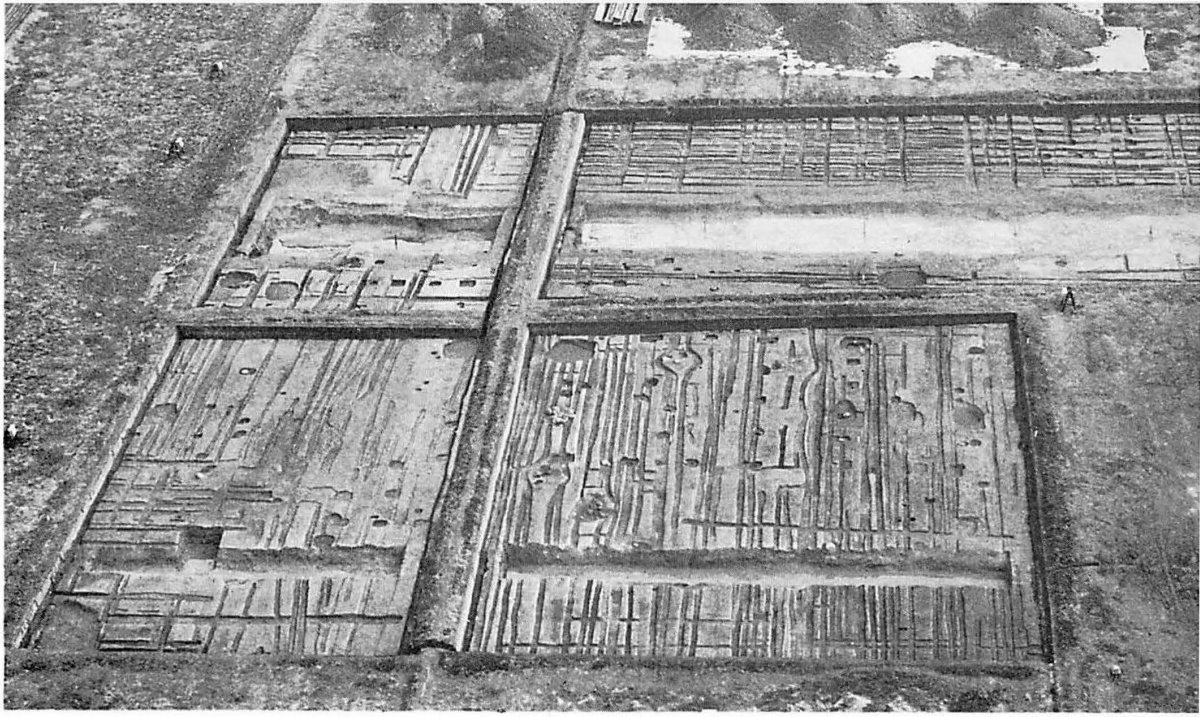


4　平城京116次出土和銅銭・銭樺・銭笵(上)　平城宮117次検出井戸枠

撮影　佃　尋雄

5　平城宮第一次朝堂院南門発掘遺構(上)　　平城宮東院発掘遺構(下)

撮影　佃　幹雄



6　藤原宮跡第27次（東面北門）発掘遺構（上）　　山田寺北面回廊発掘遺構（下）

撮影　井上直夫

7　藤原宮跡第27次調査出土木簡（2：3）

撮影　井上直夫

# 目　　次

カラー口絵　1　平城宮推定第一次内裏発掘遺構と第二次内裏整備状況
口絵　2　長泉寺毘沙門天立像
3　長泉寺毘沙門天立像納入品
4　平城京 116 出土和銅銭・銭笵・銭棹
平城宮跡 117 次検出井戸枠
5　平城宮跡第一次朝堂院南門発掘遺構
平城宮跡東院発掘遺構
6　藤原宮跡 27 次（東面北門）
山田寺北面回廊発掘遺構
7　藤原宮跡 27 次調査出土木簡

序 ……1
平城宮跡発掘調査 20 年の進展 ……2
飛鳥・藤原地域発掘調査 10 年の歩み ……6
天理市の仏教美術調査 ……10
長泉寺毘沙門天像・納入品 ……12
香川県近世社寺建築の調査 ……14
今井町の町並調査 ……16
大和郡山の文化財調査 ……17
第２回集落町並保存対策研究集会 ……18
仁和寺所蔵　「伝聞抄」および「大疏要勘抄」の紙背文書 ……19
平城宮跡と平城京跡の調査 ……22
飛鳥・藤原宮跡の調査 ……36
史跡旧下ヨイチ運上家庭園の調査 ……47
弘前城三の丸庭園遺構の調査 ……48
慧日寺徳一廟石層塔の調査 ……49
東大寺瓦窯の磁気探査 ……50
平城宮跡・藤原宮跡の整備 ……52
遺跡・遺物の保存科学(７) ……54
平城宮跡建造物復原にともなう材料工法の調査 ……57
法金剛院『古瓦譜』の調査 ……58
高取町の仏像調査 ……59
奈良国立文化財研究所庁舎 ……60
公開講演会要旨 ……62
調査研究彙報 ……63
奈良国立文化財研究所要項 ……68

奈良国立文化財研究所 年報 1980

発行日 1980 年 9 月 30 日　編集・発行　奈良国立文化財研究所　担当 田中哲雄・上野邦一　印刷 明神社

# 目　次

カラー口絵　1.　平城宮推定第一次内裏発掘遺構と第二次内裏整備状況
口絵　2.　長泉寺毘沙門天立像　3.　長泉寺毘沙門天立像納入品
4.　平城京116次出土和銅銭・銭笵・銭棹　平城宮跡117次検出井戸枠　5.　平城宮跡第一次朝堂院南門発掘遺構　平城宮跡東院発掘遺構
6.　藤原宮跡27次（東面北門）発掘遺構　山田寺北面回廊発掘遺構　7.　藤原宮跡27次調査出土木簡

序……1
平城宮発掘調査20年の進展……2
飛鳥藤原地域発掘調査10年の歩み……6
天理市の仏教美術調査……10
長泉寺・毘沙門天立像納入品……12
香川県近世社寺建築の調査……14
今井町の町並調査……16
大和郡山の文化財調査……17
第2回集落町並保存対策研究集会……18
仁和寺所蔵「伝聞抄」および「大疏要勘抄」の紙脊文書……19
平城宮跡と平城京跡の調査……22
飛鳥・藤原宮跡の調査……36
史跡旧下ヨイチ運上家庭園の調査……47
弘前城三の丸庭園遺構の調査……48
慧日寺徳一廟石塔婆の調査……49
東大寺瓦窯の磁気探査……50
平城宮跡・藤原宮跡の整備……52
遺跡・遺物の保存科学(7)……54
平城宮跡・建造物復原にともなう材料工法の調査……57
法金剛院蔵「古瓦譜」の調査……58
高取町の仏像調査……59
奈良国立文化財研究所庁舎……60
公開講演会要旨……62
調査研究彙報……63
奈良国立文化財研究所要項……68

奈良国立文化財研究所年報　1980
発行日　1980年9月30日　編集発行　奈良国立文化財研究所　担当　田中哲雄・上野邦一　印刷　明新社

# 序　　文

昭和54年度の当研究所の大きな課題は平城宮跡発掘調査が20周年をまた藤原宮跡発掘調査が10周年を迎え，それぞれ記念事業を行なったことと長年の懸案であった庁舎統合移転の最後の二条町新庁舎の改築であった。昭和52・3年度に旧奈良県立医大付属病院奈良分院跡地 8,860㎡と建物 6,540㎡を購入し，昭和53年度に旧病院の付属看護養成所建物を当研究所埋蔵文化財センター研修ならびに宿泊棟に改築し，54年はいよいよ本庁舎の改築を実施した。土地建物購入費8億3千8百万円，建物改築等6億4千万円，計14億8千万円を要し昭和54年度末に庁舎周辺整備を除いて無事完了した。庁舎統合移転の話は，平城さらに飛鳥藤原両調査部の設置，飛鳥資料館，埋蔵文化財センターなど多岐にわたる事業組織の拡充に伴う各庁舎の分散が，連絡総括にも何かと不便を感じていたばかりでなく，昭和44年の奈良国立博物館新館建設に際し当研究所春日野庁舎の徹去が一条件となったことが大きな要因となった。その後10年の経緯を経てようやく統合移転が実現することになった。この間文化庁，奈良県をはじめ関係者省庁さらに各位の少なからざる御高配をいただいたことを心から御礼申上げる。

昭和54年度は平城宮跡発掘調査部43ケ所，飛鳥藤原宮跡発掘調査部33ケ所の発掘を実施し，平城宮跡，藤原宮跡の整備を進めると共に，飛鳥資料館に入館者が17万人と前年度に比べ10％順調に増加している。埋蔵文化財センターでは研修9コース，全国都道府県市町村からの受講者167人，さらに埋蔵センター職員の外部指導208ケ所491日を数えるなど，多方面の事業を実施することができた。さらにこの間研究所学報2冊，研究所資料5冊，発掘並に木簡概報4冊，飛鳥資料館カタログ2冊，埋蔵文化財センターニュース4冊等を出版した。本年報でこれら業務の一端を御理解いただくとともに益々の御鞭撻を御願申上げるものである。

昭和55年9月30日

奈良国立文化財研究所長

坪　井　清　足

# 平城宮跡発掘調査20年の進展

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査が昭和34年7月に継続的に開始されてから20年を経過した。当初は，北方官衙地区と推定第二次内裏地区で集中的に進められ，広範囲にわたる密度の高い遺構の保存状況が実証された。やがて宮城西南隅の電車車庫建設計画等を契期として全域保存の方針が立てられ，38年度に平城宮跡発掘調査部が設置されるとともに国費による土地買上げが始められた。この時期の調査は，朱雀門をはじめ宮域の四至の状況確認に重点がおかれた。39年頃から，国道24号線バイパス計画が平城京東一坊大路を復原する形で計画され，その計画路線敷数ケ所を調査したところ，東面の門跡が確認されず，かえって官衙建物が東一坊大路推定地に進出していた。東面南門推定地の調査では，平城宮が東へ張出すことが確実となり，バイパスは宮域の南で東へ迂回するように変更された。四至の確認，東張出し部の調査とともに，第二次内裏及び内裏東方官衙地区の調査が続けられた。

43年度の第47次調査から45年度の第63次調査にかけて，西面中門と同北門までの大垣に沿う調査部の研究室と収蔵庫及び資料館建設予定地に重点をおき，6次にわたる調査を行っている。この地区では細長い南北棟の建物が多く，「主馬」の墨書土器を発見したことから馬寮と推定され，収蔵庫等は遺構の保存のために土盛りをして建設された。この時期には第二次朝堂院の東朝集殿を調査している。初期10年程の調査は平城宮に関する貴重な学術的成果をあげたばかりでなく，全国の遺跡調査の進展に大きく貢献した。[1]

近年の発掘調査は，推定第二次内裏地区東半部の未発掘部分，推定第一次朝堂院内裏地域及び東院東南隅に重点をおいてきたが，それとともに平城京関係の遺跡や奈良山の瓦窯・古墳，或は寺院の遺跡など，平城宮と密接に関連する調査にも出来る限り対応してきた。

朱雀門北方の推定第一次朝堂院内裏地域では，40年度の第27次調査，42年度の第41次調査によって東面築地廻廊などの状況が明らかにされていたが，45年度の第69次調査以降，54年度の第117次調査にわたる6次の調査によって，第二次内裏と並ぶ一郭の東半部の調査を終了した。第二次内裏地区と大きく異なるその構成と変遷状況が明らかとなり，最近の重要な成果の一つとなっている。[2] その南方の第一次朝堂院地区についても51年度に第97次調査として調査をはじめ，その後3次の調査によって，南北に長い東第一堂と第二堂及び朝堂院南門を確認した。まだ未調査の部分があるが，第二次朝堂院のように十二堂が並ぶものではなく，南北棟の長い建物が2棟ずつ東西に並ぶ可能性が大きく，推定第一次内裏地区とともに，その性格や第二次朝堂院内裏地域との関連などについて詳しく検討を進めている。

第二次内裏地区には初期の段階から調査の重点をおいてきたが，45年度の第70次調査から49年度の第78次調査にわたり，内裏内郭東半部と東外郭官衙地区の未発掘部の調査を完了した。この地区は終始内裏的様相を持ち続け，5期に大別される変遷がある。53年度の第113次調査

では第二次大極殿を調査し，凝灰岩壇上積基壇に建つ礎石建物の規模を明らかにするとともに，下層に大規模な掘立柱建物を確認している。

東院地区では42年度の第44次調査で発見した東南隅の園池について，51年度から3次の調査を行って園池とその北側及び西側の状況を含めてほとんどその全容が明らかとなり，園池の改修の経過とその一郭の度重なる変遷状況が判明した。[3] また東面南門（的門）北方でも52年度の第104次調査で建物の密度の高い官衙地区となっていることがわかった。

30年度の第二次大極殿廻廊東南隅の第1次調査から，54年度東院園池西側の第112次調査にわたる平城宮の発掘調査面積は約25ヘクタールに及んでいるが，今後も長期にわたり調査を継続しなければならない。

平城京に関する調査は，43年度に左京三条一坊四坪，43年度，44年度に左京一条三坊と東一坊大路及びウワナベ古墳外周などの調査を行ってきたが，その後も主に公共事業にともなう事前調査として，左京三条二坊，同五条一坊，東市北側の同八条三坊などの調査を行い，大路小路の計画，坪内の割付けや建物群の状況などが明らかとなり，左京八条三坊では東市を縦断する掘割りを確認している。

左京三条二坊六坪では，園池を中心とする平城宮と密接な関係にある庭園遺構が発見され，ここに建設を予定されていた郵便局庁舎は敷地を変更し，庭園跡は特別史跡に指定されて保存整備が計られることとなったが，変更敷地とした左京三条四坊七坪においても，京内ではじめて和同開珎鋳造の跡を発見するなど，次々と重要な遺構が発見されて，京内のほとんど全域にわたる遺跡の埋蔵が予測されるようになった。羅城門においてもその基礎の一部を確認し，五条六条の条間路北側では朱雀大路と下つ道の側溝を調査し，朱雀大路の巾を両側築地心で30丈と推定した。京内の水田の地割りと地形を綿密にたどり，平城京を復原する研究も進められ，発掘調査と合わせて京の状況が次第に解明されつつある。

京北方の奈良山丘陵では，日本住宅公団の大規模な開発計画などにともない，45年度から53年度にかけて，奈良市山陵町，中山町，押熊町，歌姫町，京都府相楽郡木津町音如ケ谷の平城宮の瓦を製作した瓦窯群，奈良市山陵町の石のカラト古墳などの調査を行った。

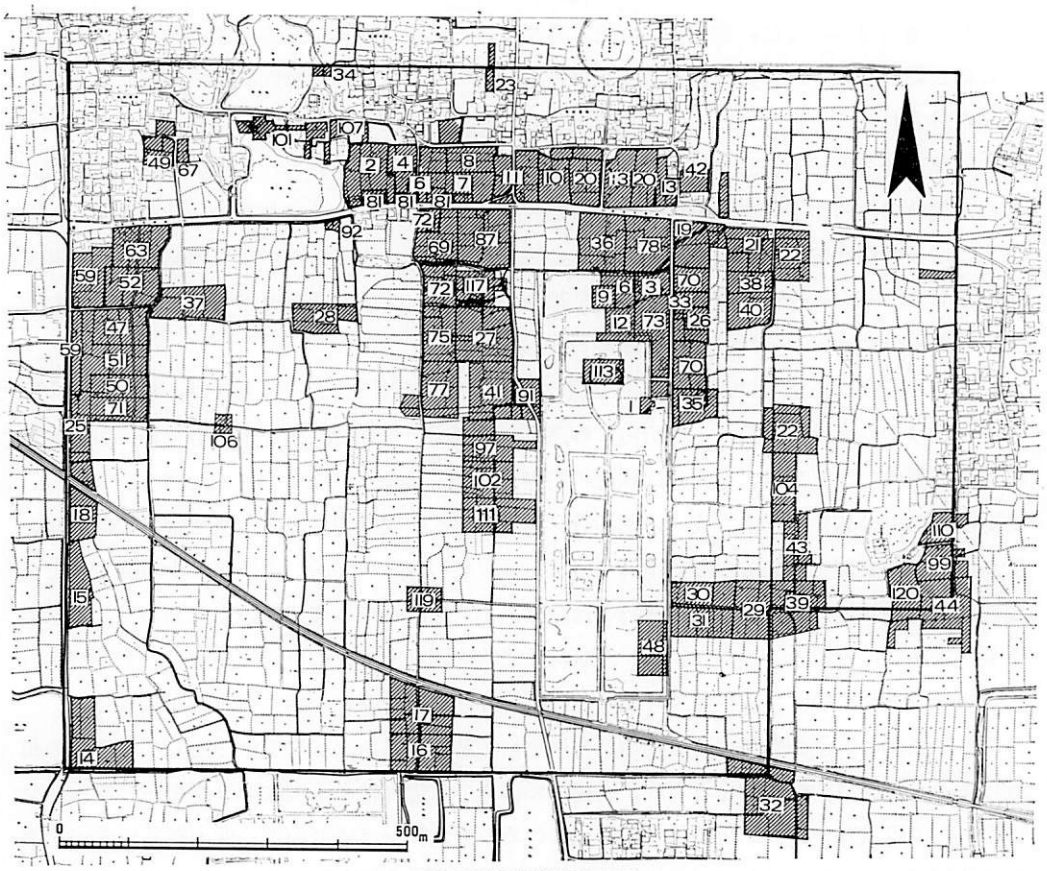
寺院関係では30年代にも大安寺，興福寺，同一乗院，平安京西寺など各所で行っているが，近年はその機会が一層多くなり，薬師寺では主要堂塔のほかに僧房，小子房，十字廊などで重要な成果を挙げ，既に廃絶した西隆寺では金堂，塔，東門跡を確認したのをはじめ，平城京の主要な寺院のほとんどに及んでいる。左京八条三坊の調査では，七世紀代創建で寺名不詳の寺院跡が発見されている。京外では，法隆寺，法起寺，法輪寺などの調査に協力している。

遺跡の実測は国土調査法による平面直角座標系を基準とし，平城宮を中心として各遺跡の相互の関連を正確に把握するとともに，大規模の調査では遣方による実測のほか主としてヘリコプターによる遺跡の写真測量を併せて行っている。写真測量は精度の均一性と野外作業の迅速性に特徴を持ち，昭和43年に平城宮跡で採用されて以来，全国各地の大規模発掘調査で用いら

れている。

長期にわたる調査によって発見した遺構遺物の量もぼう大なものとなっている。このため，遺跡の種別，名称，遺構遺物の分類，出土地点の標示などは調査開始当時から記号化し，その後の分類整理や調査研究の円滑化をはかってきた[4]。35年度の第５次調査で大膳職推定地の土壙から木簡が始めて発見されて既に20年になるが，現在では約25,000点に増加し，その内容も実に多様で，平城宮のみならず古代史の研究に不可欠の史料となっている。土器は最も多数出土しており，墨書土器は約1,200点を数える。形式技法や伴出木簡などにより，平城上皇の還都の時を含め奈良時代を７段階に分類している[5]。軒瓦は現在30,000個程出土し，軒丸瓦は67型式202種，軒平瓦は61型式166種に分れ，鬼瓦には17種がある[6]。出土状況や造営経過などを総合的に検討して５期にわけている。木製品では人形（ひとがた），曲物，農具，柱根，井戸枠などのほか建築部材もあり，金属品では銅銭，帯金具などが多い。

出土遺物のうち，特に木製品の保存処理は早くからポリエチレングリコール（ＰＥＧ）或は真空凍結乾燥による処理を研究開発して実用化に成功し，大型タンクによる高分子ＰＥＧ含浸装置を設置し，保存処理を本格的に進めている。真空凍結乾燥による木簡の保存処理も凍結乾




平城宮跡発掘調査位置図

燥前後に保存状況に応じた処理を行うことによって効果を挙げており，埋蔵文化財の保存科学についても，先進的な役割りを果してきた。

38年度に平城宮跡の国費による買い上げが始められ，その後東院地区及び南辺部の追加指定にともなって対象面積もふえたが，既に民家密集地を除く大部分が国有地となっている。買上げの事務は当初から奈良県教育委員会がこれにあたり，東院地区及び南辺部はそのほとんどが奈良県の先行取得によっている。

宮跡の活用をはかる整備事業も38年度から奈良県教育委員会により，主として第二次朝堂院内裏地域と宮域西南隅などを対象として進められてきたが，45年度から当研究所が引継ぎ，主として第二次内裏，北方官衙，境界土塁，草園，緑陰帯などの整備を行ってきた。43年度に平城宮跡を遺跡博物館として整備活用する方針が立てられ，53年度に文化庁から特別史跡平城宮跡整備構想案が発表され，その構想の趣旨にそって整備が進められている[7]。整備計画に関連して，土質，水質，植生，鳥類などの自然環境，来訪者や周辺居住者の意識，利用状況，交通状況などの人文環境ならびに整備手法等の調査研究を行っている。

宮跡の施設では，41年度から43年度にかけて第二次内裏東方官衙地区に遺構覆屋など5棟が文化庁新営工事として完成し，44年度から47年度にかけて推定馬寮跡に研究室，収蔵庫及び展示室を建設した。調査部は45年にここへ移り，20棟近くにも増えていた第二次内裏地区の仮設建物を撤去したが，その後も収蔵庫2棟を増設している。調査部は45年以来10年間をここで過ごしたが，宮跡西側の研究所新庁舎改修工事にともない，研究室は55年春に新庁舎に移転した。

平城宮跡では広い地域が未調査であるが，近年推定第一次朝堂院内裏地域や東院東南隅園池地区などについてまとまった成果があげられ，第二次朝堂院内裏地域とともに，中心部の状況が次第に明らかになってきている。京内の調査もふえてきているが，京廃絶後永年田畠であった京中央部の開発は急速に進み，未調査のうちに重要な遺跡の破壊が進む危険性が大きい。宮域とあわせて京内の遺跡の調査体制の整備が急務である。発掘調査，遺物整理，保存処理，遺跡整備など各方面にわたり，今後とも一層の努力を続ける所存である。

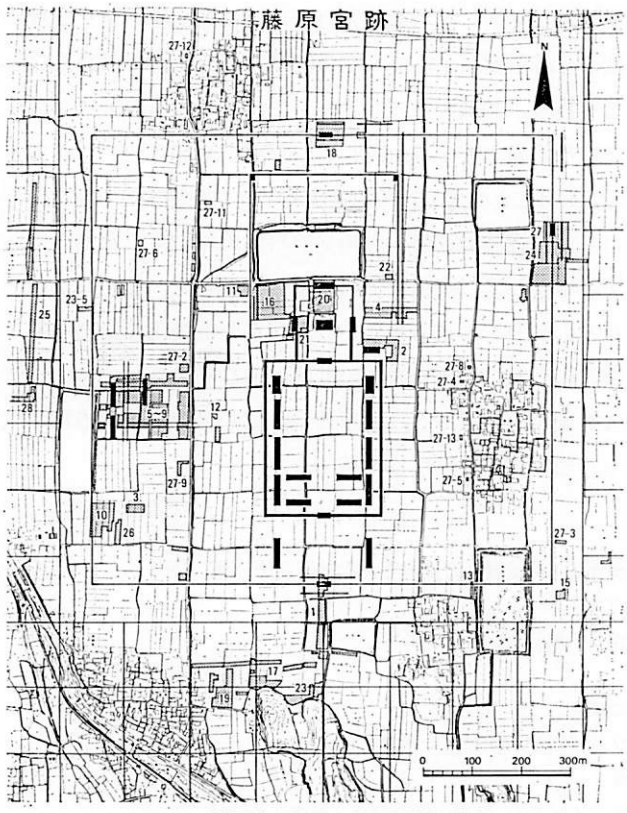
（岡田　英男）

1. 平城宮跡発掘調査部「平城宮発掘調査10年の進展」奈良国立文化財研究所年報　1968
   奈良国立文化財研究所二十年史　1972
2. 本年報「平城京跡と平城宮跡の調査」　参照
3. 同上　参照
4. 遺構，遺物の分類標示方法は下記に解説している。
   平城宮発掘調査報告Ⅱ　奈良国立文化財研究所学報第十五冊　1962
   注1.の「平城宮発掘調査10年の進展」
   なお，遺構の標示記号はその後，道路に「ＳＦ」，足場，棚の類に「ＳＳ」を加えている。
5. 平城宮跡発掘調査報告Ⅷ　奈良国立文化財研究所学報第26冊　1976　第Ⅴ章，2参照。
6. 奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ　「瓦編２」　1975　解説参照。
7. 安原啓示「平城遺跡博物館構想について」奈良国立文化財研究所年報　1979

# 飛鳥・藤原地域発掘調査10年の歩み

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

奈良国立文化財研究所が平城宮跡発掘調査部のなかに飛鳥藤原宮跡調査の担当室を設けて，同地域の発掘調査をはじめたのは昭和44年12月であった。爾来10年の歳月を経過したが，その時期はちょうど，本年5月に明日香特別立法として結実をみた飛鳥地域の歴史的風土の保存問題が，ようやく社会的政治的関心をよびはじめた時期であった。ところで当研究所が飛鳥藤原地域の遺跡調査を実施したのはこれがはじめてではない。昭和31年から34年にかけて，奈良県などと協同して，吉野川分水事業に伴なう事前の発掘調査を飛鳥地域において実施して，飛鳥寺や川原寺，飛鳥板蓋宮伝承地の遺跡解明に多くの成果をあげることができた。この成果はいろいろな意味で，その後10年にして再開され，今日に続いている調査の直接的な基礎になっていることはいうまでもない。以下，藤原宮跡地域と飛鳥地域にわけて，10年間の調査成果の概要を述べ，あわせて今後の課題について触れてみたい。




藤原宮跡発掘調査地位置図

### 藤原宮跡の調査の進展

藤原宮跡の発掘調査は，昭和9年から19年まで継続して行われた日本古文化研究所の調査にはじまる。調査は大極殿及び朝堂院という宮の中心施設をねらっておこなわれ，それらの殿舎，回廊等の平面規模と構造がほぼ明らかとなった。くだって，昭和41年から43年にかけて，奈良県教育委員会は，藤原宮跡を横断して計画された国道バイパス路線の事前調査を実施した。調査の進展にともない宮域を画する北，東，西の三面の大垣及び外濠の検出に成功し，これにより藤原宮の規模と構造が判明した。調査関係者は，この成果をもとにさらに進んで，藤原京の条坊復元についても画期的な見解を提示した。なおまた，この調査において外濠や宮内排水路から，他の遺物にまじって2,000点余の木簡をは

じめて検出した。平城木簡よりは一時代古い藤原木簡は，郡評論争に結着をつけたばかりでなく，さまざまな意味で学界に衝撃を与えるに充分なものであった。

当研究所による藤原宮跡の調査は，これらの成果の上にたって行われた。調査次数ごとの地点，面積は別図，別表のとおりである。調査はまず，古文化研究所が実施した朝堂院南門の調査からはじめた。その理由は古文化研究所の調査結果が未報告であったことと，県教委の調査が南面に及んでいなかったことの二つであった。これにより門の規模を確認し，門の南20メートルの位置に東西に走る外濠を検出した。従来，朝堂院南門と考えてきたものが同時に南面中央門すなわち朱雀門であることが判明した。ついで藤原宮における大極殿院と内裏一郭の相関関係を明らかにするため，大極殿院の東方地区を調査し，県教委が想定した内裏外郭線が，調査地まで延びてきていることを確認した。

昭和47年春から48年秋までは，第5次から第9次までの調査として，藤原宮跡の保存計画に基いて移転することになった鴨公小学校の敷地予定地の調査を継続して行った。同地は，飛鳥から醍醐に通ずる市道の西側に位置するとはいえ，宮跡地にはいることは明らかであるから，敷地全体の徹底した調査が要望された。2.4ヘクタールの敷地の6割強を調査し，宮内西方に所在する官衙建物群を検出した。宮衙地区でこれだけの面積をまとめて調査した例は，藤原宮ではじめてであるばかりでなく，他の宮跡でもそんなに多くはない。建物の主なものは，桁行18間・20間の長大なもので，いずれもほぼ同位置に二回の建て替えがあり，それらの建物は，コの字形に計画的に整然と配置されている点が特徴的である。同時にこの調査により藤原宮の西方域における遺構の保存状況とその密度を知る手掛りを得た。その後，内裏西外郭地区の調査，北面中門（猪使門）の調査を実施して，内裏西外郭線を確認し，また第1次調査の南面中門と北面中門により藤原宮の中軸線に関する資料がえられた。つづいて行われた大極殿北方地域，大極殿院西脇殿の調査は，古文化研究所の調査を補いながら，大極殿周辺の整備修景のための資料を得るために行い，調査の副産物として，大極殿北方において宮の中心線のやや東に偏って，南北に流れる宮造営のための運河とみられる堀を検出した。そして最近三年は，東面北門

| 次数 | 年度（昭和年） | 地域 | 面積（a） |
|---|---|---|---|
| 1 | 44 | 南面中門 | 16.2 |
| 2 | 45 | 大極殿院東方 | 13.0 |
| 3 | 46 | 西南域官衙 | 8.0 |
| 4 | 46 | 大極殿院東方 | 18.0 |
| 5 | 47 | 西方官衙 | 32.3 |
| 6 | 47 | 西方官衙 | 24.0 |
| 7 | 47 | 西方官衙 | 32.9 |
| 8 | 48 | 西方官衙 | 27.5 |
| 9 | 48 | 西方官衙 | 25.2 |
| 10 | 48～49 | 西南域官衙 | 24.0 |
| 11 | 48 | 内裏西外郭 | 2.5 |
| 12 | 48 | 朝堂院西方 | 0.36 |
| 13 | 49 | 南面大垣 | 4.0 |
| 14 | 49 | 東方官衙 | 0.1 |
| 15 | 49 | 東南隅 | 4.0 |
| 16 | 49 | 内裏西外郭 | 46.5 |
| 17 | 50 | 右京7坊1条 | 26.2 |
| 18 | 50 | 北面中門 | 31.7(5.7)※ |
| 19 | 51 | 右京7坊1条 | 28.7(2.7) |
| 20 | 51～52 | 大極殿北方 | 24.5 |
| 21 | 52 | 大極殿院西脇殿 | 15.8(1.4) |
| 22 | 52 | 内裏内郭東南隅 | 1.6 |
| 23 | 53 | 右京7条1坊 | 16.2(6.2) |
| 24 | 53 | 東面大垣 | 22.0 |
| 25 | 53 | 右京3～5条3坊 | 24.0 |
| 26 | 54 | 西南官衙 | 5.7 |
| 27 | 54 | 東面北門 | 39.0(17.0) |
| 28 | 54 | 右京5条3坊 | 27.0 |
| 29 | 55 | 東面大垣（調査中） | 30.0 |

※ カッコ内は当該年度の藤原宮跡及び周辺の一般申請に伴う事前調査

藤原宮跡の発掘調査一覧

付近の調査を集中して行い，宮城門，東面大垣，外濠，内濠等の遺構を検出し，外濠等からは木簡をはじめとする多量の遺物が出土している。

以上の調査は，毎年計画的に実施しているものであるが，これとは別に，宮の内外の未指定地におこる，市あるいは民間の住宅団地造成や個人の家屋新築等に伴なう調査が年々急増してきており，昭和54年度の実績で16件にものぼっている。

以上がこの10年間の調査のあらましであるが，藤原宮跡は本年三月，国の文化財保護審議会により，従来の約30haから約50haに追加指定する答申がなされた。100ha近い規模の遺跡であるから，これで決して充分とはいえないが，一歩前進にはちがいない。文化庁はさらに，宮域の四隅と東西二面の宮城門跡の史跡指定を考えており，近い将来実現の運びになろう。また昭和54年度までに史跡として国有化されたのは約20haほどである。美田地区といわれるこの地域で，史跡買収に協力してもらっている地主，大字総代をはじめとする地元の人たちに応えるためにも，藤原宮跡の将来にわたる保存整備計画は早急につくらなければならない時期にきているといえよう。

**飛鳥地域の発掘調査と今後の課題**

当研究所は飛鳥地域の調査として，一つにはあらかじめ見当がつけられている重要遺跡についてその範囲を確認し，主要堂宇を発掘するなどその全貌を明らかにして遺跡保存を積極的に推進する調査を行なっている。いま一つは，県・村の依頼により，不時の遺跡発見にそなえて，一般の住宅建設や公共施設の建設等に伴なう事前の発掘調査を行なっている。

前者の例としては，小墾田宮（昭和45・48年　以下カッコ内の数字は調査の行われた年度を示す），川原寺（48），大官大寺（49～継続中），山田寺（51，53，54），桧隈寺（54～継続中）などがある。小墾田宮は「古宮土壇」を中心に調査し，同宮の時期（7世紀初頭）の園池と若干の建物を検出したが，宮の中心部には手は届いておらず今後の課題である。川原寺は，史跡整備のための調査として行っなたもので，東門と東南院の遺構を検出した。東門は中門や南門をはるかに凌ぐ規模のもので，伽藍の東側を古代飛鳥の幹線道中ツ道が走っていることと関係があろう。

大官大寺は，本年度7回目の調査を行なっていてなお継続中のものである。中門，塔，金堂，講堂，回廊などの調査は終り，飛鳥の寺院のなかで最大規模の伽藍をもつこと，従来「講堂」とみられていたものが金堂となり，講堂はその北70mの位置にあることが判った。またすべての堂舎は羅災の痕跡を示し，なかでも中門は造営中に焼失しており，また瓦をはじめとする出土遺物により天武，持統朝にさかのぼる伽藍とは考えられないなど，大官大寺をめぐる諸問題に新知見を提供した。

山田寺は，3回の調査により，中門，塔，金堂，講堂が一直線に並ぶ配置であるが，従来指摘されているような四天王寺式と異なり，回廊が金堂と講堂の中間に位置することが判明した。遺構の保存状況がきわめて良く，ことに金堂は基壇化粧石がよく残っており，礎石にはレリーフした蓮弁の痕跡があった。建物は，正面三間，側面二間の身舎に同じ間数の廂が四面に

つく特異なもので，肘木は玉虫厨子にみられるように扇形に割付けられるものと考えられる。昨年度から開始した桧隈寺の調査は，遺構の保存が良い遺跡だけに成果のほどが期待されている。

つぎに緊急調査の事例としては，国営公園など飛鳥保存事業の事前調査として実施したものに，坂田寺（47, 48, 55），稲渕川西遺跡（51），平吉遺跡（52），などがあり，それぞれに重要な遺構を検出していて，稲渕川西遺跡の場合は当初の計画を変更して史跡に指定された。また藤原宮跡と同様，個人住宅の建設による小面積の調査件数が，飛鳥地域でも年ごとに増えている。なかには水落遺跡の例のように，顕著な石敷遺構が発見されて，史跡指定がはかられたものもある。このほか飛鳥資料館裏山の斜面地で，全長73mの石組暗渠がみつかり，なお裏山上面に関連遺構が予想されるなど，飛鳥にはこのような不時発見の顕著な遺跡が多い。従って飛鳥地域においては，平坦地だけでなく，広く遺跡の存否を確認する調査は不可避であり，なんらかの開発行為が行われる場合には，事前の発掘調査を徹底すべきものと考えられる。

今年5月26日公布された明日香村特別立法（明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法）は，歴史的風土の保全という，いわば地上の風土保存をうたったものであるが，その第一条に歴史的風土を説明して，「飛鳥地方の遺跡等の歴史的文化的遺産がその周辺の環境と一体をなして云々」とあるように，遺跡保存と無縁のものではない。国会審議のなかでつけられた付帯決議は「埋蔵文化財の保存とその活用の重要性」をうたい，「遺跡分布の学術調査及び緊急発掘調査を速やかに行いうるよう政府は財政上，技術上及び体制上の十分な援助を行うこと」とのべている。このような主旨をいかすためには，従来の学術，緊急調査に加えて，未知の遺跡の範囲のひろがりとその性格を確認するための調査を別途考慮する必要がある。そのためには，国，県，村が従来以上の協力関係を持つことが必要であり，飛鳥藤原宮跡発掘調査部に関していえば，その人員，体制はきわめて不備であり，その充実がつよく望まれるのである。（狩野　久）

| 年度 | 遺　跡　名 | 面積(a) |
|---|---|---|
| 45 | 小墾田宮（第1次） | 21.4 |
| | 他（雷丘東方遺跡、豊浦寺） | 6.0 |
| 47 | 上の井手遺跡 | 8.0 |
| | 坂田寺（第1次） | 3.5 |
| | 他（水落遺跡、奥山久米寺） | 5.4 |
| 48 | 小墾田宮（第2次） | 23.0 |
| | 川原寺 | 20.0 |
| | 大官大寺 | 6.4 |
| | 坂田寺（第2次） | 5.7 |
| 49 | 大官大寺（第1次、金堂） | 30.0 |
| | 和田廃寺（第1次） | 33.0 |
| 50 | 大官大寺（第2次、中門回廊） | 28.0 |
| | 和田廃寺（第2次） | 28.6 |
| | 他（本薬師寺、川原寺） | 5.0 |
| 51 | 大官大寺（第3次、東回廊） | 17.0 |
| | 山田寺（第1次、中門・塔） | 27.0 |
| | 軽池北遺跡 | 11.0 |
| | 稲渕川西遺跡 | 7.2 |
| | 他（奥山久米寺、小墾田宮、飛鳥寺 | 2.9 |
| 52 | 大官大寺（第4次、推定『金堂』） | 24.0 |
| | 平吉遺跡（甘橿丘西麓） | 25.0 |
| | 他（奥山久米寺、定林寺他） | 4.2 |
| 53 | 大官大寺（第5次、塔・回廊） | 19.0 |
| | 山田寺（第2次、金堂・回廊） | 25.0 |
| | 飛鳥寺（東南禅院） | 9.0 |
| | 他（日高山瓦窯、豊浦寺、小墾田宮 奥山久米寺、川原寺、飛鳥寺他） | 6.0 |
| 54 | 大官大寺（第6次、講堂他） | 22.0 |
| | 山田寺（第3次、講堂） | 13.0 |
| | 桧隈寺（第1次、南門推定地） | 8.0 |
| | 他（田中宮、奥山久米寺、飛鳥寺 川原寺、小墾田宮他） | 8.2 |

飛鳥地域調査一覧

| 年度 | 予算（単位千円） |
|---|---|
| 44 | 10,284 |
| 45 | 24,055 |
| 46 | 40,449 |
| 47 | 65,033 |
| 48 | 81,849 |
| 49 | 89,918 |
| 50 | 109,845 |
| 51 | 115,402 |
| 52 | 123,689 |
| 53 | 130,412 |
| 54 | 137,046 |
| 55 | 136,975 |

飛鳥・藤原地域
発掘調査予算

# 天理市の仏教美術調査

美術工芸研究室

桜井市，明日香村，高取町に引き続き県下の市町村単位の第4回として本年度は天理市教育委員会の協力を得て，同市内の158ケ寺（無住寺も含む市内の全寺院）に伝わる約2,000点の仏教美術の調査を行った。

天理市は大和盆地の中央東寄りから，更にその東側に連らなる大和高原の一部を含む地域に位置し，南は桜井市に，北は奈良市に隣接している。この地も桜井市などと同様，大和でも早くから開けたところで，山辺道沿いには大小の古墳が連らなり，また，物部，穂積，大倭，和爾，柿本など諸豪族の本貫の地としても知られている。しかし仏教文化に関しては，6世紀中頃にわが国へ仏教が伝来した際，当地の中心的勢力であった物部氏が排仏を唱えたためもあって飛鳥時代に寺院が建立された記録もない。現在のところ遺跡も見当らず，石上町寺内，櫟本町長寺，柿本寺，和爾町願興寺，森本町光明寺などの旧跡から奈良時代の古瓦等が出土しており，当市ではこの時代からようやく寺院が造営されたと考えられている。しかも仏教美術の遺品もこの時代のものは残っていない。遺品は彫刻を中心とした10世紀以降の平安時代の作品が多数伝えられており，平地部，山間部を通してこの地にも仏教が浸透していったことがわかる。中世に入ると東大寺，興福寺など南都寺院の庄園になるところも多く，長岳寺，永久寺，竜福寺などこの地の大寺は興福寺の勢力下に入り，また交通の要所として栄えたこともあって仏教は更に隆盛し，現在でも各大字の寺院に中世の仏像が多数伝来している。絵画や工芸品は宗教行事等の実用に供されるもの，或いは紙や布など脆弱な材質であるため室町時代の作品が散見されるが，大方は近世のものである。しかし，涅槃会の本尊仏涅槃図や梵音具などは各大字の寺院の殆どに残っており，それらには制作年時や寄進者が記されており，この地の近世における民間を中心とした信仰の様相を知る好史料となっている。

本調査でまず注目されたのは平安時代の彫刻作品である。市内では従来，東西井戸堂区有十一面観音立像，和爾善福寺阿弥陀如来坐像，柳本長岳寺阿弥陀三尊像（仁平元年銘）などが知られているにすぎなかったが，今回の調査では80点を上廻る作品が確認された。中でも古様を示すものとして善福寺の定印の阿弥陀如来坐像（像高56.7㎝）合場町公民館所在の薬師如来坐像（像高87.6㎝）の二軀の一木像がまずとり上げられよう。善福寺像はその根幹部を桧の一材から彫成し，内刳はなく，その表現も如何にも一木造らしく重厚で，9世紀末にまで遡りうるものである。また合場町像は前者に比べると表現がやや穏やかになっているが，欅の一材から彫成し，背刳を施す構造で，整備された感はあるが翻波式衣文など古様を留め，像容も整っていて10世紀の制作と認められる市内屈指の古像として注目された。この地，布留薬師堂菩薩坐像（像高230㎝），仙之内薬師堂如来坐像（像高82.5㎝）の二像は火災に罹って表面が炭化しているが，いずれも10世紀に遡る一木像で，石上神宮にゆかりの遺品として当地の歴史にとって見逃

すことのできないものである。11世紀の一木像も少からず伝えられており，それらは表現に地方的なところも見られるが，奈良や桜井に隣接する当市の歴史の古さを物語るものであろう。なお，当市の平安一木彫の特色として上げられることは，欅材を使用しているものが多いところである。一般に近畿地方では桧材の彫刻作品が圧倒的に多く，その他では榧などが用いられているが，欅材の例は天理市に隣接する桜井市，大和郡山市，斑鳩町などで二，三が知られているにすぎない。現在の大和盆地には欅はそれ程多くはないが，天理市内では例外的に集落や社寺の境内に欅が植えられていることが多く，平安彫刻に使用された欅材も，あるいは当地で調達されたものではないかと想像され，興味深いものがある。12世紀の作品は山間部，平地部を問わず万遍なく伝えられており，量的には隣接地をしのいでいるといえる。それらは当時の中央の作風につながる温和な表現の寄木造の作品から素朴な表現の如何にも在地仏師の手になったと見られる一木像まで多岐にわたっている。

鎌倉時代は当時隆盛を極めた内山永久寺が廃絶したため目立った作品は残っていない。前半期の作品は平安後期の旧様を引くものが殆どで，後半期の作品に特色のあるものが存在している。中では小路常福寺如来立像（像高29.8cm）が快慶の作風を引く，いわゆる安阿弥様の作品として注目され，その他，山田蔵輪寺地蔵菩薩半跏像（坐高33.5cm），豊井豊満寺千手観音立像（像高54.9cm），高品観喜天堂地蔵菩薩立像（像高157.0cm）など個性豊かな作品が存在している。室町時代は100点を上廻る数が伝えられている。当市内では16世紀に奈良県下一帯で活躍した宿院仏師の在銘作品として中定西念寺十一面観音立像（享禄4年—1531），南六条釈迦堂釈迦如来坐像（天文13年—1544）が知られている。今回の調査で銘文等は確認されなかったが，宿院仏師の手になると見られる数点の作品が明らかとなった。また，この時代の他の作例も比較的像容の整った本格的も少くなく，中世における当地の繁栄の様を伝えているものといえよう。

絵画，工芸作品は残念ながら鎌倉時代以前に遡るものは見出されなかった。当市の場合も桜井市と同様，近世の仏涅槃図が市内の半数以上の寺院（会所寺等を含む）に80点が伝えられていて，その大半が裏書，箱書などによって制作年時，願主，施主などが判り，しかも，今でも2月15日の涅槃会に使用されているものも少くなく，近世における民間

和爾善福寺木造阿弥陀如来坐像　・　合場町公民館木造薬師如来坐像

信仰やその形態を知る上で好箇の資料といえる。この他絵画作品では浄土系寺院に伝わる阿弥陀来迎図が注目された。これらは聖衆来迎，十一尊仏，三尊像に大別されるが，涅槃図と同様制作年時等を記すものが多く，近世の仏教資料として注目されるものであろう。工芸品も絵画と同様近世の作品が殆どであるが，小野味薬師寺の鰐口に「應永二三年八月日大願主藤原□國」の刻銘があって市内最古の在銘品として注目された。これら工芸品は半鐘，鰐口，証鼓，伏鐘等の梵音具（約100点）が殆どで，その半数以上に制作年時，制作者，願主等が刻まれていることが特記される。

# 長泉寺毘沙門天像・納入品

美術工芸研究室

54年度に行った奈良を中心とした近畿地区の文化財調査で特に注目されたのが奈良県広陵町長泉寺木造毘沙門天立像である。像高66.2cm，桧材，寄木造，彩色（一部箔押，切金文様）彫眼の技法になる。本体の木寄は，頭部は耳後の線で前後二材矧とし，髻部は別材製矧つけ，体部は根幹部を一材から彫成して背面に背枝を当てる。各内刳を施し，首枘差とするが，頭部前面材は体部材と共木から彫成し割矧いたかとみられる。これに両肩，右手肘，同袖部，両手首，右沓先等を更に矧つけている。現在，像の表面は古色におおわれているが，両相部には朱，甲の部分には漆箔や切金文様が残っており，造像時には華やかな彩色文様が施されていたものであろう。なお，右肩以下の部分は後補，右手前膊部，左手首，右沓先などが失われており，右手首は当初のものが残っている。この他，足下の邪鬼，岩座も後補のものと替っている。

甲で身を固め，腰をやや左に引き，左手で宝塔を捧げ，右手で戟を執って二匹の邪鬼を踏えて立つ通形の毘沙門天像である。体軀の均斉がよくとれ，しかも動きを控えたその姿態には破綻がなく，また面相や甲などの質感がよく表現され，甲の細部もよく整理されて全体に形よくすっきりと象形されている。このような表現や構造，技法などから本像の制作年時は平安時代末から鎌倉時代初めにかけての頃かと推定される。

この像で注目されるのは像内の内刳部に53枚の印仏が納入されていたことである。印仏は別表のように16束に折畳まれ，頭部に2束，体部に14束が納められ，その一部はコヨリで留められている。種類は毘沙門天印仏50枚が中心で，如来坐像印仏2枚，十一面観音立像印仏1枚および毘沙門天印仏中に不動明王坐像を押捺するもの1枚を混えている。紙質は楮紙，皮紙の二種が用いられ，各紙共幅30cm前後であるが長さは一定しない。各印仏共一軀一印で，毘沙門天は一紙に10段10列前後，如来像は9段7列および8段6列，十一面観音は一紙一軀，不動明王は毘沙門天に準じている。不動明王，毘沙門天の二種は簡略な図様であるが，如来像は小印ながら面相，法衣のひだ，蓮弁などを細かい線で入念にあらわし整った像様を示しており，その形から天台系の薬師如来かと考えられる。十一面観音は左手に蓮花，右手に念珠を執り，周

縁部に火焔を付した二重円相光を背にし，蓮花座上に立つ形である。さすがに大形の印仏だけあって胸飾，　裳のひだ，　持物など細かいとこまで丁寧にあらわしている。頬のふくらんだおだやかな面相，ふっくらとした質感のある体軀，頭上面を上下三段にあらわした頭部と体軀との均衡もよく，また光背や台座も形よく表現されていて，この種印仏中抜群の出来栄えを示している。十一面観音，不動明王，毘沙門天の組合せは天台系の教義に基づくものとみられ，これら53枚の印仏は，その表現に精粗の差があるが，納入状態や図様などから造像当時のものと認めることができよう。

像内に印仏を納入することは平安後期から行われ，鎌倉時代に例が多く，平安時代の作例では奈良県中川寺十輪院旧蔵木造毘沙門天立像（応保2年―1162，毘沙門天印仏），滋賀県寿福寺木造千手観音立像（嘉応2年―1170，千手観音印仏），長野県大平区木造千手観音立像（治承3年―1179，千手観音印仏）その他数例が知られているにすぎず，本像の印仏はこれらに次ぐ古例で，その出来栄えからも，像内納入印仏中貴重な在存といえる。なお，これだけの数の印仏が納入されていながら年紀，作者，願主等の記載がないのが惜しまれる。　　（田中　義恭）

| 名　称 | 版型 タテ | 版型 ヨコ | 像高 |
|---|---|---|---|
| | | | cm |
| 毘沙門天立像 | 5.9 | 2.5 | 5.0 |
| 如来坐像 | 5.2 | 4.7 | 3.75 |
| 不動明王坐像 | 4.1 | 2.8 | 2.9 |
| 十一面観音立像 | (38.0) | (16.0) | 31.5 |

印仏の寸法

| 納入部位 | 番号 | 一束の枚数 | 寸法 タテ | 寸法 ヨコ | 印仏数 列 | 印仏数 段 | 紙縒 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | cm | cm | | | 紙 | |
| 頭部納入 | 1 | 1 | 42 | 24.5 | 10 | 10 | 2 | |
| | 2 | 2 | 60 | 25.5 | 10 | 10 | 2 | |
| | | | 54 | 26.5 | 10 | 9 | 1 | 下部欠損 |
| 体部納入 | 1 | 3 | 62 | 30 | 10 | 10 | 2 | |
| | | | 51 | 34 | 13 | 8 | 1 | 下部欠損 |
| | | | 3.2 | 26 | 10 | 1 | 1 | 頭部のみ（コヨリか） |
| | 2 | 5 | 50 | 32 | 12 | 9 | 2 | |
| | | | 54 | 32 | 11 | 8 | 1 | |
| | | | 54 | 32 | 12 | 9 | 1 | 内1段5列 |
| | | | 54 | 32 | 12 | 9 | 1 | 内1段5列 |
| | | | 50 | 32 | 14 | 8 | 1 | 内2段12列 |
| | 3 | 1 | 71 | 27 | 9 | 11 | 2 | 下部欠損 |
| | 4 | 1 | 54 | 29 | 10 | 8 | 1 | |
| | 5 | 2 | 66 | 26.5 | 10 | 10 | 2 | |
| | | | 48 | 26.5 | 9 | 7 | 2 | |
| | 6 | 2 | 75 | 27 | 10 | 12 | 3 | 下部2段不動明王坐像 |
| | | | 74 | 25 | 10 | 10 | 2 | 内1段8列 |
| | 7 | 16 | 54 | 28 | 10 | 8 | 1 | 内2段11列 |
| | | | 46 | 30 | 10 | 7 | 1 | 内4段9列 |
| | | | 67 | 27.5 | 10 | 11 | 2 | 内2段9列 |
| | | | 58 | 28.5 | 10 | 9 | 2 | |
| | | | 20 | 28.5 | 11 | 3 | 1 | 十一面観音立像 |
| | | | 47 | 28 | 1 | 1 | 1 | 如来坐像 |
| | | | 48 | 31.5 | 7 | 9 | 1 | 如来坐像 |
| | | | 43 | 30 | 6 | 8 | 1 | |
| | | | 56 | 28 | 12 | 9 | 2 | |
| | | | 55 | 28 | 12 | 9 | 2 | |
| | | | 51 | 33 | 12 | 8 | 1 | |
| | | | 50 | 30 | 11 | 8 | 1 | 8枚分コヨリでとじる |
| | | | 45.5 | 26.5 | 6 | 9 | 1 | 内2段7列 |
| | | | 46.5 | 27 | 6～8 | 9 | 1 | 内 1段6列如来坐像 |
| | | | 54 | 34 | 13 | 8 | 1 | 5段7列 |
| | | | 63.5 | 26 | 10 | 10 | 2 | 3段8列 |
| | 8 | 8 | 60 | 31 | 11 | 9 | 2 | 内1段12列 |
| | | | 53 | 32 | 13 | 8 | 1 | 内1段8列 |
| | | | 45 | 24.5 | 9 | 7 | 1 | 内2段8列 |
| | | | 50 | 24.5 | 9 | 7 | 2 | 内 1段11列 |
| | | | 66.5 | 30.5 | 11 | 10 | 2 | 4段12列 |
| | | | 52.5 | 31.5 | 11～14 | 8 | 1 | 2段13列 |
| | | | 58 | 31.5 | 12 | 9 | 2 | 1段14列 |
| | | | 58 | 32.5 | 12 | 9 | 2 | 2段13列 |
| | 9 | 3 | 51 | 33.5 | 13～15 | 8 | 1 | 内 5段14列　1段15列 |
| | | | 45 | 28 | 12 | 7 | 2 | 内1段13列 |
| | | | 65.5 | 31 | 10 | 10 | 2 | |
| | 10 | 1 | 66 | 27 | 10 | 10 | 2 | |
| | 11 | 1 | 65.5 | 26.5 | 10 | 10 | 2 | |
| | 12 | 2 | 62.5 | 26.5 | 10 | 10 | 2 | |
| | | | 65.5 | 27.5 | 10 | 10 | 2 | |
| | 13 | 2 | 46 | 26.5 | 10 | 7 | 1 | |
| | | | 53.5 | 28.5 | 10 | 8 | 2 | |
| | 14 | 1 | 65.5 | 26.5 | 10 | 10 | 3 | |
| | 15 | 1 | 65.5 | 27 | 10 | 10 | 2 | |
| | 16 | 1 | 6.5 | 28 | 11 | 1 | 1 | （コヨリか） |

＊　16束　53枚　毘沙門4275、如来176、不動20　十一面1　計4469躯

＊　備考欄に尊名の記載のない分は毘沙門天立像

納入品及納入状況

# 香川県近世社寺建築の調査

建造物研究室

昭和52年度より始まった近世社寺建築の緊急調査は本年度で3年目を数え，当研究所は岡山県・山口県に次いで香川県を担当した。香川県は面積こそ1870㎢と狭いが，社寺の数は約2千あり単位面積の比率からみれば他県よりも密度は高い。殊にミニ88ケ所の札所を設けている小豆島をはじめとする瀬戸内海に点在する島嶼部を含んでいるのが特徴的である。

今回の調査件数（社寺数）と棟数を下表にあげる。各市町村に依頼した予備調査では，総社寺の約4分の1があがり，調査員が実査したそれ以降の調査の数は，一次調査は予備調査の約2分の1，二次調査は一次調査の約6分の1にあたる。二次調査の棟数が83とこれまでの調査に比べ少ないのは，一次調査の内容を充実させたことによる。したがって，二次調査対象の選定にあたってはかなりの厳選を余儀なくされ，いきおい年代の古いものを優先する結果となった。83棟の年代別内訳は17世紀46棟，18世紀33棟，19世紀4棟である。

調査建物中最も古いものは法泉寺生駒家霊廟（高松市·元和元·1615）である。一辺1.45mと小形ながら蟇股・木鼻などの細部様式も時代相応で，近世初頭4代54年たわにり讃岐一円を領した生駒時代の唯一の建物だけに貴重な存在である。生駒家のあとは寛永18年（1641）西讃の丸亀に山崎氏が（明暦4年以降は高極氏）寛永19年（1642）東讃の高松には松平家が入り以降の二藩制の基礎が確立する。高松初代藩主松平頼重は元禄八年（1695）に没するまでの間数多くの社寺を建立した。現在残っている17世紀の建物はほとんどこの頼重がかかわっているものといってよい。なかでも，慶安2年（1649）建立の大門をはじめ正保2年（1645）の睦魂社（旧三十番神堂），同時頃の幽深殿（旧護摩堂）など数多くの建物を擁する金刀比羅宮（琴平町），京都の石清水八幡を勧請したという石清尾八幡宮（高松市）の随身門，拝殿，釣殿，本殿（ともに17世紀末頃）の社殿群，自らの菩提寺として生前法然ゆかりの寺を再興した法然寺（高松市）などは著名である。この法然寺は高松の南方8粁の位置にある仏生山山頂を墓地にとり，比較的勾配の緩かな東斜面に境内が営まれている。伽藍が完成した寛文11年（1671）当時の建物としては，下から十王堂・涅槃門・三仏堂・祖師堂・本堂門・古宝蔵・鐘楼門・二尊堂・来迎堂の9棟が今なお残り，他の堂宇とともに一大伽藍を構成していてまさに藩主が直接営んだ寺院だけの景観をもっている。

| | 予備調査 | | 第一次調査 | | 第二次調査 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 件数 | 棟数 | 件数 | 棟数 | 件数 | 棟数 |
| 神社 | 203 | 443 | 60 | 119 | 15 | 23 |
| 寺院 | 307 | 704 | 143 | 382 | 36 | 60 |
| 計 | 510 | 1147 | 203 | 501 | 51 | 83 |

調査件数・棟数表

一方には，庶民信迎に支えられた弘法大師ゆかりの四国霊場八十八ケ所がある。香川県には67番から結番までの22ケ寺があるが，もちろん寺の由緒は各寺院によって異なり，観音寺（69番・観音寺市）本山寺（70番・豊中町）国分寺（80番・国分寺町）屋島寺

（84番・高松市）のように中世に建立された本堂（すべて国指定）をもつ寺もあるし，また，霊場参りが一般に流布する江戸時代になって再建整備された寺寺も多い。伽藍は普通南面し，正面に門を開いて境内中央に本堂を置き，その左右に大師堂•護摩堂•開山堂などの諸堂が建ち並び，これに鐘楼・塔など加わるという密教系寺院の一般的形態と変らない。弥谷寺（71番・三野町）白峯寺（81番・坂出町）根香寺（82番・高松市）八栗寺（85番・牟礼町）大窪寺（87番・長尾町）などのような山嶽寺院は，それぞれの地形に即した伽藍配置をもっている。

この中で最も古く，かつ最大規模の本堂は，志度寺（86番・志度町・寛文10・1670）で，桁行七間，梁間五間あり，これに三間の向拝がつく。内部はすべて拭板敷きで，梁間五間のうち前二間を外陣，奥三間を内陣にわけ，その両脇一間を脇陣にとるなど中世仏堂の色彩を濃厚に残す堂々たる本堂である。また，善通寺金堂（75番・善通寺市・元禄12・1699）は，三間裳階付きで，床は四半敷きとし身舎斗栱を二手先の詰組とするなど比較的忠実に禅宗様を伝承した例であり，道隆寺本堂（77番・多度津町・18世紀中）のように床を四半敷きにし，各部に禅宗様細部をもちいながら裳階建てとしない五間堂もある。これら五間以上の大形仏堂がままあるのに対し，数の上ではもちろん三間堂が最も多い。八栗寺本堂（宝永6・1709）や，金倉寺本堂（76番・善通寺市・明和6・1769）は，桁行10m近くあって三間堂としては大きい方に属する。

以上，香川県の近世社寺建築を代表させて高松初代藩主松平頼重造営のものと，四国霊場にかかるもののうちから数件を選んであげた。もちろん県下にはこれ以外にも優秀な建物をもつ社寺は多い。先ず神社では三間社流れ造の八幡神社本殿（仁尾町・寛文6・1666）が最も古い。また小規模な一間社流れ造ではあるが住吉神社本殿・山神神社本殿はともに寛文年間の建立で同一地域（土庄町）にあるのは注目される。その他17世紀の社殿として春日造では田村神社御供殿（高松市）垂水神社古本殿（丸亀市）などが，入母屋造では葛原八幡神社本殿（多度津町）木鳥神社本殿（丸亀市本島）などがあり，各形式が混在していることがわかる。札所以外の寺院で浄土真宗がある。県下寺院総数の約45%を占めなかでも興正派が多い。しかし建築としては古いものはなくほとんど18世紀末以降の真宗本堂として類型化されたのちのものである。日蓮では本門寺（三野町）の伽藍が整っている。

（細見　啓三）

田村神社社殿　　志度寺本堂

# 今井町の町並調査

建造物研究室

今年度の調査は，橿原市が事業主体となって今井町保全整備計画を策定するために行なったものである。昭和52年度・53年度の調査を引き継いで，今井町東北部の北尊坊地区・共栄町地区が調査対象となった。調査は大阪市立大学建築学教室が市から委託されたもので当研究所はこれに協力した。地区内すべての町家について平面・立面・断面を実測するとともに復原調査を行なった。これに並行して地区の歴史的調査を進め，今井町の成立と変遷を究明するとともに，昨年度までの成果に基き，実測調査の内容・方法をより精密に分類整理するよう試みた。すなわち，町家を平面型・架構型・立面型でそれぞれ分類して相互の関係を考察する一方，新たに住民の住まい方にも生活型を見い出して，それが特に敷地内における町家の配置や，間取りの変化とどのように関係するかを検討した。また立面型では，複数の町家の連続立面の中に特定のパターンを見い出し，それが町並の景観的特質を生み出す大きな要素となっていることを明らかにした。調査の成果は「橿原市今井町伝統的建造物群調査報告書」（橿原市　昭和55年3月）として公刊されている。

今年度調査地域は，旧環濠内の周辺部に当たるが，それぞれの地区でやや他と異った様相を見い出すことができた。北尊坊筋では特に北側の町家が背面を旧環濠に接しており，比較的敷地の奥行が広く，また間口の復原単位も広い傾向にある。現在も大規模町家が存続している。一方，共栄町地区でも明治までは東環濠を背にして大きな敷地を有していたが，明治末から大正初めにかけて環濠が埋めたてられるのに併ない敷地の細分化が進み，特に長屋が多く建てられたことによって利用単位が一層小さくなっている。したがって景観の上でも北尊坊地区と共栄町地区は対照的である。

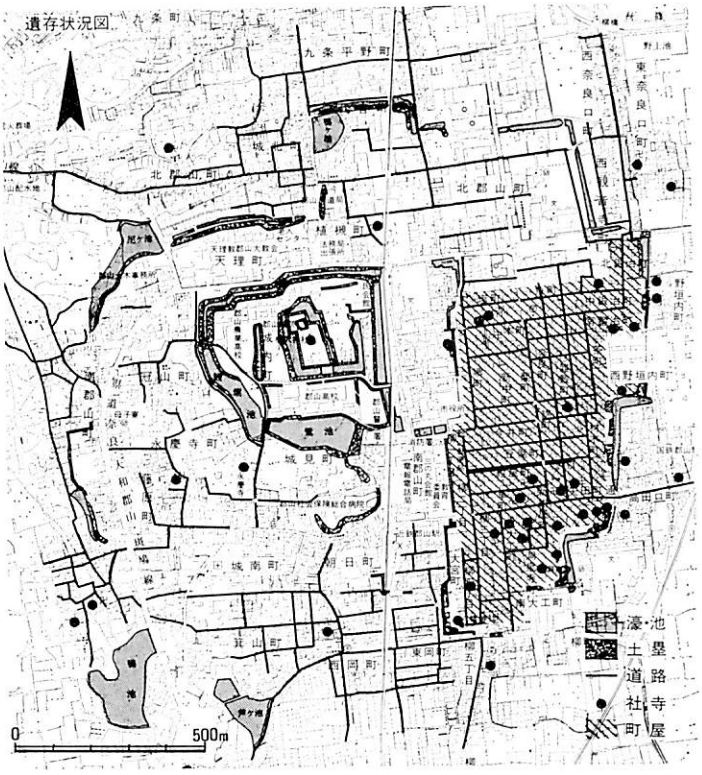
復原調査から明らかになったことのひとつに町家の改造過程があげられる。特に戸数の変動を併なう改造については今年度調査地域に好例が多い。これらは1)一戸建の分化，2)長屋各戸の結合，3)蔵などの住戸化，などの方法をとる。1)は当初は2例6室型の町家であったものに多く，奥列を独立させたり，土間境で仕切っており，土間が特に広い場合には土間の中央で仕切ることも行なって2戸に分割している。このような改造方法は幕末・明治期には既に現われている。2)は長屋の戸境壁を撤去して2戸を一戸に改めるもので，昭和戦後に多くみられる。3)には蔵を独立住宅にするものの他に長屋建にするものもみられ，明治時代前半頃の改造とみられる例が多い。このように各時代毎に改造方式の差がみられるのは興味深い。

なお調査地区内には順明寺・蓮明寺・西光寺の三寺があり，建立年代が明らかな堂宇を列記する。順明寺表門（寛永15年），西光寺本堂（享和3年）・鐘楼（元禄3年），蓮明寺本堂（正徳2年）・妙見堂（文政5年）・鐘楼（天保14年）がある。

（松本　修自・清水　真一）

# 大和郡山の文化財調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター




大和郡山市の近世城下における文化財調査で，地方中核都市として発展を目指す郡山の町づくりの手掛りを得ることを目的としている。今回の調査内容は，ⓐ近世城郭復元調査，ⓑ城郭遺存状況調査，ⓒ城内石垣調査，ⓓ城内植生調査，ⓔ城下町割・水路調査，ⓕ城下近世社寺調査，ⓖ城下町並調査，ⓗ保存と活用のための構想案の提示などである。以下に調査結果の概略を報告する。

城郭遺存状況調査は，江戸時代の城下絵図や現状航空写真をもとに現地踏査して行なった。中濠以内は石垣の一部に後世の補修がみられるが，全体として旧形を保っている。外濠及び土塁の遺存状況は，東及び北側で比較的良好であるのに対し，西及び南側では宅地化が進み大半は失なわれている。また濠の水質も工場・家庭排水の流入で汚濁が目立ち，富栄養化がかなり進行している。

城下町割・水路調査では，江戸後期の町割図や明治の地籍図と比較して，町割を区画する街路や背割水路も旧態をよく残していることがわかった。町家自体は，度重なる火災や天災で江戸末期以降の再建になるものが多く，また近年の建替えも目立つが，往時の面影を残す町並も本町や鍛冶町，紺屋町，洞泉寺など随所に残っている。

城下近世社寺調査では，城下の24件について，平面の実測・年代の確定の基本調査を行なった。全体的に17世紀中頃から18世紀中頃に建立した建物が多く残っている。

調査は次年度も継続され，文化財評価はもとより，町づくりの指標となるべきそれらの保存・活用の諸提言を行なう予定である。

（亀井　伸雄・本中　　真）

# 第2回集落町並保存対策研究集会

昭和54年12月4，5日奈良県文化会館小ホール

建造物研究室

今回の集会は建築史，文化財関係以外から3人の講演者を迎え，昨年とは別の視点から保存上の諸問題を基本的且つ多角的に検討することにした。

所長挨拶についで，伝統的建造物群保存の現況について，岡田英男文化庁建造物課文化財主任調査官，既刊の集落町並調査報告書について，上野邦一当研究所研究員から報告があり，二日間わたる4氏の講演（梗概後記）の後，伊藤鄭爾氏司会の下で質疑討論を行なった。

○地域システムにおける開発と保存の機能について　　筑波大学教授　大塩　俊介氏

(1)開発と保存のアポリア，(2)社会開発の社会学，(3)社会システムの機能モデルと保存の意味，(4)保存地区の類型と保存政策の問題点

町並の指定は地域開発，都市開発，社会開発等のメカニズムの中で保存を考えなければならない。地域社会システムの概念の中では保存と開発は必ずしも対立するものではない。システムの機能に関するモデルとして4個の機能領域（目標，適応，統合，潜在性）が考えられ互に適合すると目的が達成できる。町並を指定することによって，現在と将来起り得る事態を把握，予想するためには，その地域のシステムの性格を何らかの基準により類型化する必要がある。

○建築と都市　　横浜市技監　田村　明氏

町並保存は単体保存から面へという空間的転換だけでなく時間的転換，一時点での凍結から継続的な生活そのものが対象に含まれるにいたった。これに対応する為に，従来の縦割行政を改め，町造りは国がきめるのでなく，それぞれの町自体で，住民全体の歴史的な地域文化を表わす共同作品として町を作ってゆくこと，都市の骨格，公共空間造りを主体としていた都市計画に欠落していた一般建築を包含させること，建築は都市の中の建築であるという認識に立つべきであること，などを提案したい。

○町と筋をめぐって―資料保存の提言―　　京都大学助教授　足利　健亮氏

保存は対象となるものが時代の流れから取残され，変化とのずれが生じている状態になって叫ばれるようになる。ほっておけば消滅するわけである。農村集落，条里，町並，町名などの消滅は，社会全体の動き，なかんずく就業処点，生活処点の分離ないし移動によるものが多い。変化の趨勢には抗し難いから変化容認の上でのきちんとした資料保存をすべきである。

○体験的集落町並保存論　　工学院大学学長　伊藤　鄭爾氏

(1)序，(2)哲学の必要，(3)歴史的地区の破壊要因，(4)保存へのアプローチ，(5)保存地区の設定，(6)歴史的地区の特性，

町並の保存は創造であり，古いものの再生である。今不足しているのは保存の哲学である。保存には独自の確固たる価値観に立つ行政当局，住民，多くの問題を総合できるジエネラリストでもある専門家の三者が信頼関係のもとに仕事を進めてゆくことが望ましい。（吉田　靖）

# 仁和寺所蔵「伝聞抄」および「大疏要勘抄」の紙背文書

歴　史　研　究　室

仁和寺の塔中蔵聖教第137函の聖教には，紙背文書のあるものが数点あるが，そのうちの「伝聞抄」および「大疏要勘抄」の紙背文書のいくつかを紹介する。

「伝聞抄」（塔中蔵第137函30号3）は，巻上中下の3冊からなり，3冊とも縦25cm，横16.5cmほどの袋綴装となっている。紙数は表紙共で巻上37紙，巻中34紙，巻下28紙あり，そのすべてに紙背文書がある。表紙に「伝聞抄巻上　印玄」（巻上）とあり，また奥書からみてわかるように，「伝聞抄」は法印印玄が「伝流抄」諸尊法を授けられた受法記で，その時期は応長元年（1311）8月から翌年4月におよんでいる。印玄は仁和寺尊寿院の住持で，「伝流抄」の撰者ともいわれる真光院禅助から付法をうけたことがしられるが（「仁和寺諸院家記」），その受法記にあたるものかもしれない。紙背文書には，（2）のごとく寺主御房の他界を訪う内容の書状が数多くあるが，切断等の欠損や錯簡のため，差出・充所や，本紙・礼紙の接続などは判然としない。熊野詣とみえる（1）もそれに関わるものであろう。印玄は「少輔」といわれ「寺主承禅息」であるが，書状の充所がもし印玄充ならば，ここにみられる応長元年と思われる8月上旬に没した寺主は承禅にあたろうか。その他，年紀の明確なものとして，応長元年9月29日の諷誦文（3，4，6，7）と，荘名未詳の荘園内での殺生禁断に関する書状（5）をあげた。

なお3冊本とは別に同体裁で，正和元年（1312）9月・嘉暦元年（1326）5月分を記した「伝聞抄」1冊(30号4)があるが，その奥書に「伝聞抄三巻附録也 印玄法印御自筆 心蓮院」とあり，3冊本とともに印玄自筆本で，時期は降るが，内容的には巻中と下の間に入いるものである。

「大疏要勘抄」は巻第八上下の2巻（同函66号）および巻次未詳2巻（67号）の4巻あり，巻子本で，巻第八下のみ完存で，他は欠損がある。奥書によれば，嘉暦2年，性然の筆にかかるもので，江戸末の包紙の表書には「東寺法輪院之本歟」とある。紙数は巻第八上下でそれぞれ17，18紙，巻次未詳の断簡で8，12紙あり，切紙も多く含まれるが，これまた表紙をのぞきほぼ紙背文書がみられる。紙背文書には，「大疏要勘抄」を書写した性然の書状（2など）のほか，賀嶋荘関係文書（1，3，4，8～10）や，大僧正以下僧名歴名（5～7）・出仕交名などがある。賀嶋荘は，摂津国西成郡にあった荘園で，当初は仁和寺青蓮寺領であったが，西園寺公経のとき，彼の所領となっている。鎌倉後期の，この時期に大乗講捧物役については仁和寺に納めていたものであろうか。また延慶3年（1310）と年紀にみえるもの（7）をはじめとする，大僧正以下の僧綱を書きあげた一連のものは，筆跡のちがいにより数群に分類できるが，或る寺院にかかわる僧綱補任抄のごときものと思われ，掲載したもの以外なお数紙にわたる。出仕交名は掲載しなかったが，包紙に「東寺西院月次日次等出仕録歟」とみえるものにあたる。年未詳5月分につき，日次に出仕の僧名を掲げ，そのなかに性然の名もみえる。

（綾村　宏）

沙汰□そも彼も正□問答已後、□所へも可申子細之□にて候き、委細事性然法印可申上候、以此旨可令申給候、恐々謹言、

十一月十日（切封墨引）　□□

□□

(4)厳道書状（折紙）　（同　第12紙）

（折紙端裏書）「□□止中二五十三」

日向九郎能直代□（敬カ）道申賀嶋御庄□（美カ）録宮神主職事、前御代番訴陳候之刻、以当御領被進此御方候之間、欲令言上子細候之処、如御庄家披露者、被召置闕所候云々、先以驚入候、若如之御沙汰候之条、不便次第候、以此旨可有御披露候哉、恐惶謹言、

正中二年五月十二日　□（敬カ）道状

(5)僧綱歴名　（同　第14紙）

大僧正　定助

僧　正　経助　信勝　去年広義門□（院）御産御祈、前大□道昭金剛□□□□、

権大僧都覚久　顕瑜

覚賀　良慶

顕潤　公深

昭弁　成秀

□命　慈慶

厳昌　印朗

厳念　清厳

権少僧都祐玄　胤誉房誉大僧都辞退替

観高　覚賀

□宝　源助雲助大僧正辞退替

実宣　増仁

(6)僧綱歴名　（同　第15紙）

大僧正　雲助広義門院御産御祈降三世法賞

権大僧都隆淳　朝基

円雅　有賀

(7)僧綱歴名　（第八巻下　第4紙）

□□

法　印　弁朗　実寿

宗守

法　眼　成助　運紹

法　橋　済賢

延慶三年二月廿一日

□（法）□　□□（功カ）

(8)某書状　（巻次未詳㈠　第7紙）

賀嶋庄役大乗講捧□（物）事、申入真光院御房、頼禅返状如此、□可為□（何カ）様候乎、諸寺役庁役□付新司有沙汰遣候て、□是様□不可申、尚□□（宜カ）被及候上、□々皆無沙汰間、□□申候、賜御返□可申入候、恐々謹言、

□　□□

(9)某書状　（巻次未詳㈠　第9紙）

（前欠）

損亡拂地之時、被免寺役庁□（役カ）等之条、先傍例候歟、然而随分□□□□、以今年々貢可沙汰入候由、下知候了、其次第先日則申入□処、□可被付所務於寺家候□、□申候□□存候、無相違（×□□）□様、御伺可申沙汰給候、恐々□

七月卅日　□□

(10)某書状　（同　第12紙）

年始御吉事最前申籠候早、猶以不可有尽期之御事候乎、

抑賀嶋吉書御使事可有御計候歟、検断以下□条々無心本相存候、且窮冬□定使上洛之後結解未尽候、

〔「伝聞抄」奥書〕

（巻上）　印玄法印隠道後号文妙上人御伝受記也

心　蓮　院

（巻中）　心　蓮　院

（巻下）　伝流抄印玄法印御受法記也

心　蓮　院

〔「大疏要勘抄」奥書〕

（第八巻下）

嘉暦二年六月廿九日書之　性然

（巻次未詳㈠）

嘉暦二年五月十八日書之　性然

〔「伝聞抄」紙背文書（抄）〕

(1)頼禅書状　（巻上　第12紙）

熊野詣酒肴事申入候之処、御禁忌之上者、不可及其沙汰候由、御気色候也、又猶〻此御事歎入候、毎事於今者期御上洛□〔之〕時候、恐〻謹言、

八月廿八日　頼□〔禅カ〕

(2)沙弥縁了書状　（同　第33・34紙）

寺主御房御他界事承候、返〻歎存候、年来大小事申承候之処、加様に候へハ、一身の歎存候、御心中□〔察〕密申候、未入見参候に如此令申候之条恐存候、何事なく候とも、故寺主御房の御時に、

（中欠）

謹言、

九月十二日　沙弥縁了（花押）

謹上　少輔律師御房

(3)源某諷誦文　（巻下　第1紙）

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施一裏

右諷誦所請如件、敬白、

応長元年九月廿九日　源□

(4)某諷誦文　（同　第2紙）

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施一裏

右為過去幽霊出離生死往□、諷誦所請如件、敬白、

応長元年九月廿九日　□□

(5)某書状　（同　第11紙）

□　□

申候、恩可有御披露候也、

当庄殺生禁断事、八日自円満寺聖来申候、制禁事被仰付長保寺候了、□尤可存禁制之方便、就□〔其カ〕可入不等於網曳場之由相触置、□致其沙汰云〻、可為何様候乎、随御□□可存知仕之由、可令申入給候、

(6)比丘尼某諷誦文　（同　第27紙）

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施一裏

右諷誦所請如件、敬白、

応長元年九月廿九日　比丘尼如□

(7)某諷誦文　（同　第28紙）

□〔敬白〕

□□

請諷誦事

三宝衆僧御布施

夫以宿一樹之景、曠劫因□□□流曩劫縁、何況夫婦併儷□□、爰聖霊早世当士之忘、依□□鳴鳧磬、早出六道昏衢□□剰往詣、乃至法界平等済□□所請如件、敬白、

応長元年九月廿九日　□□

〔「大疏要勘抄」紙背文書（抄）〕

(1)某奉書　（第八巻上　第3紙）

賀嶋庄役大乗□〔講〕捧物事、学頭僧正状副具書如此、何様候□、恩可被致沙汰之由被仰□候也、恐〻謹言、

十二月八日　□□〔性然カ〕

卿法印御房

(2)性然書状　（同　第5紙）

一荷進上候、可令入見参給候、毎事参上之時可申入候之由、可有御披露候、性然恐惶敬白、

十二月十八日　性然

□□御□〔房〕

「〔端裏ウワ書〕　□□〔性然カ〕」

(3)某書状　（同　第11紙）

（前欠）

定申旨候歟、其以後□候て□、御返事をハ可申□候、御許□候き、落居無恩候、可申案□候也、内〻沙汰候しハ、□□堂為当庄下司納取、無何其足□失候哉、又他所雑掌にて無得□次目ハ已後、所務ニも可懸候に、是□無其儀為職人無故所納取公□〔カ〕□、何不出候哉、其上又彼御捧物□□〔日カ〕以後、当院家被充行候、所務□□こそ無力候へ、所務以□役尤不□事候哉、其上又拂地今年作法□以水□之

# 平城宮跡と平城京跡の調査

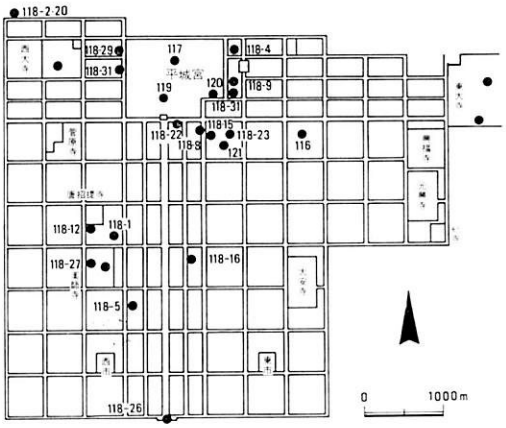
平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では，1979年度において第116次から第121次までの43件に及ぶ発掘調査を行なった。平城宮内では，推定第一次内裏東寄りの区画の調査（第117次）及び推定第一次朝堂院南門地区の調査（第119次）のほか，東院園地西南地区の調査（第120次）を行なった。

| 調査地区 | 遺跡・調査次数 | 調査期間 | 面積 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 6ABD・BQ | 平城宮　第117次 | 79．9．19～80．1．12 | 32.00a | 第一次内裏 |
| 6ABV・BW | 平城宮　第119次 | 79．6．15～79．11．10 | 21.30a | 第一次朝堂院南門 |
| 6ALF-R・Q | 平城宮　第120次 | 80．1．18～80．5．6 | 25.00a | 東院園地西南 |
| 6ADA-H | 平城宮　第118－10次 | 79．8．15～79．8．17 | 0.26a | 宮西北部 |
| 6ADA-F | 平城宮　第118－11次 | 79．8．17～79．8．18 | 0.10a | 北面大垣 |
| 6ABN-T | 平城宮　第118－13次 | 79．9．13 | 0.42a | 宮西北部 |
| 6ACD-A | 平城宮　第118－32次 | 80．3．17 | 0.09a | 宮東辺部 |
| 6AFG-N・O | 平城京　第116次 | 79．3．23～79．7．19 | 36.40a | 左京三条四坊七坪 |
| 6AFI-Q | 平城京　第121次 | 80．1．9～80．2．4 | 4.00a | 左京三条二坊六坪 |
| 6AGO-F | 平城京　第118－1次 | 79．4．10～79．4．26 | 1.10a | 右京五条二坊五坪 |
| 6BSD | 平城京　第118－2・20次 | 79．4．24～79．4．25<br>79．11．7～79．11．16 | 0.03a<br>0.96a | 称徳天皇御山荘推定地 |
| 6BFK-Q | 平城京　第118－3次 | 79．5．26～79．5．29 | 0.10a | 法華寺旧境内 |
| 6AFC | 平城京　第118－4次 | 79．5．7～79．5．16 | 0.74a | 左京一条二坊十五坪 |
| 6AI E | 平城京　第118－5次 | 79．5．14～79．5．17 | 0.61a | 右京七条一坊十五坪 |
| 6AGR-B | 平城京　第118－6次 | 79．5．30～79．6．4 | 0.40a | 北辺坊二坊二坪 |
| 6AFJ-V | 平城京　第118－8次 | 79．7．4～79．8．5 | 5.88a | 左京三条一坊十五坪 |
| 6BFK | 平城京　第118－9次 | 79．7．23～79．7．31 | 0.63a | 法華寺旧境内 |
| 6AGO | 平城京　第118－12次 | 79．8．27～79．8．30 | 0.25a | 右京五条二坊十四坪 |
| 6AFC | 平城京　第118－14次 | 79．9．21 | 0.14a | 左京一条二坊四坪 |
| 6AFI-R | 平城京　第118－15次 | 79．10．2～79．10．6 | 1.50a | 左京三条二坊二坪 |
| 6AHD | 平城京　第118－16次 | 79．10．11～79．10．17 | 1.40a | 左京六条一坊十坪 |
| 6ABA-A | 平城京　第118－18次 | 79．10．26～79．10．29 | 0.18 | 宮外北方 |
| 6AFJ | 平城京　第118－22次 | 79．12．3～79．12．6 | 0.35a | 左京三条一坊八坪 |
| 6AFI-R | 平城京　第118－23次 | 79．12．17～79．12．21 | 1.60a | 左京三条二坊七坪 |
| 6BFK-T | 平城京　第118－25次 | 80．1．16　9 | 0.12a | 法華寺境内 |
| 6ARJ | 平城京　第118－26次 | 80．1．28～80．1．30 | 0.30a | 羅城門跡 |
| 6BYS | 平城京　第118－27次 | 80．1．31～80．2．4 | 0.25a | 薬師寺西面大垣 |
| 6AGA-C・E | 平城京　第118－29次 | 80．2．8～80．3．4 | 5.70a | 右京一条二坊西一坊大路 |
| 6BFK-B | 平城京　第118－30次 | 80．2．16～80．2．25 | 0.60a | 法華寺阿弥陀浄土院 |
| 6AGA | 平城京　第118－31次 | 80．2．21～80．2．26 | 0.46a | 右京一条二坊西一坊大路 |
| | 第118－7次 | 79．6．14～79．6．15 | 0.07a | 御前池北辺 |
| | 第118－17次 | 79．10．8 | 0.02a | 水上池北辺 |
| | 第118－19次 | 79．10．31 | 0.01a | 宮外北方 |
| | 第118－24次 | 80．1．8 | 0.01a | 宮外北方 |
| 6BYS | 薬師寺 | 79．8．6～79．10．5 | 9.00a | 東僧房 |
| 6BTD | 東大寺 | 79．8．27～79．9．18 | 6.60a | 西南院 |
| 6BTD | 東大寺 | 79．11．20～79．12．4 | 1.02a | 僧房北方 |
| 6BSD | 西大寺 | 79．10．23～79．11．1 | 2.14a | 西塔南 |
| 6BHE | 法隆寺 | 79．8．27～79．9．6 | 0.6 a | 東院西面築地 |
| 6BHR | 法隆寺 | 80．2．25～80．4．12 | 3.87a | 西院西北方 |

平城宮跡と平城京跡発掘状況

平城京内では，近年の市街地の拡大に伴ない開発事業の事前調査を行なう例が増えている。左京三条四坊七坪の奈良郵便局建設予定地の調査(第116次)をはじめ，特別史跡左京三条二坊六坪宮跡庭園での奈良市民文化センター建設に伴なう調査(第121次)のほか，条坊遺構確認のための小面積の調査を行ない，数多くの成果を上げている。さらに，京内諸寺院でも建築物の建設計画に伴ない，薬師寺東僧坊跡や西大寺西塔南などの調査を行なった。



平城京内発掘調査位置図

以下に主要な調査の概要を報告する。

1．平城宮跡の調査

**推定第一次内裏地区の調査（第117次）**　平城宮の中央朱雀門の北方地域は推定第一次内裏・朝堂院地域と呼ばれている。今回の調査地は推定第一次内裏東半部第27次調査地と第89次調査地との間で，調査区の地形は北側で大きな段差がつき，南側が低く，やや東南にゆるやかに傾斜しており，ほぼ中央には南北に奈良時代の高さ1.5mの土塁がつらなっている。

遺構　今回検出した主な遺構は塼積擁壁・石積擁壁・斜道・築地回廊・築地・土塁・建物2棟・塀3条・井戸1基・溝8条・石敷広場・足場穴・土壙であり，第1次内裏地区は区画の変遷から3時期に区分できる。

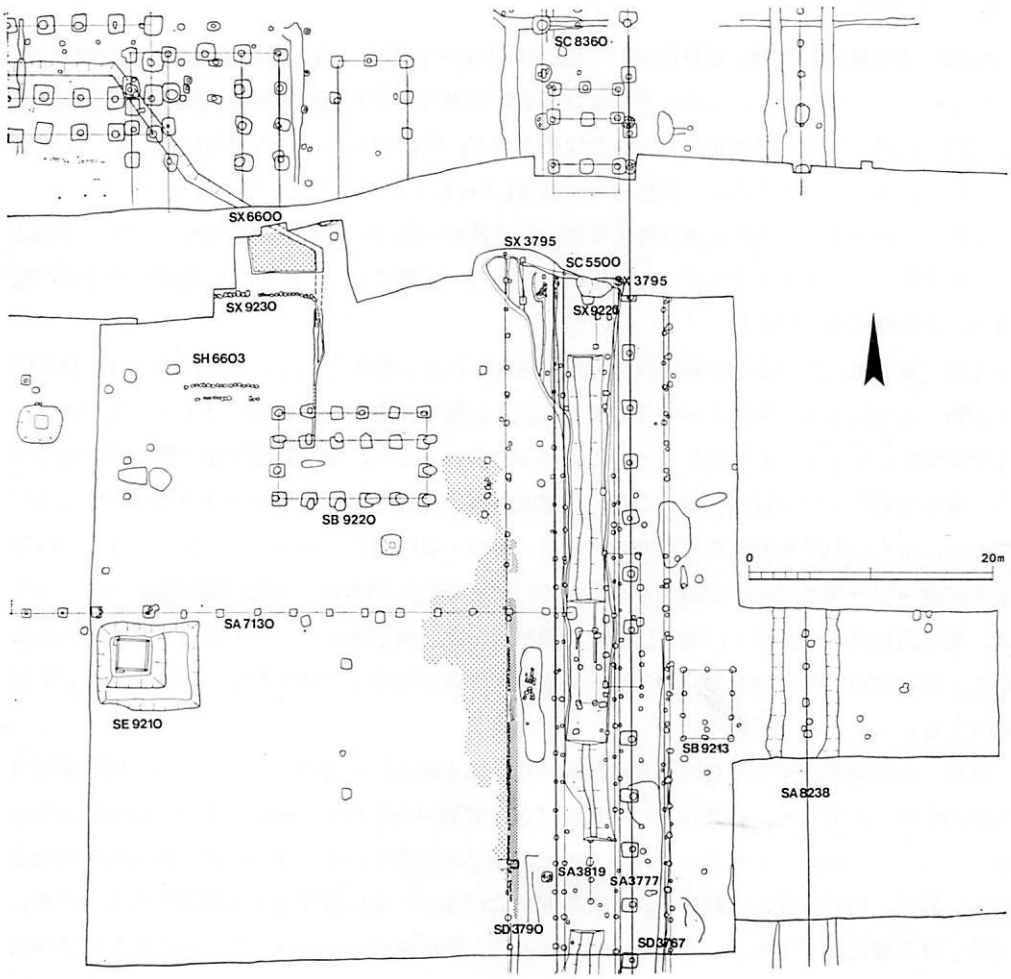
A期　第1次内裏の東面は築地回廊・塀で区画される。築地回廊ＳＣ5500は雨落溝ＳＤ3767・3790，足場穴ＳＳ3795によって復原できる。この築地回廊の両雨落溝には上・下2層あり，また建築時の足場穴にも時期を異にするものがあることより，築地回廊は建て替えが想定できる。塀ＳＡ3777を今回11間分検出した。柱間は約4.6m等間で調査区のほぼ中央で1間分欠けており，出入口が想定できる。東面の区画は，第27・41次調査の所見を加えれば，A期の中で築地回廊→塀→築地回廊の変遷が認められる。塼積擁壁ＳＸ6600は築地回廊に直接とりつかずに，最終的には南にまがり，築地回廊との間約15mが北側の壇にとりつく斜道ＳＦ9232—Aとなる。塼積擁壁の塼は残りの良い所でも基底部の2段を検出したにすぎない。壇の下は石敷広場である。

B期　この時期の東西築地回廊ＳＣ8360の痕跡は本調査区では検出していない。塼積擁壁ＳＸ6600が埋めたてられ，約20m南に石積擁壁ＳＸ9230が築かれる。検出したのは石積擁壁基底部の一段とその抜取穴である。壇にとりつく斜道は傾斜をゆるめて存続する。斜道が平坦面となる位置に，桁行5間，梁行3間，8尺等間の北庇をもつ東西棟建物ＳＢ9220がたてられる。壇の下は石敷広場であるが，発掘区の西端中央部，石積擁壁の約30m南に，井戸ＳＥ9210が掘られる。井戸の掘形は東西8m，南北7mの大規模なもので，2段掘りをしており，深さは約

4ｍある。井戸枠は井籠組で，現在4段残存しており，下から板・校木を交互に組む特異な構造で，高さ80cm，内法230cmの，宮内最大の井戸である。校木は校倉の転用材である。

C期　築地ＳＡ3819Ａが土塁ＳＡ3819Ｂに改作され，２小期にわけられる。石積擁壁は存続し，壇の下は石敷広場である。$C_1$期　築地ＳＡ3819Ａで東西が画される。東西塀ＳＡ7130は井戸ＳＥ9201の北側に構築される。今回13間分検出した。柱間は10尺等間，井戸の部分では14尺，築地には７尺で取りつく。$C_2$期　築地は土塁に改作される。 土塁は最大幅３ｍで，高さ1.5ｍ残存している。その東約18ｍに南北塀ＳＡ8238が作られる。土塁と塀の間には桁行３間，梁行２間の南北棟建物ＳＢ9213が建つ。

遺物　瓦は埋積擁壁ＳＸ6600を埋めたてた所から 平城宮瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老５年）の瓦が出土した他は第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）の瓦が多数を占める。土器の出土量はきわめて少ない。井戸ＳＥ9210からは10世紀代の土師器が出土し，その抜取穴からは11世紀代の瓦



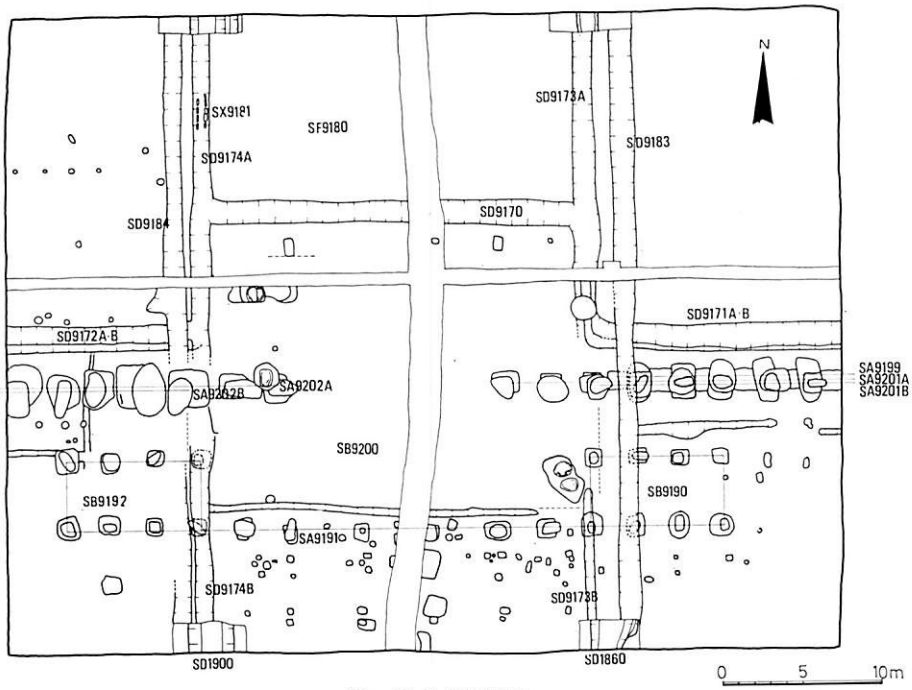

第117次発掘遺構図

器が出土した。この他同井戸から櫛・曲物や木簡が1点出土し，また井戸抜取穴から鉄鎌が1点出土した。

まとめ　今回の調査で第一次内裏地区東半部の調査は終了し，この地区の全貌をほぼ明らかにすることができた。従来の調査成果をふまえてこの地区全体を概観する。A期（平城遷都～天平勝宝末年）東西約180m，南北320mの区画を築地回廊で画す。北から約⅓の位置に塼積擁壁が築かれ，北側は南側に比して一段高い段となる。この壇上には大規模な基壇建物が建てられる。壇の下は石敷広場である。B期（天平宝字年間～奈良時代末）A期の区画と東西幅は変わらずに，南北ともに縮められ，約185mの規模となる。この時期も築地回廊で区画される。壇上には正殿を中心に10尺方眼で割付けられた多数の殿舎が整然と建ちならぶ。壇の下は石敷の広場である。C期（奈良時代末～平安時代初頭）B期の区画を踏襲するが，築地回廊が築地に改作される。壇・井戸はこの時期にも存続する。壇上には正殿を中心として塀による仕切りを多用し，平安宮内裏の古図に似た配置をとり，内裏的な様相を示す。壇の下は石敷広場で，南門は小規模になる。この門の南には大規模な建物が建てられる。

**推定第一次朝堂院の調査（第119次）**　推定第一次朝堂院地区ではこれまでに第27・72・75・77・97・102・111次調査を実施し，北・東辺の様相が明らかになっている。今回の調査は南門の検出を目的としている。検出した主な遺構は，建物4棟・掘立柱塀6条・溝5条・道路1条などである。これらは6時期に区分できる。

A期以前　平城宮造営以前の時期で，下つ道の東西側溝SD1860・1900がある。溝心心距離




第119次発掘遺構図

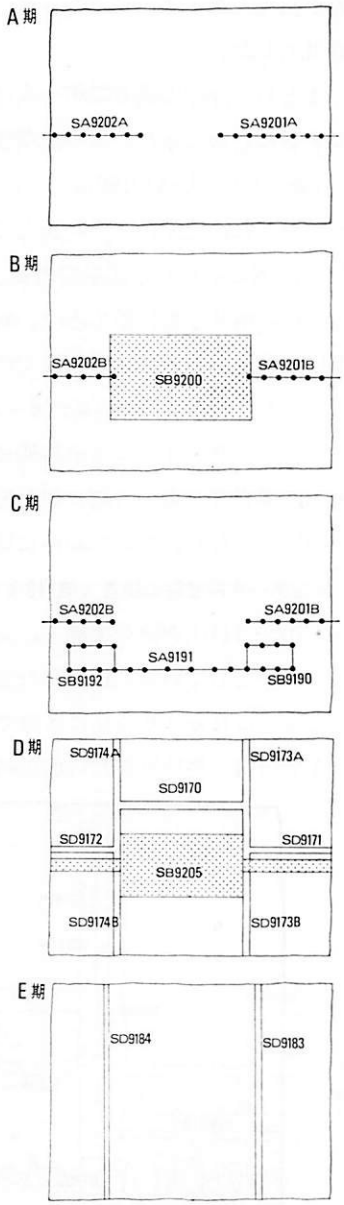
は北で20.05m，南で24.9m。 朱雀門地区（第16・17次）では24.5mであった。

A期　平城宮造営当初の時期。東西塀ＳＡ9199・9201Ａ・9202Ａで朝堂院南辺を画す。ＳＡ9201Ａ・9202Ａは朝堂院南北中軸線に対称で， その間（50尺）は閉塞しない。内側の柱掘形はともにＢ期のＳＢ9200の掘込地業下で検出。ＳＡ9199はＳＡ9201Ａより古い。

Ｂ期　朝堂院南門ＳＢ9200と東西塀ＳＡ9201Ｂ・9202Ｂ及びＳＦ9180を設けた時期。ＳＢ9200は基壇上にたつ東西棟礎石建物であるが，基壇がほとんど削平され，掘込地業の範囲（26.0×16.0m，深さ0.4m）を確認したにとどまる。 土壙出土の礎石４個は柱座や地覆座を造出す。ＳＡ9201Ｂ・9202ＢはＳＢ9200妻側中央に取付く。ＳＦ9180はＳＢ9200北側の玉石敷道路。 東はＳＤ9173Ａ，西はＳＤ9174Ａ付近で終る。

Ｃ期　ＳＢ9200の廃絶後・掘立柱建物ＳＢ9190・9192と両者をつなぐ東西塀ＳＡ9191で朝堂院南辺中央部を閉塞した時期。ＳＢ9190・9192は同じ規模の東西棟（１×３間），ＳＡ9191は７間。ＳＡ9201Ｂ・9202Ｂはこの時期にも存続する。

Ｄ期　溝の配置から朝堂院南門ＳＢ9205が造営されたと考える時期で，２小期に区分できる。$D_1$期には東西溝ＳＤ9170・9171Ａ・9172Ａ，南北溝ＳＤ9173Ａ・9174Ａがあり， 相互に接続する。 ＳＢ9205はＳＤ9170の南，ＳＤ9173Ａ・9174Ａの間（溝心々距離約24.2m）に想定できる。ＳＢ9200より小規模になる。ＳＢ9205には第一次朝堂院地区東辺の調査結果から築地塀が取付く可能性が強く， ＳＤ9171Ａ・9172Ａはその北雨落溝と考える。



第119次遺構変遷図

$D_2$期にはＳＤ9171Ａ・9172Ａを改修し， ＳＤ9173Ａ・9174Ａを南に直流させる（ＳＤ9171Ｂ・9172Ｂ・9173Ｂ・9174Ｂ）。ＳＤ9174の北部には東西両岸に塼と凝灰岩を並べた渡溝施設ＳＸ9181（長さ2.2m）がある。

Ｅ期　ＳＢ9205が廃絶した後の時期で，南北溝ＳＤ9183・9184があるにすぎない。溝心々距離は約28.3m。

遺物　土器は少ないが，瓦は多量に出土した。 主要なものは軒瓦229点，鬼瓦５点。軒瓦は

平城宮第Ⅰ期（和銅元年～養老5）の瓦が90％を占める。その多くは藤原宮式（85点）と6284―6668型式（各36・39点）の1組。鬼瓦はすべて獣身文である。

まとめ　これまでの調査によって推定第一次朝堂院地区の東西規模は約720尺(215m）に復原している。南北規模は第77次の推定第一次大極殿地区南門の調査と今回の朝堂院南門の調査によって約960尺（285m）と確定した。また，朝堂院南門地区では5時期の変遷があり，とくに門は中断期（C期）をはさんで建替えられていることが判明した。各時期の絶対年代を決定する資料は得られなかったが，おおむねA期が8世紀初頭，B期が8世紀前半，C期が8世紀中頃，D期がC期以後奈良時代末まで，E期が9世紀初めの平城上皇の時期に比定できる。

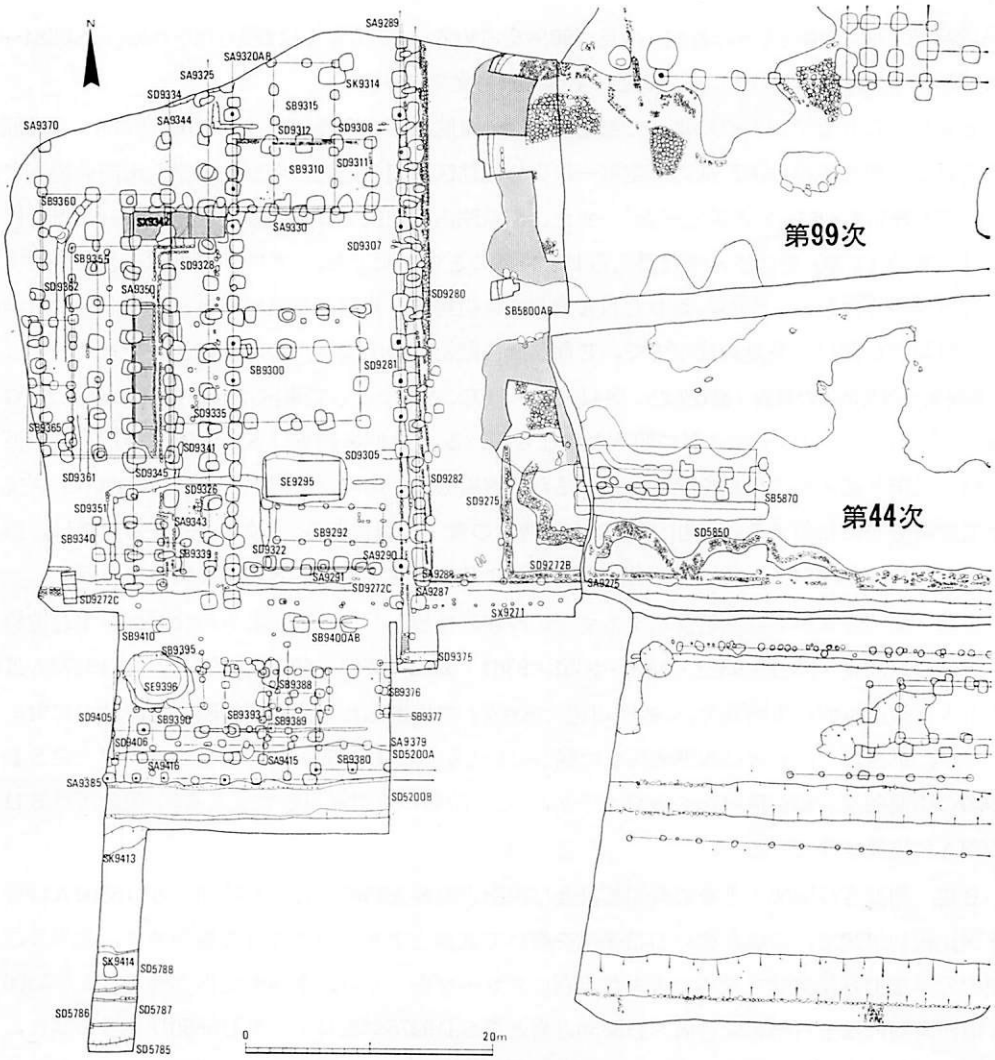
**東院園池西南地区の調査（第120次）**　第44・99・110次調査によって東院地区東南隅の園池（SG5800）とその周辺の様相が次第に明らかになっている。今回の調査はSG5800の西辺及び南面大垣・二条々間大路の様相を明らかにするため実施した。地山は灰黒粘土・青灰砂がベースで東南に緩やかに傾斜する。地山面には古墳時代の溝・土壙がある。検出した主な遺構は，掘立柱建物18棟・塀14条・溝28条・井戸2基・池1基・通路1条で，8時期に区分できる。

A期　東院造営から庭園造営に至るまでの時期。建物としてまとまるものはない。主な遺構に溝SD9272A・9321・9322・9326・9351・9361・9362・5785・5200Aがある。SD9272Aは南面大垣築造以前の東西溝で，的門周辺（第39次）で検出した東西塀SA5505と時期的に対応するが，東西塀そのものは本調査区まで延びていない。SD5785・5200Aは二条々間大路SF5940の南北側溝。両側溝はのち改修するが，この時期の道路幅が最大である。他の溝はSD9272Aに接続させている。

B期　園池SG5800Aとその付属施設及び南面大垣SA5505を設けた時期。SG5800Aは汀線が比較的単調で，傾斜の強い石積擁壁を築いて護岸とする。西辺では改修があり，北岸及び南岸の一部で石積擁壁を埋めて大きな玉石のスロープをつくり，半島を突出させる。SG5800Aの西南隅には玉石組の蛇行溝SD5850と南北溝SD9275が取付く。SD5850は曲水の宴に，SD9275は常時の排水に利用されたのであろう。園池の西は東面大垣から西約70mに位置する玉石組の南北溝SD9280で画す。その西には南北塀SA9343・9344で西辺を画す北庇付東西棟建物SB9300と井戸SE9295を配す。SA5505は基壇積土の一部と掘込地業を確認した。玉石組の北雨落溝SD9272Bと南雨落溝SD9375の心々距離は20尺，築地基底幅は寄柱痕跡から7尺に復原できる。

C期　園池西方を改作した時期。園池を画すSD9280を廃し，玉石溝SD9281・9335を伴う南北塀SA9287・9325を設けて幅16.6mの南北に細長い区画をつくる。この区画の北には雨落溝SD9308を伴う東西棟建物SB9310，南には目隠塀SA9291を設けて南面大垣に門SB9400Aを開く。SB9400Aは東院地区の西辺から約⅔に位置する。SE9295はこの時期にも存続する可能性が強い。

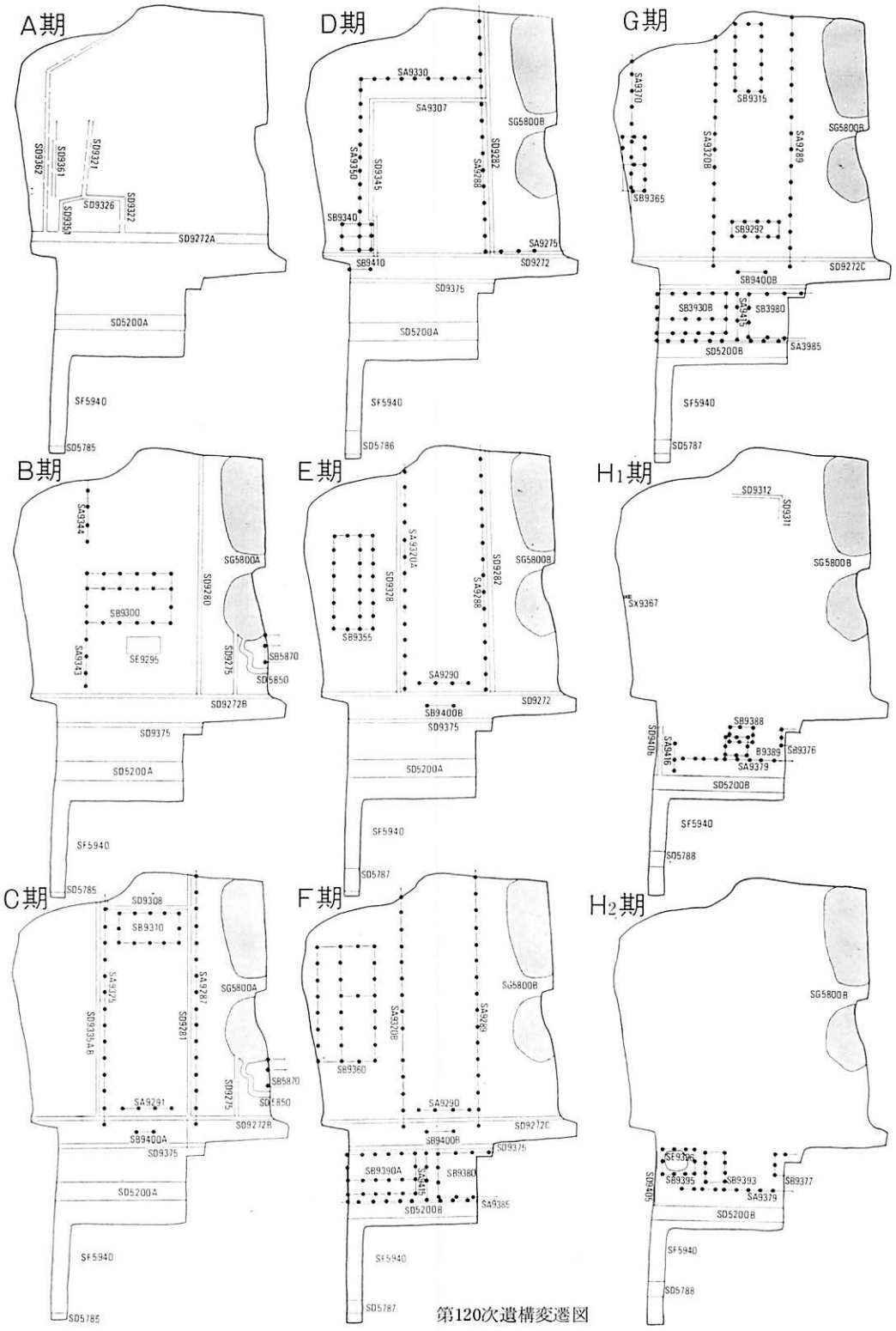
D期　園池を改作（SG5800B）した時期。園池西方も様相が一変する。SG5800Bは旧状を




第120次発掘遺構図

踏襲するが，汀線を広げ，スロープを緩やかな玉石敷とする。また，半島を拡張し，半島と池尻に奇岩を加える。園池西方もこれにあわせて全面的に玉石を敷く。ＳＡ9287を廃して造営方位より北で西に約3°振れる南北塀ＳＡ9288を設け，ＳＡ9275・9330・9350を接続させる。それぞれに玉石溝ＳＤ9282・9307・9345が伴う。ＳＡ9330の南面，ＳＡ9350の東面の玉石敷には，柱筋に直交する方向に幅約10cmの目地を入れているが，性格が明らかでない。３条の塀で囲まれた内部は広場として利用されたのであろう。ＳＡ9350の南には総柱建物ＳＢ9340があり，南面大垣に門ＳＢ9410を開く。この位置は東院地区のほぼ中央にあたる。二条々間大路南側溝は北に約３ｍ移す（ＳＤ9786)。

Ｅ期　Ｄ期のＳＡ9288・ＳＤ9282を踏襲し，その西には玉石組の南北溝ＳＤ9328を伴う南北塀ＳＡ9320Ａを設けて通路状の区画をつくり，南に目隠塀ＳＡ9290を設け，南面大垣に門ＳＢ


A期
SD9362
SD9361
SD9371
SD9326
SD9322
SD9350
SD9272A
SD5200A
SF5940
SD5785
D期
SA9330
SA9307
SG5800B
SA9350
SD9345
SD9282
SA9288
SB9340
SA9275
SB9410
SD9272
SD9375
SD5200A
SF5940
SD5786
G期
SA9370
SB9315
SG5800B
SA9320B
SA9289
SB9365
SB9292
SD9272C
SB9400B
SB3930B
SB3980
SD5200B
SA3985
SF5940
SD5787
B期
SA9344
SG5800A
SD9280
SB9300
SE9295
SA9343
SD9275
SB5870
SD5850
SD9272B
SD9375
SD5200A
SF5940
SD5785
E期
SA9370A
SD9282
SG5800B
SD9328
SA9288
SB9355
SA9290
SD9272
SB9400B
SD9375
SD5200A
SF5940
SD5787
H1期
SD9312
SD9311
SG5800B
SX9367
SB9388
SA9416
B9389
SB9376
SA9379
SD5200B
SF5940
SD5788
C期
SD9308
SB9310
SA9325
SA9287
SG5800A
SD9354B
SD9281
SB5870
SA9291
SD9275
SD5850
SD9272B
SB9400A
SD9375
SD5200A
SF5940
SD5785
F期
SG5800B
SA9320B
SA9288
SB9360
SA9290
SD9272C
SB9400B
SD9375
SB9390A
SB9380
SA9416
SD5200B
SA9385
SF5940
SD5787
H2期
SG5800B
SF9396
SB9395
SB9393
SB9377
SA9379
SD5200B
SF5940
SD5788

第120次遺構変遷図

9400Bを開く。SA9320Aの西には東庇付南北棟建物SB9355を配す。

F期　SA9288・9320Aを廃してSA9289・9320Bを設ける（東西幅約13.5m）。SA9320Bの西には間仕切のある東庇付南北建物SB9360を配す。二条々間大路北側溝は南に約3mずらし，南側溝は幅を狭める（SD5200B・5787）。両側溝とも玉石で護岸する。拡張した壕地には南庇付東西棟建物SB9390Aと東西棟建物SB9380を設ける。両建物は東西塀SA9385と南北塀SA9415で画す。

G期　F期の配置をほぼ踏襲。通路状区画に東西棟・南北棟建物SB9292・9315，SA9320Bの西に間仕切があるSB9365と時期の降る南北塀SA9370を配す。SB9390Aは庇を改作する（SB9390B）。

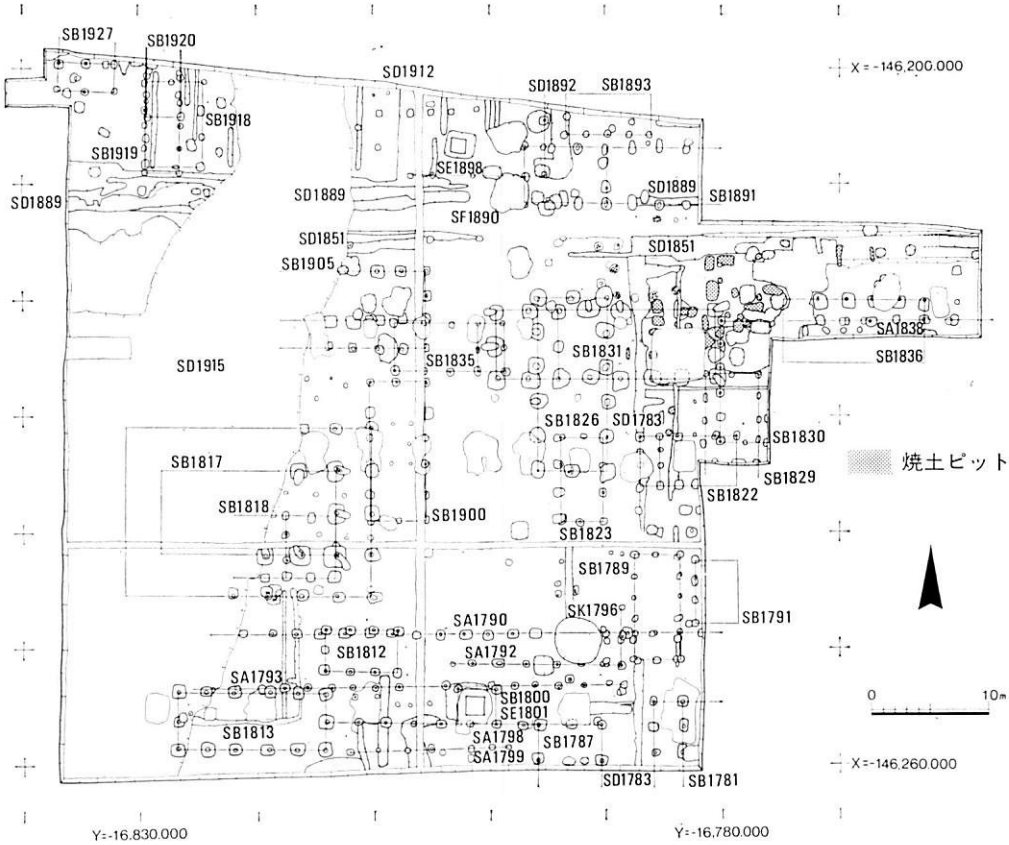
H期　SG5800Bの西に瓦敷溝などがあるが，後世の攪乱のため遺構配置が明らかでない。この時期二条々間大路南側溝はさらに北に移す（SD5788）。壕地に小規模な建物群があり，2小期に区分できる。$H_1$期には東西棟建物SB9376・9388があり，塀SA9379・9416で画す。西には南北溝SD9406を設ける。SB9388はこの時期にSB9389に建替える。$H_2$期には東西棟・南北棟建物SB9377・9393をたて，西に井戸屋形SB9395を伴う井戸SE9396と玉石溝SD9405を設ける。

遺物　遺物は多量で，主に二条々間大路両側溝及び壕地付近から出土している。木簡は計108点，木製品は計550点。瓦塼類のうち軒瓦は計558点で，平城宮第Ⅲ期（天平17～天平勝宝年間）の瓦が半数を占める。遺構との関連でみるとSD2800Aから和銅7年・養老5年の紀年木簡，天平12年以降に比定できる国郡郷里併記の木簡及びⅣ期（750～765）の土器，B期のSB9300の柱抜取穴から第Ⅲ期の軒瓦，SE9295の下層からⅡ期（710～725）の土器と第Ⅱ期（養老5～天平17）の軒瓦，井戸埋土から第Ⅲ期の軒瓦，SG5800Bから平安時代初頭の施釉陶器など，H期のSD5788の溝底の土壙から奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土している。なお，門SB9400Bから扉の地摺や方立の枘穴などが穿たれた木製扉口地覆を転用した礎板（54.7×33.2×7.7cm）が出土した。

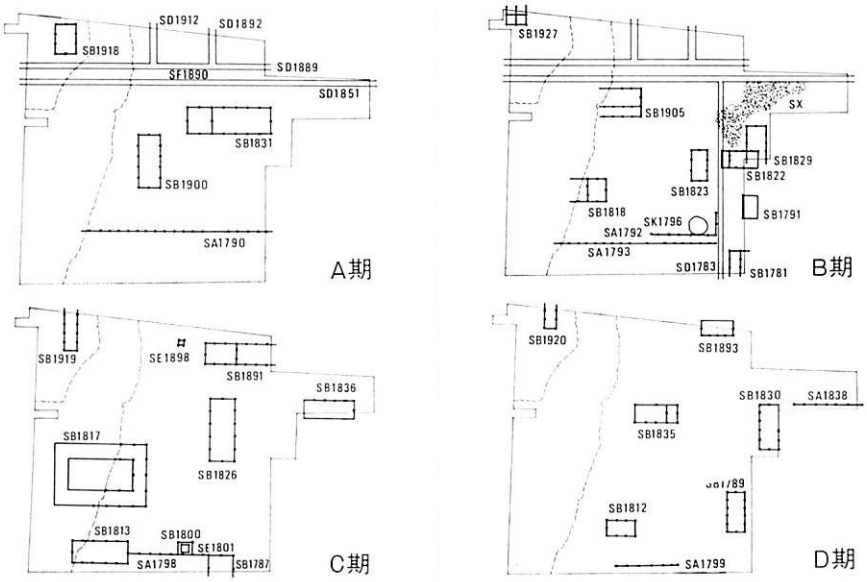
まとめ　今回の調査で園池SG5800Bの全容がつかめ，東西・南北とも最大幅約60m，総面積1520㎡に及ぶことが明らかとなった。また，園池とは溝・塀で区切られた西方の一画は8時期の変遷があること，二条条間大路は次第に道路幅が狭くなっていることが判明した。各時期のうちB期は出土遺物から天平年間を中心とする時期に比定できるが，SG5800Aの造営開始時期については改修の有無の確認を含めて今後の検討を必要とする。SG5800Bの造営がはじまるD期は平城遷都後の天平勝宝年間の造営，H期は奈良末～平安初頭に比定できる。

2．平城京の調査

**左京三条四坊七坪の調査（第116次）** 奈良郵便局庁舎建設に先立ち，七坪内の西南部分にあたる約¼を発掘調査した。検出した主な遺構は，掘立柱建物25棟，塀7条，道路1条，溝5条，井戸2基，土壙及び和同開珎鋳造に関係したと思われる焼土を含んだピット群などである。そ




第116次発掘遺構図




第116次変遷図

の結果，七坪は奈良時代初頭から平安時代初期にかけて継続的に利用されており，大きくA，B，C，Dの4時期に区分できる。

A期：七坪は，坪内小路ＳＦ1890（溝心々で幅約3.6m）によって南北に2分して利用される。坪の南半では東西棟建物ＳＢ1831を中心に，柱筋をほぼ揃えて南北棟ＳＢ1900が建つ。坪内小路心から約36m（120尺）南に柱間7尺の東西塀ＳＡ1790が建つが，これは敷地内を区画する塀と考えられる。坪の北半の利用形態は，今回の範囲では不明である。ただ，南北溝ＳＤ1892が坪の南北中心線上に位置するので，これを坪分割溝とすると坪の北半を更に細分して利用した可能性がある。

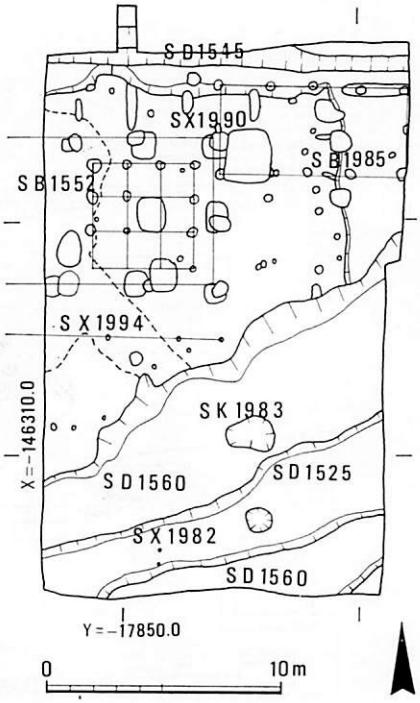
B期：坪割はA期のものを踏襲する。坪の南半の西半の区画には，東西棟建物ＳＢ1905を中心に各建物が建つ，東半の区画では，東西約20m，南北約15mの範囲に和同開珎鋳造工房に関係すると推定される焼土ピットが多数分布する。この時期は一部の建物等に建替えがある。即ち，南北棟ＳＢ1829を廃して東西棟建物ＳＢ1822が建つ。また，その南に南北棟建物ＳＢ1791及びＳＢ1781が新たに建つ。そして，東西塀ＳＡ1793及び南北溝ＳＤ1783は後に鍵型の塀ＳＡ1792に替わる。

C期：坪割の小路は廃絶し，坪の利用は全域すなわち1町分になる。四面廂付の東西棟建物ＳＢ1817を中心に東側に南北棟建物ＳＢ1826南側に東西棟建物ＳＢ1813が建つ。この建物の桁行中央間のみ10尺と広く，ＳＢ1817の中央間と揃えている。この時期の建物は全体に規模が大きく，柱筋がよく揃う計画的な配置となっている。

D期：坪の利用は1町と考えられ，東西棟ＳＢ1835をはじめ6棟の建物と2条の塀とから構成される。建物規模は柱間が6～8尺と比較的小さく，また，配置は計画性にやや欠ける。

遺物：出土遺物は多岐にわたっているが，瓦の出土量は極めて少ない。特筆すべきものとしては，焼土ピット群から大量に出土した和同開珎銭笵片や周縁に甲張りのついたままの鋳放し和同銅銭及び和同銭の鋳造に使用したと思われるるつぼ，ふいごの羽口等がある。和同銭や銭笵の多くは開の字を「開」につくるなど新和同に属する。

まとめ，今回の調査で七坪の変遷を知ることができた。それぞれの時期は，出土遺物から，A期が奈良時代初頭，B期が奈良時代中頃から後半，C期が奈良時代末期，D期が平安時代初期にあてることが



第121次発掘遺構図

できる。また，平城京造営当初から，坪を分割する施設として坪内小路が存在すること，及び平城京内において和同開珎を鋳造していたことが確認できたことは重要である。なお，この調査結果は，「平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報」（奈良国立文化財研究所1980年３月）として公刊した。

**左京三条二坊六坪の調査（第121次）**　特別史跡平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園の発掘調査である。調査区は第96次（昭和50年度）の北東及び南側の２ケ所であるが，南側の調査区では奈良時代の顕著な遺構はない。北東の調査区からは，掘立柱建物２棟，塀１条，溝３条，土壙などを検出した。時期区分は従前と同じくＡ，Ｂの２時期に区分できる。東西棟建物ＳＢ1552はＡ期に属し，桁行７間，梁行２間，柱間寸法10尺等間と規模が確定した。内部には，掘立柱の棚状の施設がある。東西棟建物ＳＢ1985は桁行４間，梁行２間，柱間寸法７尺等間でＢ期に比定される。斜行溝ＳＤ1525は旧河川ＳＤ1560の流路を利用して掘られる園池の導水路である。またＳＤ1545は北面築地の南雨落溝で，南岸には橋梁の据え付け痕跡と思われる三条の溝状遺構ＳＸ1990がある。

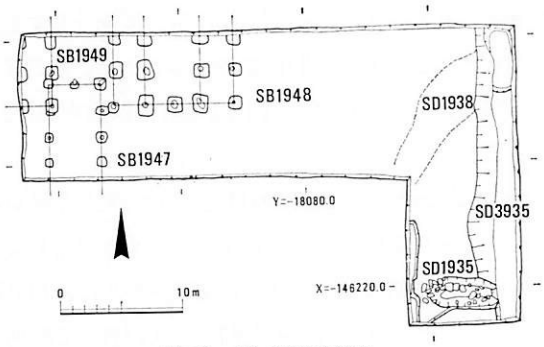
おもな遺物にはＳＫ1983から出土した「侍従」と記する墨書土器，ＳＤ1545から出土した多量の土馬，またＳＤ1525の下層から出土した木簡38点がある。木簡には和銅三年の年紀のあるもの，北宮と記したものなどがある。今回の調査は小面積であったが，園池の導水路を検出したのをはじめ，この坪の建物等が坪心から当初10尺方眼のち７尺方眼上に配置されることを改めて確認できた。また出土遺物からもこの地が平城宮と関係した公的施設でありしかも造営当初から存在したことも再度裏付けたといえよう。なお，今回の調査結果は「平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報」（奈良市教育委員会1980年３月）として公刊した。

**条坊遺構の調査（第118次－８，12，22，23，31次）**　平城京内における条坊推定位置での開発事業の場合，小規模であっても事前調査が行なわれることが多い。1979年度の調査で条坊遺構を確認できたのは別表に示す５件であった。このうち左京三条一坊十五坪の調査（第118－８次）は，ホテル建設に伴なう調査である。発掘区は十五坪の東端にあたり，東一坊大路の西測溝をはじめ掘立柱建物３棟，溝，旧河川，土壙などを検出した。南北棟建物ＳＢ1947は，桁行４間以上梁行２間，柱間寸法７尺等間である。南北棟建物ＳＢ1948桁行は３間以上，梁行４間，東西廂付である。西側のＳＢ1949はＳＢ1948とよく柱筋が揃うので，これと併存する南北棟建物と考えられる。柱掘形の切り合いからＳＢ1947→ＳＢ1948，ＳＢ1949の順に建替えを行なっている。南北溝ＳＤ3935は，東一坊大路の西側溝で，東岸は調査区外となる。ＳＤ1935は石組の東西溝で，十五坪の東西中軸上に位置しており築地下を通ってＳＤ3935と続く東西溝の暗渠部分と考えられる。

| 調査次数 | 位　　置 | 条坊遺構名 | 幅 |
|---|---|---|---|
| 第118－８次 | 左京三条一坊十五坪 | 東一坊大路西側溝 | 3～4m以上 |
| 第118－12次 | 右京五条二坊十四坪 | 五条条間路南側溝 | ３ｍ以上 |
| 第118－22次 | 左京三条一坊八坪 | 二条大路南側溝 | 約3.5m |
| 第118－23次 | 左京三条二坊坊間路 | 二坊坊間路西側溝 | 約2.5ｍ |
| 第118－31次 | 右京一条二坊西一坊大路 | 西一坊大路路面 | ― |

条坊遺構の調査表

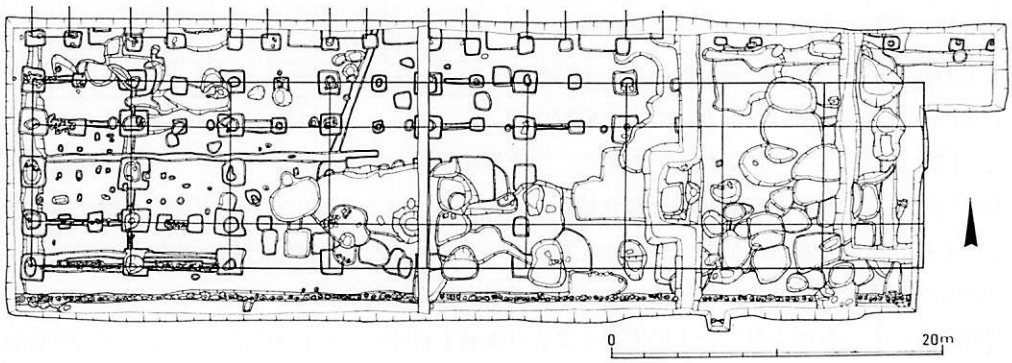
遺物には，瓦塼類，土器類，木簡などがある。木簡は18点あり，すべて破片または削り屑で，ＳＤ3935の北寄りの下層からまとまって出土しており，そのなかに「丹波国□上郡□」，「□丹波国綾部□」，「雑腊」などと墨書したものがある。また，同じ場所から馬骨が一個体分横たわった状態で出土している。



第118—8次発掘遺構図

**薬師寺東僧房の調査**　本調査は東僧房の再建工事に先立ち，その復原資料を得ることを目的として行なった。薬師寺東僧房については昭和45年に，薬師寺発掘調査団（団長杉山信三博士）が基壇南縁の全長55ｍと第１房を明らかにし，東僧房の位置，規模および房の間取をほぼ確定している。今回その既発掘区を含め，大房第１房から第９房までの全面発掘を行なった。

遺構の保存状態は第１・２房は良好であったが第３房以東はきわめて悪く，礎石はすべて抜きとられていた。大房の基壇は砂質土と粘質土を互層に約60cm積んでいる。基壇南端には人頭大の玉石や玉石抜取り痕跡があり，基壇は玉石積基壇となろう。しかし大房基壇北端には葛石はない。南側基壇の出は南側柱心から2.1ｍである。この基壇に接して南側には幅1.2ｍ，深さ0.4ｍの雨落溝がある。大房（第１房～９房）は食堂と棟心をそろえている。各房は梁行が４間（９尺＋10尺＋10尺＋９尺），桁行が２間（10尺＋10尺）で，前・中・後の３室に分けられる。内部は土間床である。第１・第２房の正面には凝灰岩の地覆石が20尺の間口を引通しており，中間に礎石据付掘形は存在しない。地覆石の内側に接して中央部分7.5尺にわたって凝灰岩を並べており，西側に袖壁を設け，中央を開口部としていたらしい。中室正面には礎石据付掘形が２個所あり，３間にわりつけ，中央間を扉口としているらしい。背面には中央に礎石据付掘形があり，２間にわたりつけており，西側には地覆に用いた瓦の抜取り痕跡，東側には中央より東７尺に円形の礎石据付掘形がある。この掘形は方立柱礎石据付のものであると考えられることよ



薬師寺東僧房発掘遺構図

り西の間は壁，東の間は東端3尺を壁，残り7尺を後室への扉口としているようである。第1・2房の中室には西および東寄りにそれぞれ束石の抜き取り痕跡があり，西側に床を東側に棚を設置していたのであろう。後室は2室に分けられ，東側は背面に扉口や壁の痕跡はなく，開放となっていたようである。 大房の北側柱心から2.4m北には各房ごとに西側柱筋を大房の房境にそろえた1間の礎石据付掘形がある。これは西僧房と同様に南北棟の付属屋南側柱位置にあたる。この南側柱礎石掘付掘形の下層で素掘りの東西溝（幅0.8m，深さ0.4m）を検出した。 溝は大房の北雨落溝と考えられ，創建当初には付属屋は存在しなかったことが明らかとなった。

東僧房創建の時期については大房の礎石据付掘形の底に敷いてあった新しい軒瓦が平城宮軒瓦編年の第Ⅱ期にあたることから，養老5年から天平17年頃であろうと考えられる。一方東僧房の廃絶の時期については，焼失した東僧房の第1房より出土した土器より10世紀後半頃と考えられるので， 東僧房の焼失は長和4年（1015）に撰述された「薬師寺縁起」に記載されている天禄4年（973）の食殿堂童子宿所からの出火による僧房焼失の記載とも矛盾しない。 今回の発掘区内においては，東僧房は焼亡後再建されていないことが明らかとなった。

出土遺物には瓦・土器・銭貨がある。瓦はおもに南雨落溝・土壙・礎石据付掘形より出土した。この瓦の中には平安時代以降のものも含む。土器は点数は少ないが，土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁が出土した。 この他に土壙中から200点余の瓦器椀・皿がまとまって出土した。銭貨は富寿神宝で，土壙中より5枚重なって出土した。

**薬師寺西面大垣**　この調査は住宅新築に伴う事前調査で，調査地は薬師寺推定西北門の北76mの地点である。当該地は薬師寺の西面を画す大垣遺構の存在が想定されていた。検出した遺構は大垣の基壇である。大垣は地山を削りだした基壇上にきめの細かな土をつき固めたもので，基壇幅5.25m残存高1.3mである。基壇の西外方には幅2.35m，深さ0.8mの空掘が接する。この大垣積み土内にも瓦器・羽釜片が含まれており，中世に大垣の修築がおこなわれたことが考えられる。

**東大寺境内**　この調査は東大寺祭器庫建設予定地の事前調査で，発掘地は僧坊推定地に北接する地域である。当該地は江戸初期の 「東大寺寺中寺外惣絵図」 にみられる塔頭金蔵院にあたる。検出した主な遺構は石組の東西溝2条，土壙1基である。 石組東西溝は幅約3m， 深さ0.7mあり，幹線水路ともみられる。 溝埋土出土遺物から考え，この東西溝は鎌倉時代以降のものである。この溝を埋めた後，その北約1.5mに石組東西溝が掘削される。溝幅は0.6mである。今回検出した遺構より，僧房の北限を東西幹線水路以南に求めることが可能となった。

**西大寺**　この調査は西大寺信徒会館建設予定地の事前調査で，発掘地は西塔跡の南側である。検出した遺構は奈良時代の南北棟建物1棟（東側柱列3間分），東西棟建物（3間×2間）2棟，それに近世以降の井戸と上水施設である。今回の調査地は平城京右京一京二坊七坪にあたり，検出建物は西大寺創建以前のものである。　（菅原　正明・毛利光俊彦・亀井　伸雄）

# 飛鳥・藤原宮跡の調査

飛鳥・藤原宮跡発掘調査部

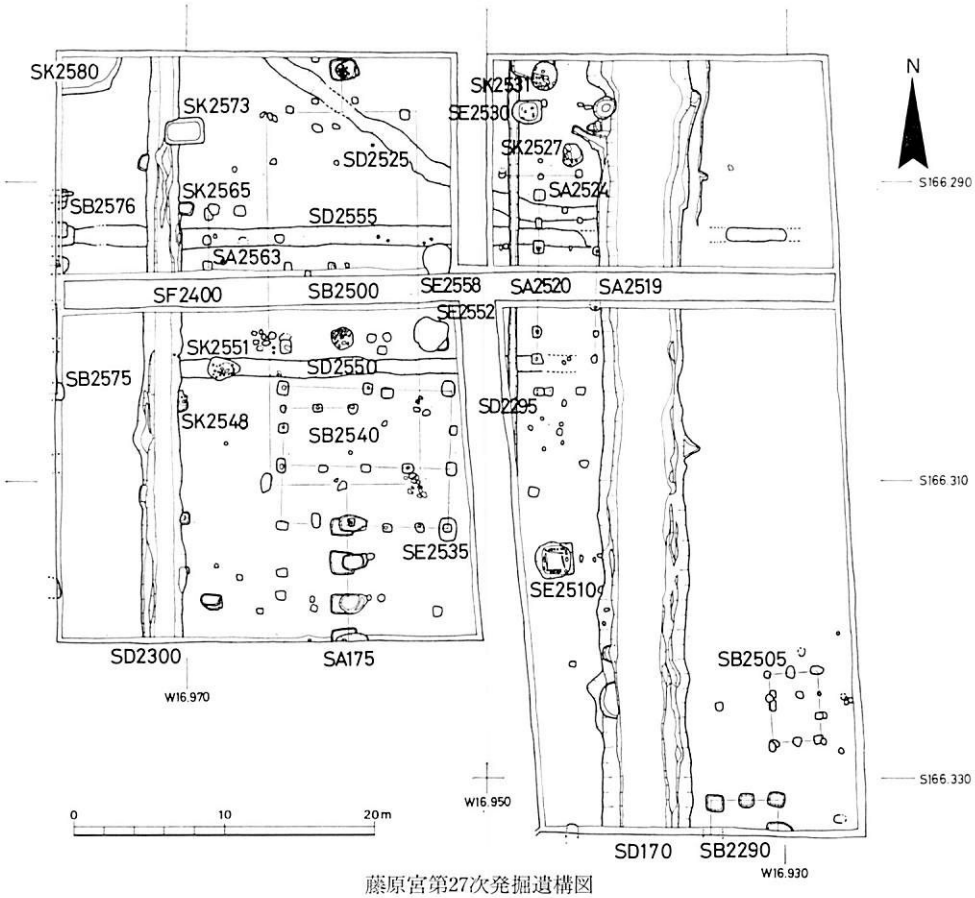
**藤原宮第27次（東面北門）の調査**　この調査は，藤原宮東面北門の位置及び規模と三条大路計画線の確認を目的として実施した。調査地は，藤原宮大極殿の北東約500mの水田で，昨年度に実施した第24次調査地に北接する。調査の結果，東面北門，東面大垣，東内濠，東外濠，及び掘立柱建物3，溝1，土壙1を検出した。

東面北門ＳＢ2500は，削平により，基壇土，礎石を全くとどめていなかったが，数ケ所に残る根石から，東西2間，南北5間の礎石建物であることが判明した。基壇の掘り込み地業はみられず，北面中門（第18次調査）でみられたような，礎石据え付け位置にのみ版築を施工するという基礎工法も認められない。柱間寸法は，梁行，桁行とも5.1m（17尺）等間で，平面規模は，藤原宮北面中門，平城宮朱雀門に一致する。東面大垣ＳＡ175は，宮の東を限る掘立柱塀で，門の南側で4間分，北側で1間分を検出した。門の南側では，いずれも柱を東方へ抜き取っている。柱掘形は一辺約1.5mの方形である。柱間寸法は，第24次調査の結果と同様，2.66m（9尺）等間で，門への取り付き部分も9尺となる。東内濠ＳＤ2300は，東面大垣ＳＡ175の西約12mに位置する素掘りの南北溝で，総長37mを検出した。濠の断面は逆台形で，堆積層は3層に分かれる。第1層からは瓦，第2層からは多量の土器，第3層からは瓦，土器が出土した。木簡は少量出土したにとどまる。東外濠ＳＤ170は，東面大垣ＳＡ175の東約20mにある素掘りの南北溝で，幅約5.5m，深さ約1.2mである。総長30mを検出した。濠の断面は逆台形で，堆積層は4層に分かれる。第1層から少量の土器，第2層から多量の瓦，第3層から木簡をはじめとする木屑，瓦，土器，第4層から，木屑が主として出土した。外濠堆積土の第1層は，内濠の第1層同様，埋め立てた土層である。掘立柱建物ＳＢ2290は，第24次調査で検出した「仗舎」あるいは「廐亭」と推定される南北棟で，今回の調査で桁行7間の建物と確定した。柱掘形は一辺1.0～1.2mの方形で，柱間寸法は梁行2.1m等間，桁行は南3間が1.8m等間，北4間が2.1m等間である。掘立柱建物ＳＢ2575，ＳＢ2576は，発掘区西辺にかかって南北方向に並ぶ柱穴列で，東西棟建物の東妻側柱の柱掘形の一部を検出したにとどまる。ＳＢ2575は，梁行約3.0m等間，ＳＢ2576は，梁行約2.4m等間である。ＳＢ2576の東南隅柱掘形には礎板が残っていた。これらの建物が内濠よりも西にあることから，この建物の一画が官衙地区であることを予想させる。ＳＤ2295は，大垣ＳＡ175の東約11.2mに位置する素掘りの南北溝である。幅約0.6m，深さ約0.7mで，溝の断面形はU字形を呈する。27m分を検出した。土壙ＳＫ2580は，内濠の西にあり，発掘区北西隅でその一部を検出した。深さは0.3m程であったが，藤原宮式軒丸瓦を含む多量の瓦片を出土した。宮造営に際しての廃材を投棄した土壙と考えられる。

藤原宮造営直前の遺構としては，三条大路計画線と掘立柱建物1がある。東西道路ＳＦ2400は，三条大路計画線で，2条の東西溝ＳＤ2550・ＳＤ2555は，その南北側溝である。南側溝Ｓ

D2550は，幅約1.1m， 深さ約0.3mの素掘りの溝で， 内濠と外濠の間で総長25m分を検出した。北側溝ＳＤ2555は，幅約1.2m，深さ約0.3mの素掘り溝で，外濠の東で断続的に残存し，総長47m分を検出した。 両溝の心々距離約9.0m（3丈）で，三条大路路面幅は7.8mとなる。掘立柱建物ＳＢ2505は，外濠の東， ＳＢ2290の北東にある南北棟で， 方位は北で西に3°40′偏している。柱間は，梁行２間（1.7m等間），桁行は， 東側が３間（1.6m等間），西側が２間（2.4m等間）である。南西隅柱抜き取り穴から藤原宮期の土師器甕， 韓竈が出土している。斜行溝ＳＤ2525は，大路北側溝ＳＤ2555の北を流れる溝で，外濠より西で25m分を検出したが，外濠の東では検出できなかった。幅1.2m前後，深さ約0.4mの古墳時代前期の溝である。

藤原宮廃絶後の遺構には，建物１，塀２，井戸３，土壙多数がある。宮廃絶直後の遺構としては，掘立柱塀ＳＡ2520，土壙ＳＫ2565・ＳＫ2573がある。ＳＡ2520は，北門東側柱列と外濠心のほぼ中間にある南北塀で，６間分を検出した。 柱間寸法は1.8m等間で，北でわずかに東に偏する。北から３番目の柱掘形の底には，軒丸瓦6275Ａを含む瓦が敷かれていた。土壙ＳＫ2565・ＳＫ2573は，西側部分が内濠にかかる土壙である。ＳＫ2565は，東西約1.0m，南北約0.9mの浅い土壙で，瓦片を出土した。ＳＫ2573は，東西約2.7m，南北，約1.8m，深さ約0.9mの




藤原宮第27次発掘遺構図

長方形土壙で，藤原宮式軒丸瓦を含む瓦と，少量の土器片を出土した。

第27次調査で出土した主な遺物は，土器・瓦・木簡であり，その大半は，内濠と外濠から出土した。内濠出土の土器は，第24次調査の結果と同様の傾向を示している。墨書土器には，「醤」「麦冂」などの文字が認められるものがある。このほか，製塩土器・土馬などが出土している。出土瓦には，軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・熨斗瓦・丸瓦・平瓦がある。軒瓦は総数367点のうち，343点が内濠・外濠からの出土で，これらの多くは，外濠の北門の東から出土している。この地点では，軒丸瓦6274Aa・6276C・6279B，軒平瓦6646C・6647C型式が8割以上を占める。北門所用軒瓦の組み合わせを考える貴重な資料となろう。第24次調査で出土した三重弧文鬼瓦の同一個体が数点出土した。この鬼瓦は，外濠の南北60mにわたって散在していたことになる。

**東面北門地区出土木簡**　木簡は外濠から878点，内濠から2点出土した。前年調査の，隣接する24次調査地区では奴婢関係の木簡が集中していたが，今回は「官奴」と判読可能なもの1点だけである。年紀のある木簡は3点あるが，いずれも和銅元年である。貢進物荷札もすべて「郡」表記，位階表記も大宝令制のものであるので，他の木簡も大宝令以後のものとみて大過ないだろう。全体を通じて際だった特徴のようなものは窮えないが，文書風木簡では官司名を記したものが比較的目につき，貢進物荷札では吉備関係のものが多い。官司名としては左右馬寮，神祇官，造兵司，内膳司，織部司，造酒司，皇太妃宮職，造木画処等がある。このうち皇太妃宮職・造木画処は初見の官司だが，前者は天皇の母で妃位にあった者の称である皇太妃に対して設置された官司とみられ，興味深い。後者の木画とはモザイク装飾の一種で，正倉院には木画を施した工芸品が現存する。この他に注目すべき木簡としては，(表)「少子部門衛士□」(裏)「送建部□〔門カ〕」と記したものがあり，宮城門号に少子部門のあることが始めて知られた。これにより平城宮小子門も氏族名を付した宮城門号であることが明確になり，藤原宮から平安宮に至

口絵木簡釈文

(上段)

造木画処　大初位下□冂〔河カ〕

・造兵司解　□□□〔麻カ〕□〔郡カ〕

・六□□□□□□□□〔寸五分カ〕

備中國下道郡矢田部里春税五斗

吉備後卅　紀六

・謹啓今忽有用処故醤

・及末醤欲給恐々謹請　馬寮

(下段)

・大伯郡長沼里

・縣使部加比俵

津刀里津守連冂

参河国波豆郡矢田里白髪部小□□

・内膳司解供御□□□□

・□□御料塩三斗　□□□□

□□□　和銅元年五□

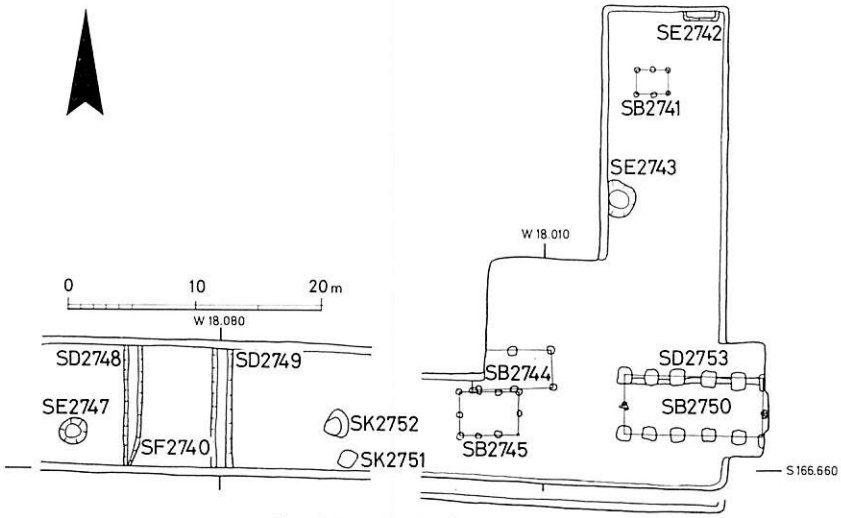
・□□□宮職〔皇太妃カ〕解

・□□□　冂□□冂〔年カ〕冂

る門号の変遷に新たな材料を提供した。建物の名称としては「□大殿」「南細殿」と記す木簡がある。さらに「備中国下道郡矢田部里舂税五斗」と記した荷札があるが，舂米を舂税と記したものは木簡では初見である。また「伊豆国田方郡□自牟里次丁二分調□□〔荒カ〕」は次丁（老丁・残疾）の納める正丁の２分の１の調荷札として珍しい。寺院名を記したものとして「大官大寺」と記した小片があるが，この時期には既に大安寺と称していたと見られるので，この木簡をどのように考えるか検討を要する。

**藤原宮第28次（国道165号線橿原バイパス）の調査**　この調査は，国道165号線橿原バイパスの予定路線で，工事に先立って実施したものである。調査地は藤原宮第25次調査区に南接し，さらに西に折れるＬ字形の地区で，西三坊坊間小路の存在が予想された。調査の結果，藤原宮期の遺構として，掘立柱建物４，井戸３，土壙２，溝１，西三坊坊間小路の東・西両側溝を検出した。

掘立柱建物ＳＢ2750は，調査区東南隅で検出した２間×５間の東西棟である。東西の妻柱中央は，礎石を置いている。柱掘形は一辺0.8～1.2mの方形ないし長方形である。柱間寸法は梁行・桁行とも2.4m等間である。東南隅の柱痕跡位置から土師器甕が出土している。北側柱は，東西溝ＳＤ2753を切っているが，ＳＤ2753からは藤原宮期の土器が出土しており，溝も西妻までしか掘られていない。ＳＤ2753とＳＢ2750は相前後して構築したもので，ＳＤ2753はＳＢ2750の計画溝と考えられる。溝幅0.4m，深さ0.3mである。ＳＢ2741は，１間×２間の掘立柱建物で，梁行2.4m，桁行1.5mの小規模な東西棟である。ＳＢ2744，ＳＢ2745は，ＳＢ2750の西７mにあり，重複している東西棟建物である。重復関係ではＳＢ2744の方が新しい。ＳＢ2744は，１間×２間で，梁行3.0m，桁行2.7mと考えられ，ＳＢ2745は，２間×３間で，梁行1.7m，桁行2.0mである。この２棟以西には建物は見当らない。井戸ＳＥ2742は，調査区北端で検出した素掘りの井戸である。掘形で東西長2.4m，深さは1.7mである。井戸内からは土牛のほか，木製品・土器が出土している。井戸ＳＥ2743は，ＳＢ2750の北13mで検出した素掘りの

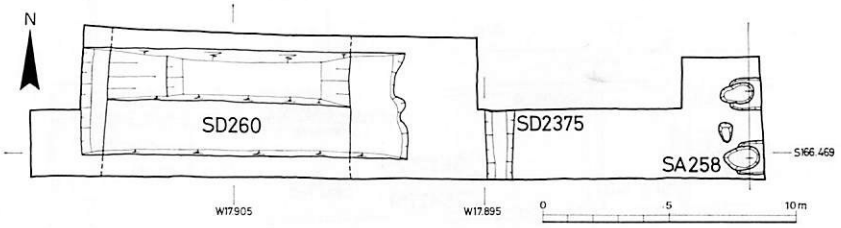



藤原宮第28次発掘遺構図

円形井戸である。径3.0m，深さは1.95mである。井戸内からは藤原宮期の土器が出土した。井戸ＳＥ2747は，西三坊坊間小路西側溝の西４ｍで検出した板組井戸である。内法方1.2m，４段組としたものである。掘形は径3.6m，深さは3.15mである。井戸底面には曲物が置いてあった。ＳＥ2747は弥生時代の自然流路上に構築している。土壙ＳＫ2751，ＳＫ2752は，西三坊坊間小路東側溝の東10mで近接して検出した。土壙内には，焼土，石を含み，藤原宮期の土器が出土した。ＳＫ2751は径2.8m，深さ0.5m，ＳＫ2752は径1.7m，深さ0.4mである。使用に供した土器類の一括廃棄の土壙と考えられる。溝ＳＤ2748，ＳＤ2749は，西三坊坊間小路ＳＦ2740の東西側溝である。溝の断面は，ともにU字形を呈する。東側溝ＳＤ2748は，溝幅約1.7m，深さは南で0.2m，北で0.6mの素掘り溝である。西側溝ＳＤ2749は，溝幅約1.5m，深さは南で0.15m，北で0.35mである。両溝の心々距離約7.2m，西三坊坊間小路ＳＦ2740の路面幅は5.6mとなる。東側溝ＳＤ2748からは，藤原宮期の土器がまとまって出土している。

今回，比較的規模の大きい掘立柱建物ＳＢ2750を検出したが，ＳＢ2750の建物位置は，藤原京右京五条三坊の区画内にあたる。しかし，ＳＢ2750は，坪の地割り計画と一致せず，周辺にも，それに対応する建物がみられない点，京域の宅地利用状況を考える上で問題になろう。調査区西方の飛鳥川寄りでは，建物は皆無である。この一帯は，弥生時代以降の，飛鳥川に流れ込む自然流路が多く，そのため建物構築，居住には適さない一帯であったとも考えられる。しかし，西三坊坊間小路が存在している点で，京の区画は，飛鳥川周辺の居住不適地帯に及んでいたことは間違いなく，京の地割り状況を知る上での材料をもたらしたといえよう。

**藤原宮第23―５次（西面大垣，西外濠）の調査**　この調査は，家屋新築に先立って実施したものである。調査地は藤原宮大極殿の西方約450m，縄手池の北方160mにある水田で，藤原宮西面大垣と西外濠の推定位置にあたる。調査の結果，藤原宮西面大垣，西外濠，南北溝を検出した。西面大垣ＳＡ258は，調査区東端にあり，南北方向１間分を検出した。柱掘形は一辺約1.3mで，柱は西方に抜き取っている。柱間寸法は約2.66mで，他の地区で確認している大垣の柱間寸法とほぼ一致する。西外濠ＳＤ260は，当初幅10m，深さ1.9mに掘られた素掘りの溝であるが，数度の改修で，最終的には幅8.8m，深さ0.8mとなっている。濠の堆積層は４層に分かれる。西面大垣ＳＡ258と西外濠ＳＤ260の心々距離は20.7mである。南北溝ＳＤ2375は，西面大垣ＳＡ258の西9.7mに位置し，溝幅1.2m，深さ0.4mの素掘りの溝である。東面大垣と東外濠の




藤原宮第23―５次発掘遺構図

間にも，同様の南北溝を検出しており，南北溝ＳＤ2375も藤原宮に関係するものといえよう。

出土遺物には，土器，瓦塼類，土製品，木製品，金属製品，石製品，銭貨，馬骨，植物種子がある。そのうち，ＳＤ260からは，多量の土器のほかに，瓦，銭（神功開宝，延喜通宝），土製品（土馬，ミニチュア韓竈），金属製品（帯金具，鉄釘），木製品，馬骨，植物種子などが出土した。ＳＤ260から出土した土器は，藤原宮期から11世紀後半に至るものが含まれ，このうち瓦器は最上層からのみ出土した。

今回の調査によって，藤原宮の西面大垣，西外濠の一部を明らかにすることができた。東面大垣，東外濠地区と比べると，西外濠には若干の相違がみられる。すなわち，大垣からの距離には大差ないものの，西外濠の幅は，東外濠の約２倍の10ｍとなっていることや，東外濠が平城遷都直後に埋没したと考えられるのに対し，西外濠は，改修されながらも11世紀後半まで，水路として機能し続けていることである。これらの相違は，西外濠が，単に宮城区画の濠としてだけでなく，宮造営当初より基幹水路の１つと考えられていたこと，平城遷都後に，この地域周辺で営まれた奈良・平安時代の集落でも水路として踏襲されたことを示しており，西外濠が埋められた11世紀後半以降に，周辺の土地利用は，大きく変化したと考えられよう。

**山田寺第３次（講堂・北面回廊）調査**　山田寺の第３次調査は，講堂規模の確認を中心にしながら，あわせて北面回廊の調査をもおこなった。

講堂（ＳＢ100）は，礎石や地覆石が良好な状況で残っていることで著名であるが，今回調査した講堂の東半部（現境内の東側）は，明治時代の水田化によって削平をうけ，礎石はもちろん，基壇土すら残っていない状況であった。このため，調査では礎石抜取穴５，基壇地覆石抜取跡２を検出したにとどまる。ただ，現境内には創建時の位置を保つ礎石が多く残っており，その実測所見とも考えあわすと講堂の規模が復原できるのである。建物については，桁行８間（総長33ｍ），梁行４間（総長14.3ｍ）であり，建物の中軸線は伽藍のそれと一致する。柱間寸法については，１尺を0.2975ｍとするのがよく，桁行方向では中６間が15尺(4.46ｍ)，両端間が10.5尺（3.12ｍ），梁行方向では中２間が13.5尺（4.02ｍ），両端間が10.5尺となる。

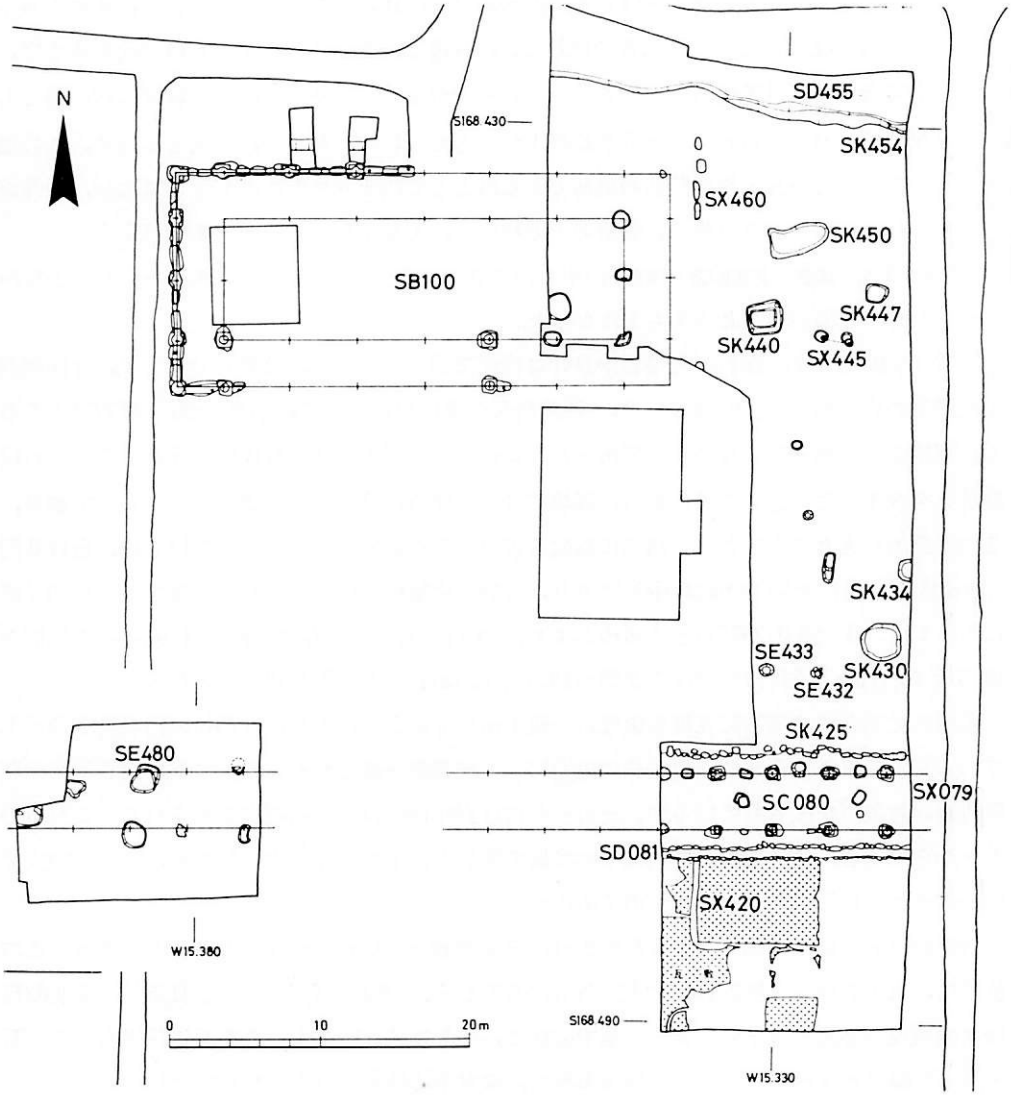
現境内に遺存する礎石は花崗岩製で，一辺１ｍの方座上に，上面径0.75ｍの円柱座を造出している。このうち東西北３面の側柱列礎石には，地覆座が造られている。また，礎石間には花崗岩製の地覆石が配されているが，その一部には直径15cmほどの軸摺穴がみられる。これらのことからすると，講堂建物の南面はすべて扉で開放し，東西両面は南の端間が，北面は中央２間分がそれぞれ扉口となっていたのであろう。

講堂の基壇化粧はすべて抜取られており，その痕跡（ＳＸ460）を検出したにとどまる。その位置は，東妻側柱から約2.1ｍ（７尺）外方にあるから，それをもとに，東西125尺，南北62尺の基壇規模が推測できるのである。基壇化粧は，塔や金堂と同じく，地覆石に花崗岩，羽目石・葛石に凝灰岩を用いた壇上積基壇であろう。なお掘込地業はおこなわれていなかった。

北面回廊（ＳＣ080）は，東西両発掘区で検出した。東側の発掘区では，良好な状況で残る礎

石や雨落溝など4間分を確認し，第2次調査分と合わせると伽藍中軸線から東へ8間分検出したことになる。礎石は，いずれも花崗岩製で，一辺70cmの方座上に，上面径45cmの蓮華柱座を造出し，北側柱列のそれは地覆座をもつ。

回廊基壇は，地山を削り出した基底部の上に版築土を積み上げたもので，基壇縁には長さ30～80cmの野面石を一列ならべて化粧としている。回廊の南雨落溝（SD081）は，側石にのみ玉石を用いた溝で，内幅は約60cmである。北の側石は基壇の縁石を共用し，南の側石はそれより小型である。基壇北側の雨落溝は，旧地表面がもともと低かったと推定できるから，本来，設けられなかった可能性が強い。




山田寺第3次発掘遺構図

前述した遺構以外に，溝や井戸・土壙などの遺構があり，これらは3期に大別される。7世紀後半のⅠ期には，土壙ＳＫ430・450があり，平安時代のⅡ期には，土壙ＳＫ434・447，ＳＸ445がある。そして鎌倉・室町時代以降のⅢ期には，井戸ＳＥ432・433・480，土壙ＳＫ425・440・450，溝ＳＤ455などがある。このうち，ＳＫ440は鎌倉時代後半の土壙であり，埋土から焼土や瓦とともに梵鐘の鋳型とフイゴの羽口片が出土した。

出土遺物には，瓦塼類・塼仏・土器・金属製品などがあるが，第１・２次調査に比して出土量は少ない。「山田寺式」軒丸瓦は，これまでの調査でＡ～Ｆの６種が確認されているが，今回の調査では，Ｅ種を除く５種が出土した。その出土数は，Ｄ→Ａ・Ｃ→Ｂ→Ｆの順で，Ｄ種が最も多い。このうちＡ・Ｃ種について，講堂周辺と北面回廊周辺とにわけてみると，北にＣ種，南にＡ種の多いことがわかる。これまでの調査成果によると，金堂にはＡ種，塔にはＢ種が多く，堂宇による使い分けがなされた可能性が高く，講堂については，今回出土数の多いＣ・Ｄ種がその候補となろう。今回の調査では，塼仏の出土数は極めて少なく，講堂には塼仏は用いられなかったようである。

今回の調査成果として，まず，講堂の建物平面が確定したことがあげられる。講堂については，『諸寺縁起集』に記された「五間四面」の記載から桁行７間と考えられてきたが，今回の調査によって，山田寺講堂が，飛鳥寺・四天王寺・法隆寺のそれと同じく桁行８間・梁行４間の建物であることが判明した。

北面回廊については，第２次調査分を含めて，伽藍中軸線から東へ８間，西へ10間の計18間分が確認できた。しかしながら，隅間を検出していないから，東西規模については，20ないし22間の可能性を指摘するにとどまった。柱間の寸法については，原位置に残る礎石からみると，梁行・桁行とも12.5尺とみるのが適切である。ただこの寸法で回廊を復原すると，伽藍中軸線を狭んだ東西各一間分が14尺と広くなるから，その当否は今後の課題といえる。

金堂・塔周辺は，奈良時代に瓦敷，平安時代にバラス敷で舗装されていたことが判明しているが，講堂周辺ではそれらの痕跡はない。同様な事例は，礎石蓮華座の有無についてもみられる。ともに回廊に囲まれた区画内を聖域視した結果であろう。

これまでの調査で，金堂・塔は12世紀のうちに焼失したと推定されたが，講堂・回廊の焼失を示す遺構・遺物は今回検出されなかった。しかし，文献史料からすると，講堂の廃絶期も，他の堂宇と同様，12世紀後半頃とするのが妥当であろう。

**大官大寺第６次（講堂・東面回廊）調査**　本年度は，講堂と推定されてきた土壇（ＳＢ100）の北方と，東面回廊の一部を発掘した。従前の調査で，礎石建物ＳＢ100が金堂である可能性が高まり，今回はその確認の意味からも，ＳＢ100の北方に発掘区を設定した。調査の結果，ＳＢ100の北方で新たに大規模な礎石建物ＳＢ500を発見し，あわせて東面・北面両回廊の接続部を確認した。

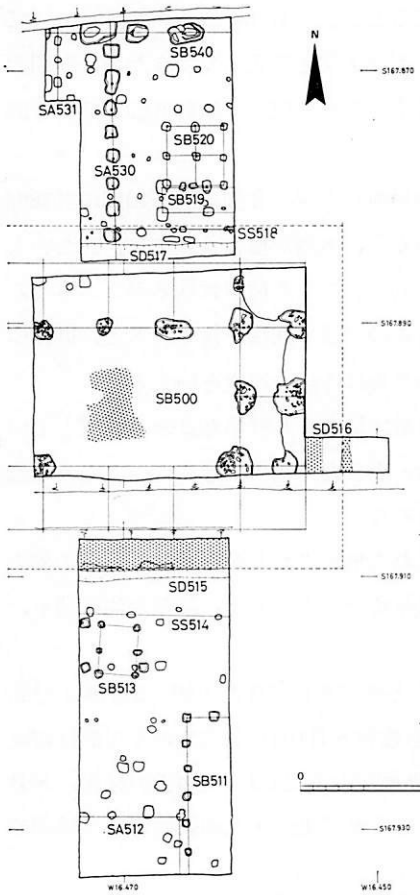
講堂ＳＢ500は，ＳＢ100の北約75m（心々距離）で検出した桁行９間，梁行４間の礎石建物

である。基壇土は大半が失われていたが，礎石の抜取穴10ケ所を確認することができた。それによると，建物の柱間は，身舎桁行5.1m（17尺），梁行5.4m（18尺）等間であり，廂部分はＳＢ100と同様5.1m（17尺）に復原されるのである。基壇規模については，掘込地業もおこなわれておらず，明確には知り難いが，基壇化粧に用いられた凝灰岩の破片の散布状態からすると，東西約52m，南北約27mの大きさが考えられる。なお，基壇の南北両縁近くに東西方向の掘立柱列ＳＳ514・518がある。これらは，ＳＢ500の造営に伴う足場痕跡であろう。

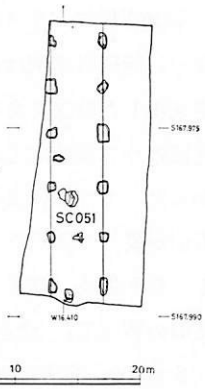
ＳＢ500の北約29mの位置で，東西棟礎石建物（ＳＢ540）の南側柱列を確認した。これは発掘区北端に接して礎石落込み穴３間分（柱間3.9m）を検出したのみであるから，その性格については，僧房ないしは講堂を囲む北面回廊の可能性を指摘するにとどめたい。

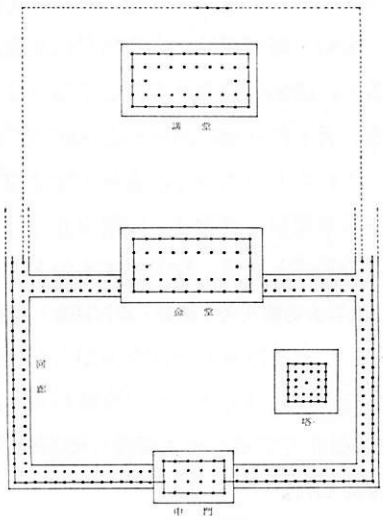
東面回廊ＳＢ501は，今回，北面回廊との接続部を中心に５間分を調査した。検出した回廊は，梁行柱間4.2m（14尺）の単廊であり，桁行柱間は，中央の１間が4.2m，他の４間が3.9m（13尺）である。この広い中央間に北面回廊が接続することは誤りなく，東面回廊がさらに北へ延びることが確認できたのである。

大官大寺関連の上記の遺構以外に，４棟の掘立柱建物と３条の掘立柱塀や溝がある。ＳＢ511は，梁行１間以上，桁行５間以上の南北棟建物（柱間2.1m等間）である。ＳＡ512は，柱間2.2～2.8mの掘立柱東西塀。３間分を検出したが，建物になる可能性を残す。ＳＢ513は，梁行１間（2.8m），桁行２間（柱間1.9m）の南北棟建物である。ＳＢ519は，梁行１間（1.8m），桁行１間（3.6m）以上の東西棟建物。ＳＢ520は，２間四



大官大寺第６次発掘遺構図

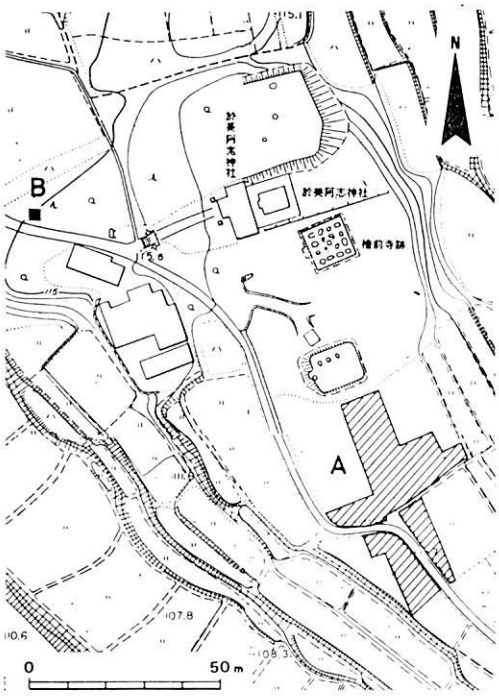




大官大寺伽藍復原図

方の総柱建物（柱間2.1～2.3m）であり，柱穴の重複からＳＢ219より新しいことが判る。ＳＡ530は，６間分（柱間2.0～2.1m）を検出した掘立柱南北塀である。これらの遺構のうち，ＳＢ519・520，ＳＡ530は大官大寺以前の遺構である。

瓦は調査区全体から多量に出土した。このうち軒瓦は大部分が「大官大寺式」のもので，他に，川原寺式軒丸瓦や慈光寺式鬼面文軒丸瓦がある。ＳＢ500周辺についてみると，軒瓦6231Ａ―6661Ａの出土数が多く，ＳＢ500所用瓦の形式が判明する。この組合せは，ＳＢ100と共通しているが，ただ製作技法や胎土などの点では塔・中門などの所用軒瓦6231Ｂ・Ｃ―6661Ｂ・Ｃに類似しており興味を引く。

今回の調査で，これまで疑問の生じていた大官大寺の伽藍配置について，一定の解決がえられたのである。すなわち，伽藍中軸線上の正面に位置する最大規模の建物ＳＢ100を金堂とし，その背後に並ぶ同規模の建物ＳＢ500を講堂と理解するのである。従前の調査によると，大官大寺の遺構は，いずれも火災によって焼亡しており，遺構の状況や所用軒瓦から焼亡時にＳＢ100は竣工していたが，塔ＳＢ200や中門ＳＢ400等は未だ基壇化粧が施されておらず，このうち塔の建物は完成していたが，中門は足場を組んだまま焼亡していたことが明らかになっている。今回発見した講堂ＳＢ500は，凝灰岩切石による基壇化粧が施されていたと推定され，また軒瓦の型式からみてもその造作は，塔などよりも先行していたと考えてよい。おそらくＳＢ100に引き続いて造営されたものであろう。



調査地位置図(1：2000)　Ａ南門地区
Ｂ講堂西方地区

こうして大官大寺の伽藍配置の大要が判明した。ただ回廊内西半部（塔と対称の位置）が空地になっている点が特異であり，今後，ＳＢ500後方の建物ＳＢ540の性格付けの問題もあり，今後の発掘調査の進展をまちたい。

**桧隈寺第１次(南門推定地)調査**　この調査は，明日香村の依頼をうけ，当研究所の飛鳥地域における寺院調査の一環として実施したもので，今回はその初年度にあたる。桧隈寺は，現在，於美阿志神社の境内地となり，その北端に講堂と推定される土壇が，南東に十三重石塔の立つ塔跡が，そして南端に中門と目される土壇が残っている。今回の調査は，南門の検出を主目標とし，中門土壇の南に調査区を設定した。

調査地は東西方向の畦畔によって北区・南区に分かれるが，両区とも床土下は直接地山

となるところが多い。検出した遺構には，土壙や小穴群があるが，いずれも中世以降に限られ，古代に遡るものはない。しかし，北区西南部分に落し込まれた礎石の存在，北区東南部での礎石か基壇化粧材と思われる花崗岩・凝灰岩片，瓦の出土状況からみて，北区に何らかの建物が，かって存在したことは推定できる。さらに，北区のうちでも南半中央部，すなわち中門土壇から南約30m付近に，遺構の稀薄な部分があり，そこにある時期まで土壇が残存していたと想定するのも可能であろう。今後，伽藍中心部分における発掘調査の進展とからめて考えていきたい。

なお，南門推定地の調査と平行して，講堂西方において小規模な事前調査を実施した。明確な遺構は検出できなかったが，表土および攪乱土中から出土した多くの瓦には注目すべきものがあった。

**川原寺西南部の調査**　この調査は，史跡の現状変更申請に伴う事前調査として実施した。

調査地は川原寺の寺域西南部に位置し，伽藍復原整備地の西に近接した水田である。調査によって検出した遺構には，掘立柱建物２，土壙３，斜行大溝１，掘立柱塀１，井戸２のほか，沼の西岸や南北細溝などがある。

これらの遺構は，重複関係や伴出遺物から４期に区分できる。Ⅰ期の遺構には，掘立柱東西塀ＳＡ01がある。１間分3.0mを検出したにとどまるが，調査区西方に延びる可能性が大きい。Ⅱ期に属する斜行溝ＳＤ02は，幅2.4m，深さ0.9mの素掘り溝で，ＳＡ01の柱穴に一部重複している。埋土から７世紀初頭頃の土器が出土した。Ⅲ期の遺構には，掘立柱建物ＳＢ03，土壙ＳＫ04・05がある。ＳＢ03は梁行２間，桁行３間以上の東西棟建物である。柱間は桁行2.1m，梁行1.8m等間である。柱掘形内に川原寺創建瓦が含まれていた。ＳＫ04・05は，ともに径３mほどの隋円形土壙で，埋土から７世紀後半の土器や川原寺所用の重弧文軒平瓦などが出土した。Ⅳ期の遺構には，掘立柱建物ＳＢ06，石組井戸ＳＥ10・11，石敷ＳＸ12，石組溝ＳＸ13，土壙ＳＫ15などがある。ＳＢ06は桁行２間，梁行２間の南北棟で，柱間は桁行3.0m，梁行2.1m等間である。柱掘形には瓦器片を含んでいた。

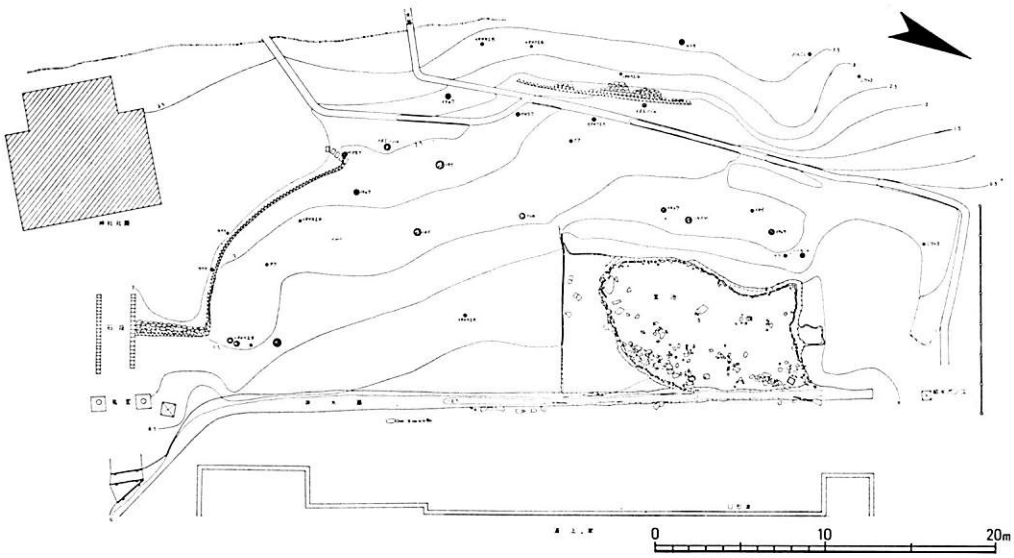
今回検出したⅠ期の東西塀やⅡ期の斜行溝は，川原寺造営以前の遺構である。また調査区の東半では沼の西岸が検出されたが，この上限は必ずしも明確ではない。斜行溝を沼への導水路とみると，７世紀前半には沼が成立していたことになろう。沼の下限に関しては，沼の上に構築されたⅣ期の石組井戸などの年代から，遅くとも12世紀後半には，沼は消滅したようである Ⅲ期の遺構については，これらの遺構から出土する瓦が川原寺創建瓦に限定されることから，川原寺創建以降の遺構とみられる。とくにＳＢ03は，寺の付属屋と考えられ，寺域の西方に寺の経済をささえる諸施設が存在することが明らかにできた。　（黒崎　直・土肥　孝）

# 史跡旧下ヨイチ運上家庭園の調査

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

調査は昭和51年から4ケ年計画で行っている旧下ヨイチ運上家の全面解体修理工事に伴ない，周辺環境整備の一環として行ったものである。運上家西側の現在空地になっている部分に明治時代に庭園が造られていた事が写真等の資料で判明しているため，庭園を発掘して池の全容を明らかにし，併せて周辺の池形実測も行なった。調査の結果，池は一部が後世の攪乱を受けているが，東西8m，南北12mの規模で，導水部（南側）が口，排水部（北側）が尾びれで，全体として魚の形状をなし，運上家（漁場の経営）に関連した作庭意匠がとられたのではないかと思われる。水深は20cm前後の浅い池で，護岸は抜き取り穴から判断すると，直径5～10cmの杭を密に前後して並べたもので，土留めのための乱杭の形式である。池への導水は東西隅から，明治の写真によると石組による導水路がみられるが，上部は削平され，石組は検出されず，池内部に長辺1m，短辺60cmの面の平らな水落石を検出したにすぎない。池の排水は池東北隅に側石を持つ巾20cmほどの溝を検出している。また池の景石は池の建物側，池東岸に10～40cmの石を並べているが，石の高さが水面にすれすれに頭を出す状況で州浜を形成したものであろう。その他景石が表土排除の際に10数個掘り出され導水部，岸辺など要所要所に据えられていたものと思われる。園池と建物の配置から考えると運上家が東西方向から明治24年に規模を縮少して南北方向に造り替えられた際に，山からの水を留める調整池の役目を兼ねてこの池が造成されたものと考えられる。

（田中　哲雄・本中　真）



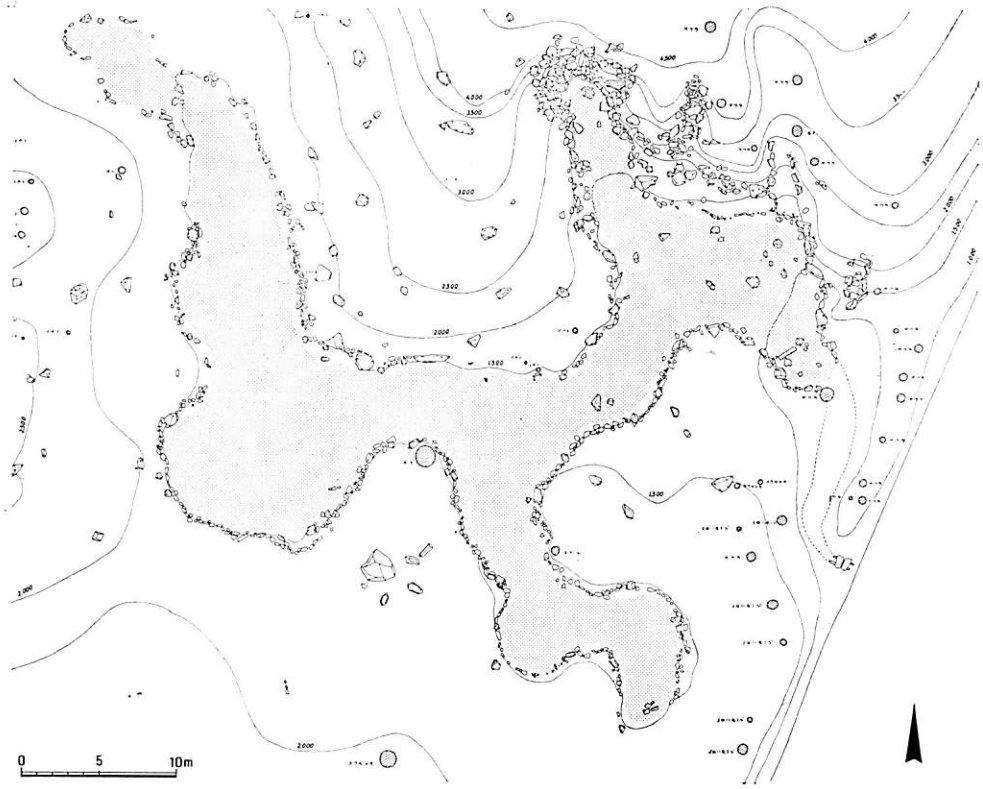

運上家庭園実測図

# 弘前城三の丸庭園遺構の調査

埋蔵文化財センター・平城宮跡発掘調査部

弘前市の依頼により弘前城三の丸に遺る庭園遺構の調査を行った。庭園遺構は三の丸東地区中央部で二の丸内東門に近い場所にあり，北に小高い築山，南西から南に屈曲する枯池をもつ。池が築山に向って北方に入り込む位置に角柱型の自然石を立てた枯滝石組が露出しており，池汀護石，池内に敷き並べられた川原石，築山内の景石が随所で露出していた。調査内容は池庭の実測のための覆土の除去と平板測量である。覆土の除去に9月6日から8日午前中までかかり，午後から10日午後3時まで測量を行い下図のように成果を得た。この庭についての史料としては元禄12（1699）藩主信政が世子信重のために広い庭をもつ邸を三の丸に設けたとあるのが初見であり，他には文化7（1810）江戸の庭師を招んで改庭したとの記録があるのみである。なお市の方で別に調査団をつくり，池庭南方の屋敷跡を主対象とした発掘調査が10・11月に実施されたが後世の攪乱がひどく顕著な遺構を検出し得ていない（昭和54年度史跡弘前城跡環境整備事業三の丸発掘調査報告概報書 弘前市・弘前市教育委員会参照）。築山およびその裾部については次年度の調査が予定されており，当研究所も指導に当ることになっている。

（安原　啓示・光谷　拓実）




弘前城三の丸庭園実測図

# 慧日寺徳一廟石層塔の調査

埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センターでは，福島県磐梯町，慧日寺境内にある石造層塔の調査をおこなった。これは同寺開祖，僧徳一廟として伝えられ，平安中期の作とされる。現存は三層であるが，仕口のおさまりなどから，当初は5層以上の層塔であったとも考えられる。石材は周辺産の安山岩。笠石の上部に上層の塔身を造り出し，上層笠石下面の仕口におさめる。初層の笠石下面4隅に，風鐸懸下用と思われるえつり穴を穿つ。その他の笠石には風蝕のためか，当初よりか，このえつり穴は見えない。初層の塔身は一石であるが，基礎石の仕口に合致しない。基礎石が，形状から，笠石再利用の可能性もある。2層の塔身に凹みがあり，そこから，舎利容器が発見されている。総高は相輪宝珠を含めて2.55m。基礎石南面巾は1.3m。

近年来破損がはなはだしく，倒壊のおそれもあることから，修復するはこびとなり，それに先立って，現況記録と修復に資する目的で，写真測量により，4側面図の作製をおこなった。実測基準投影面は，比較的風蝕の少ない初層南面下部の延長線とし，それに平行，あるいは直角に定めた。撮影は上下2段，器械高を変えておこない笠石による死角の出ないよう努めた。また2層の塔身が，上層を支えることが不可能なほどけずられているため，五輪塔の石材で支えてあり，それが2層の塔身に死角を作っている。そのため，解体作業の途中で，支えをはずした状態の撮影を4方向よりおこなった。図中破線図示したものがそれである。図化に使用したステレオ写真は，各面，上下，2対と，五輪塔，風空輪をはずした3モデル，計12モデルである。図化法は2.5㎜間隔の等高線表示とし，輪郭線，稜線は全く図示していない。このような，風蝕のはなはだしい石造物は，この方法によると，主観をまじえることなく，稜線を表示することが出来，必要に応じて図上より捨い出すことが容易にできる。原図縮尺は1：3撮影はカールツアイス社製，SMK—40ステレオカメラ，図化はウイルド社製，オートグラフA—7を使用した。なお図化作業は，国際航業株式会社に依頼した。　（安原　啓示・伊東　太作）

石層塔南立面図（方眼は50㎝間隔）

# 東大寺瓦窯の磁気探査

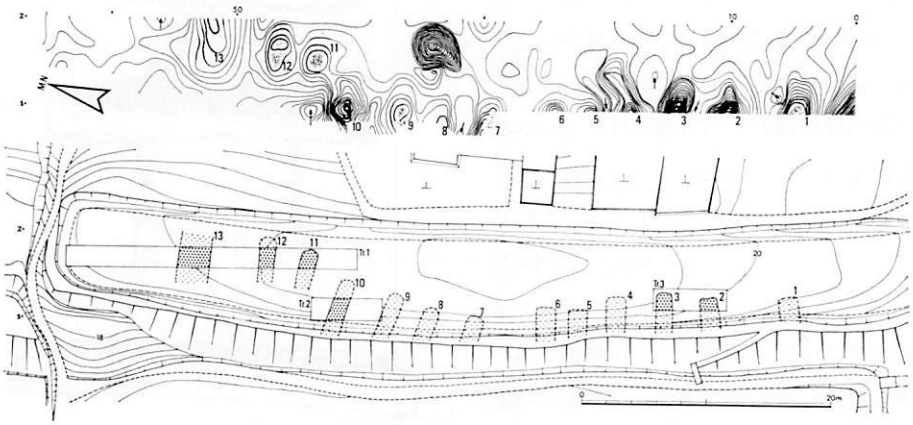
埋蔵文化財センター

岡山県赤磐郡瀬戸町万富にある国指定史跡万富窯跡，東大寺の鎌倉時代再建時に瓦を供給した窯として著名であるが，その実態は明らかでなかった。岡山県教育委員会では，窯跡の保存・管理をするうえでの資料を得るため，確認調査を計画した。これには万富地区だけでなく，最近発見された和気郡和気町泉（安養寺境内）の瓦窯推定地も含めて，東大寺瓦窯跡群として調査することにした。

確認調査はまず，調査地域全体を磁気探査して窯跡の概要をつかみ，そののち，小部分の発掘をして窯体を確認する方法がとられた。埋文センターでは，この磁気探査を全面的に援助した。期間は昭和57年7月24日から7月26日までの三日間で，探査面積は万富地区1500㎡，泉地区1200㎡である。磁気探査にあたっては，両地区とも約20～30ガンマ程度のノイズが認められたので，二台連動法によって測定した。（「遺跡探査法の開発」・岩本圭輔『奈文研年報』1977）

万富地区では，調査対象地域内に落差2mほどの南北に長い崖があり，この崖面に数基の窯体断面が露出している。従来「東大寺瓦窯」として知られていたのは，この窯体である。磁気探査測定区は崖面に並行に設定した。測定点間隔は2mである。しかし磁気異常のある場合には1m間隔の測定をおこなった。なおこの測定区は発掘調査の地区割と共通のものとし，探査と発掘の結果の照合を容易にした。泉地区も同様である。

第1－A図は万富地区の探査結果の一部である。磁気の強さをコンターで表わしてある。ここでは約2×3mの範囲で50～150ガンマの磁気異常を示す地点が13個所ある（1－A図中の1～13の網目部分）。これらはいずれも窯体の存在する可能性があると考えた。特に1～10の個所は，崖面に露出した窯体位置とよく合致している。従来は崖面に数基の窯体があるとみられていたが，多数の窯が並列していると推定されたのである。



1-A図　万富地区磁気探査結果(上)　発掘結果(下)

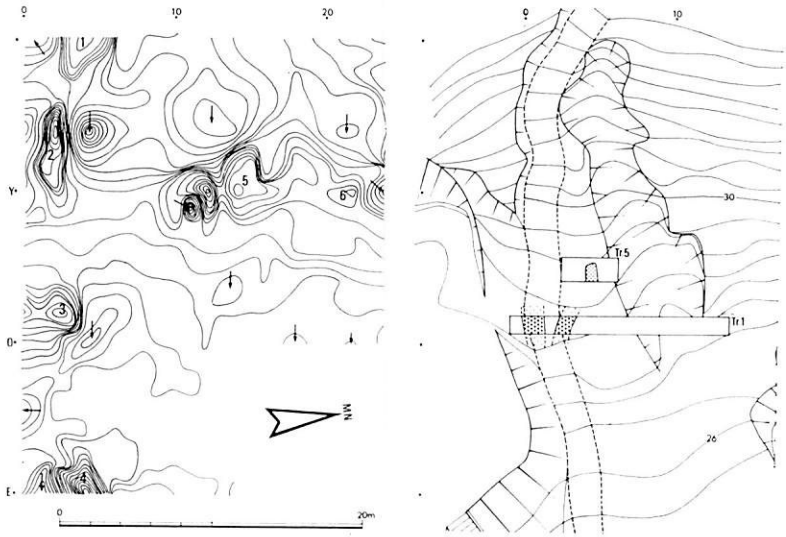
11～13の３個所は，崖面にみえる10個所と比較すると，磁気異常がやや弱く，その形態も大きい。しかし窯体が存在する可能性がまったくないとはいえない。したがってこの３個所も，発掘による確認調査の対象となる。これら13個所のうち２，３と９，10それに11～13の地点がそれぞれ発掘され，いずれの地点でも窯体が発見された。その結果，他の６個所に窯体が存在することは確実になったといえる。

泉地区はやや急な丘陵東斜面が探査対象地域で，この西端には等高線に直交する山道がある。探査及び発掘のための地区割では，等高線と並行になるように設定した。磁気探査の結果，６個所の磁気異常を認めた（２－A図）が，いずれの個所もその形態が不整形であるため，窯体が存在すると断定はできなかった。特に１～４の個所は山道に沿っており，山道造成の際に使用された鉄線等によって生じた磁気異常の疑いがあった。

しかしながら発掘による確認調査は，これら６個所すべてを対象になされ，３（２－A図）の地点では窯跡２基が発見された。窯跡の位置は，山道の直下にあたっている。磁気探査結果を再検討してみると，山道に沿う磁気異常のなかでは，この３の地点のみは極端な異常ではなく，鉄製品などに起因する磁気異常といえないことがわかる。しかし磁気異常の範囲と形態からは窯体の存在を予測するのはむつかしかった。

万富，泉の両地区の調査は，磁気探査ののちにこれを確かめる発掘調査がおこなわれ，探査結果が確認された。いかなる方法による探査でも，常にこのような確認の手続きがとられることが必要である。今回の調査では探査と発掘による結果がよく合致している。特に万富地区では，探査はよく窯体をとらえており，条件がよければ磁気探査が非常に有効な探査手段になることが再確認されたといえよう。

（西村　康）




2-A図　泉地区磁気探査結果(左)　発掘結果(右)

# 平城宮跡・藤原宮跡の整備

平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・庶務部

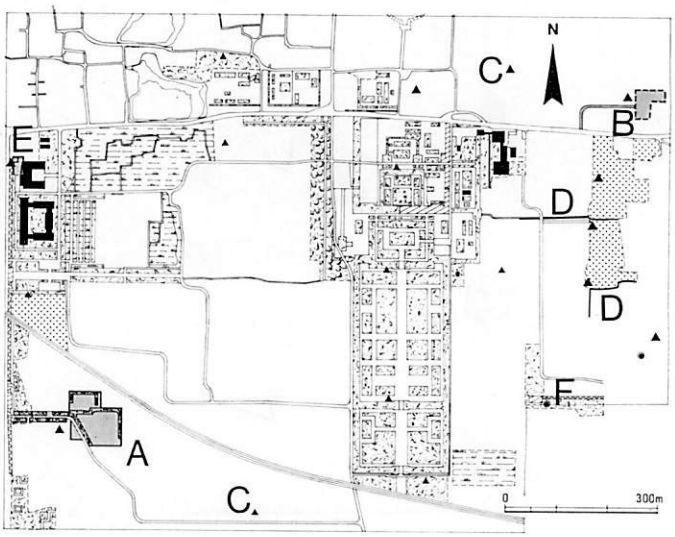
## 1. 平城宮跡の整備 (10)

1979年度の宮跡整備は，多目的苑地の造成，法華寺町民家隣接地の盛土整地，地下水位観測孔の設置，水路改修，収蔵庫周辺整備および照明灯設置工事を行なった。

**多目的苑地の造成**　平城宮跡地内において1990年までに発掘調査を実施する計画のない地域については，遺構・遺物の保護を計りつつ，緑地等の整備により周辺住民の日常的な利用をも考慮した休息，散策，レクリエーションの場所として活用する構想を持っている，そこで宮西南部の玉手門跡の東方で近鉄奈良線の南に多目的苑地の造成を行なった。玉手門跡(1972年度整備済)からのアプローチを考え，両側に10m幅の植樹帯をもつ幅員4.5mの苑路を，1971年度に設けた仮設道路まで東に延長し，仮設道路の東側に接する形で苑地を造成した。苑地は現地盤面より平均35cmの盛土を行ない，その上に10cm厚の砕石透水層を設け，さらに15cm厚の山土で覆い仕上げた。苑地の外周部には幅5.5mの植樹帯を設け，ムクノキ，クヌギ，シラカシ，ヤブツバキ等の植栽を行なった。(52頁図A)

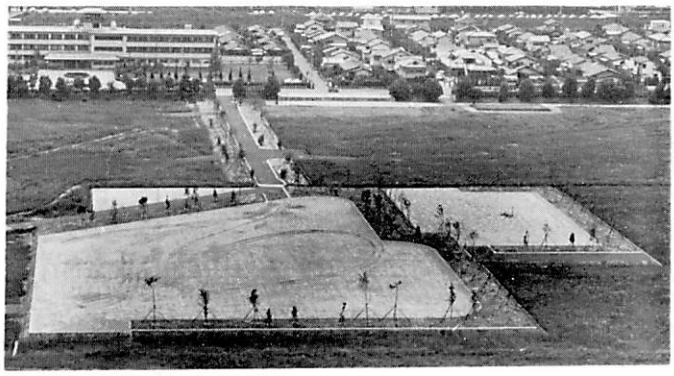
**法華寺町民家隣地の盛土整地**　1978年度より東院地区東辺部で行なっている害虫の繁殖防止のための盛土整地工事で，東院地区北方の民家隣接地3,550㎡について実施した。なお乾燥期の砂塵発生を防ぐため，表層には化粧砂利を厚さ3cmで敷き転圧し仕上げた。(52頁図B)

**地下水位観測孔の設置**　木質遺物の保存に大きな影響を及ぼす地下水についてその水質や水位を継続的に観測調査分析が出来るよう1971・72年度に宮内30ケ所に観測孔を設けている。しかし東院地区の大部分がそれ以降に買収されたために，観測孔はまだ完備されていなかった。そこで本年度は東院地区を中心に9基の観測孔を新設し，揚水試験，水質分析，土質試験，花粉分析，標準貫入試験などを行なった。また既に設置していたもののうち，その後破損又は砂利等の投入で，採水不能になっていた9基についても，元の位置の近くに観測孔を新設した。今回設置した観測孔の深さは3m孔13基，4m孔3基，5m孔2基である。(第1図C)




平城宮跡の整備図

**水路改修**　法華寺町民家から宮内に流入する水路2本について，草刈り，泥さらえ等の管理手間を軽減し，水路両岸の残存遺構を保護するため，鉄筋コンクリートU形ブロックを用い改修を行った。（52頁図D）



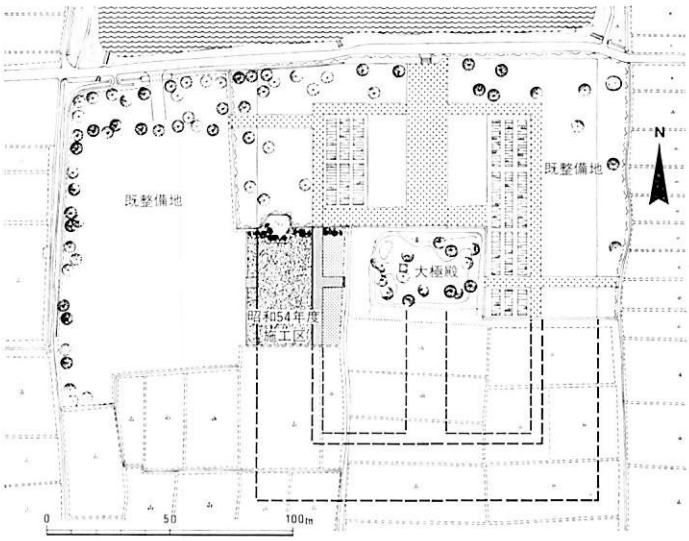
多目的苑地

**その他**　平城宮資料館の北で第3・4収蔵庫の西側に残っていた民有地を1978年度に買収したことから，収蔵庫西側の舗装整備を行った。（52頁図E）その他1977年度に復原整備した東院南門基壇周辺2ケ所に水銀灯を設置した。（52頁図F）

| | 多目的苑地 | 民家隣地盛土整地 | 地下水位測孔設置 | 水路改修 | 収蔵庫周辺整備 | 照明設備 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 規　模 | 11,700㎡ | 3,550㎡ | 18基 | 337.8m | 1,630㎡ | 2基 |
| 工　費（千円） | 42,840 | 5,810 | 5,450 | 473.0 | 4,120 | 1,200 |

**2.　藤原宮跡の整備**　(4)

1979年度の藤原宮跡の整備は，大極殿西方で1977年度の第21次発掘調査で確認された西殿を中心とした西面南北回廊部分の保存ブロックの延長工事を主とした4550㎡について整備を行なった。保存ブロックは回廊遺構を中心に含む22m幅を凝灰岩縁石で示し，盛土張芝を行なっている。なお保存ブロックの造成縦断勾配は，大極殿南前面から宮跡南端に至る現況地形の平均勾配0.7%を採用し，1978年度の施工南端に接続した。保存ブロックの内側（東）には幅員4mの苑路を設け，本年度施工区北端にある水路の横断には鉄筋コンクリートブロック溝蓋を布設し，既設苑路と接続した。なお西側多目的苑地から大極殿へのアプローチとして，西殿の中心線を通る位置に幅員4mの砕石敷苑路を設け，その両側は砂利敷きとした。工費は6,855千円であった。　（渡辺　康史）




藤原宮跡整備図

# 遺跡・遺物の保存科学 (7)

埋蔵文化財センター

**アルカリ溶液抽出による脱塩法の検討**

〈脱塩処理方法〉

埋没中に発生した鉄器サビの主な成分は $Fe_2O_3$（酸化第二鉄）や $Fe_3O_4$（四三酸化鉄），さらに $\alpha$-FeOOH（針鉄鉱），$\beta$-FeOOH（あかがね鉱），$\gamma$-FeOOH（鱗鉄鉱）などである。鉄が水や空気に触れることによって，$Fe(OH)_2$（水酸化第一鉄）が生成され，これが酸素の供給を受けると腐食の進行はいちだんと早くなる。出土鉄器の保存法は，サビ取りや脱塩処理をしたあと合成樹脂を含浸して補強し，表面に塗膜をつくり，外気から完全に遮断することである。

脱塩処理は出土製品，特に海浜や海水から引き上げられた遺物にはぜひとも必要なことになる。これ以外の地域からの出土品であっても海塩の風送，人為汚染，火山等にもとずく塩化物イオンの供給が想定されるので脱塩処理はすべての出土鉄器についておこなうのが望ましい。鉄器の脱塩法には，温水による塩化物の抽出法やアルカリ溶液による抽出方法などがある。本報告では，アルカリ溶液による抽出法のうち，NaOH（水酸ナトリウム），$K_2CO_3$（炭酸カリウム），そして LiOH（水酸化リチウム）の溶液を使った場合を中心に相互比較し，これらを作業性などの問題点も考慮して最も効果的な方法を提示することを目的とした。

①温水抽出法　塩化物の大半が水に可溶な性質を利用するもので，鉄器を温水（80℃）に浸漬するだけの最も簡便な脱塩法である。しかし，同法は水を使用するので浸漬中は防錆剤を添加し常時遺物の状態変化を観察する。なお，温水に抽出された塩化物イオン量を単位時間毎に測定し，量が一定になった時点で脱塩処理を完了する。

② NaOH 抽出法　鉄がアルカリ水溶液中では安定した状態になる領域があることを考慮した脱塩法である。NaOH の2％水溶液に常温で浸漬しておくだけでよい。塩化物を除去した後は，さらに鉄製品に浸透したアルカリ液を抽出するための処理が必要である。流水に浸して洗浄したのち，蒸留水（80℃）で再度洗浄する。なお，NaOH は強塩基性で潮解性を持つ危険物であり，溶解時の発熱も大きく，取り扱いには十分な注意が必要である。

③ $K_2CO_3$ 抽出法　$K_2CO_3$ の飽和溶液を80～90℃に加熱しておき，鉄器を浸漬する。脱塩には7～10日を要し，のちに，NaOH 抽出法の場合と同様，脱アルカリ，脱炭酸処理が必要である。鉄器に浸み込んだ $K_2CO_3$ 溶液の洗浄に際しては，蒸留水は80℃以上に熱しなければ効果は少ない。表は同一試料を用いて，①の方法との脱塩効果について比較したものである。溶出する〔$Cl^-$〕量は海浜地帯出土の試料なので当然多く，③では12日目を過ぎて，①は20日目を過ぎてほぼ一定になった。両者における脱塩効果は著しく異なる。

④ LiOH 抽出法　前述の方法とは異なり，水を使用しないで有機溶剤を利用する点が大きな特長である。鉄製品を無水メチルアルコールやメチルアルコールとイソプロピールアルコー

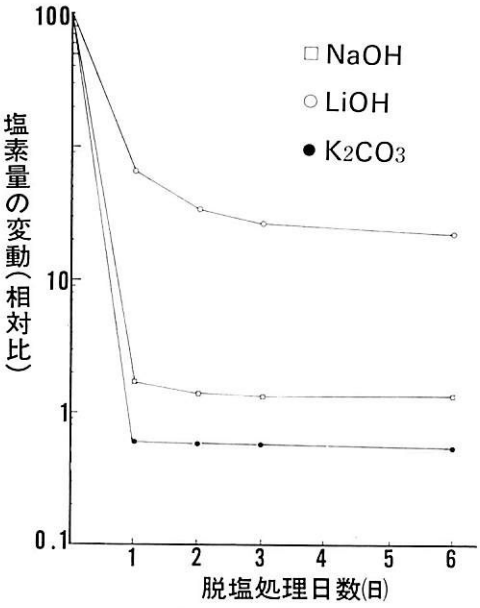
ルの混合液に浸して脱水をおこなうのが第一の工程である。第二に，メチルアルコール（1部），イソプロピールアルコール（1部）に LiOH(0.1%)を加え，さらにエチルアルコール（2部）を加えて作った溶液に浸して塩化物を抽出する。浸漬時間は1ケ月以上を要するので空気中の炭酸ガスが吸収されやすく炭酸リチウムが生成沈澱し，鉄製品表面を覆うことがあるので処理後の洗浄を十分におこなう。同法は脱塩処理後，メチルアルコールで十分に洗浄したあとはそのまま乾燥するだけでよく能率的であるる。

〈脱塩効果〉

脱塩の効果が最も大きいのは③の方法で②がこれに次ぐ。①と④は効果が少なく，両者にあまり差が認められない。図は，人工的にさびさせた鉄板を試料にして各種抽出法の脱塩効果を比較した結果を示す。あらかじめ，試料中の塩量を螢光X線分析法で測定し，抽出処理を続行しながら，1日毎に試料に残存する塩素量を測定し，相対的な数値で相互を比較した。これによれば LiOH 抽出法の効果が最も少ない。一方，②，③の方法は処理後の脱アルカリを要するが，単なる冷水による洗浄では効果が無く，温水（80℃以上）によって洗浄しなければ十分な効果が得られない。脱アルカリの期間は約一週間を要するので，①，②，③の場合には水を用いなければならず，新たなサビの発生が危惧される。特に，このサビ発生の恐れがある点を考慮すれば，有機溶剤を使用する方法が最も安全と言える。また，処理後の鉄器表面の色調は①，②，③の場合には変化することがあるが，④では変化なく，表面洗浄さえ十分におこなえばよい。このように，④の方法は脱アルカリなどの後処理が簡便であり，遺物の色調にも影響を及ぼさないなどの点から，同法が最も効果的であろう。ただし，塩化物の特に多く含まれている鉄器の場合にはアスベスト（石綿）などで包み，処理中に崩れないよう保護したうえで②，③などの方法を適宜利用するのが良い。

| 脱塩方法 ＼ 浸漬日数 | 処理液中の〔cl⁻〕mg/l | |
|---|---|---|
| | 温　　水 | $K_2CO_3$ 溶液 |
| 4　日 | 89 | 184 |
| 5　日 | 101 | — |
| 7　日 | 115 | 253 |
| 12　日 | 154 | 338 |
| 20　日 | (以後一定) | 399 |
| 25　日 | | (以後一定) |

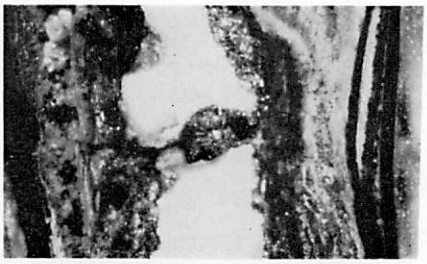
試料：石川県寺家遺跡出土鉄鍋片
（海浜地帯所在）
※奈文研の水道水の〔cl⁻〕32mg/l

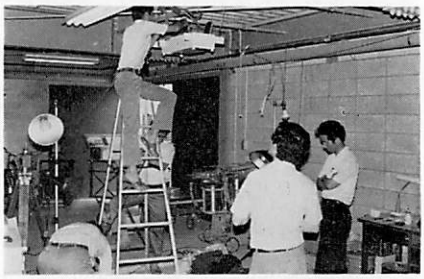


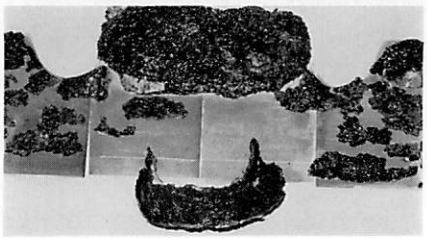

アルカリ溶液による脱塩効果
※ 鉄試料は3%食塩水を散布しながら一ケ月放置した。

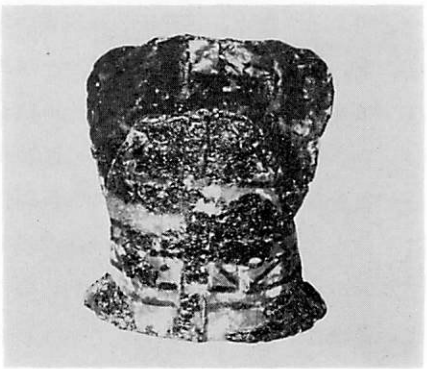
**漆残片からの短甲復原**　古墳から出土した木棺の中から漆塗りの短甲が発見された。それは小札(こさね)を皮紐で綴じており，全体に漆が塗られていた。漆塗の回数は顕微鏡による断面の観察から2～3回と推定された。しかし，この短甲の芯である鉄の部分はすでにさびてしまっており両面に塗られた漆膜が残っているだけである（図①参照）。したがって，短甲としての形状はすでに無く，押し潰されたままの状態であった。これらの漆膜を補強しながら短甲を復原することに成功したので報告する。短甲は大阪府八尾市所在の亀井遺跡から出土した木棺から発見されたものである。残存状態はきわめて悪いが，人骨や直刀，さらには漆塗りの櫛の模造品なども伴出している。以下，図に沿って復原工程を解説する。図②；漆の膜片には最初に水溶性のアクリル系合成樹脂（商品名：バインダー17）を薄く塗布した。同樹脂溶液は漆膜には殆んど浸透せず，漆膜上で樹脂の薄膜が形成される。十分に乾燥してから，さらに溶剤タイプのアクリル系合成樹脂（商品名：パラロイドB72）を塗布し，ガーゼで裏打ちをする。溶剤タイプの樹脂を直接塗布すると，漆膜が湿っているために合成樹脂と密着しにくい。なお，裏打ちされた漆膜は各層毎に丁寧に剝ぎ取っていく。図③；裏打ちされた漆膜を一枚ずつ剝す以前に，写真撮影・実測などをおこなうが，復原の際にきわめて重要となる漆膜片相互の位置関係の記録に万全を期すため，写真測量をも合わせておこなった。図④；剝ぎ取られた漆膜片は短甲の展開図上に配列して復原の下準備をする。図⑤；漆膜片の接合にはエポキシ系の接着剤を用い，裏側からは全体にエポキシ系合成樹脂とガラスクロスを使った強化プラスチックス（FRP）で補強した。欠失部分にはエポキシ系合成樹脂にマイクロバルーン（ガラス製）を粘り混ぜて充填・塑形した。

（沢田　正昭，秋山　隆保）









①小札断面の顕微鏡写真　②布張
③写真測量　④展開図配列　⑤仕上り

# 平城宮跡建造物復原にともなう材料工法の調査

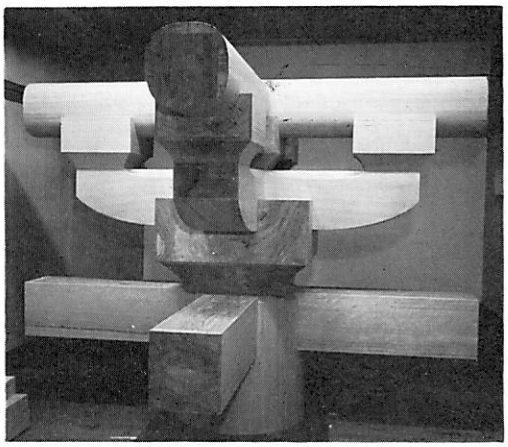
埋蔵文化財センター・平城宮跡発掘調査部

平城宮跡保存計画のなかに建造物の復原がある。今後，朱雀門のような大規模の木造建造物の復原が計画される場合，大量の巨材が必要である。朱雀門は昭和39，40年度の第16次調査でその規模が判明し，柱間寸法は何れも5.1m，5間3戸の二重門に復原され，40年度には10分の1の復原模型が製作されている。復原に要する木材は900㎥に及ぶ。桧巨材の大量の確保は量及び価格の両面で年々むずかしくなっているため，巨材に代る材料の選択と工法の検討を文化庁の依頼によって行った。鉄やコンクリート系材料など全く異質の材料工法より，伝統的な技術を生かすことが出来，かつ桧の木肌を見せるものとして特に集成材を取上げた。

調査の内容は，朱雀門の復原を想定して組物の一部を原寸で試作するとともに，試験材によって強度試験を行い，さらに組物・軒廻などの構造上の問題点，基礎工事など施工上の問題点ならびに経済性などについて検討した。

試作した原寸模造は柱の頂部・頭貫・大斗・肘木・巻斗・丸桁・地垂木とした。内部の芯材には良質の米松板材を乾燥のうえ圧着し，化粧材は台湾産桧の赤身材を貼付け，鉋仕上げとし，芯材の接着にはレゾルシノール樹脂，化粧材にはエポキシ樹脂を使用した。別に集成材と桧及び米松の1木でせい10cm，巾9cmの試験材を作り，試作地垂木とともに圧縮・曲げ・せん断試験を行ったところ，集成材が台桧に上まわる強度を示した。

朱雀門の建立は当然奈良時代初頭と考えられ，三斗先の組物などは薬師寺東塔と同系の比較的簡単な構造であったはずであり，軒の出も大きく，現在構造計算に採用されている桧の長期許容応力度によって検対すると，軒先に延る肘木，尾垂木や地垂木などに強度上の問題点があり，集成材を使用してもなおかなりの補強を考えなければならない。補強方法は計画立案にも大きく影響するため，早急に検討する必要がある。経済的な面でも集成材が有利であるが，米松の大量使用によって自重は大きくなる。厚さのうすい木口面の化粧材貼付けや木工具の使用などにも問題があって，今後の検討事項も多いが，特に長尺で規格的な部材に適するように考えられる。なお，この試作品製作，強度試験などは財団法人建築研究協会に委嘱した。　（岡田　英男）



朱雀門組物現寸模型

# 法金剛院『古瓦譜』の調査

平城宮跡発掘調査部

京都市右京区花園扇野町所在法金剛院住職川井戒本氏の御好意により，同院所蔵の古瓦柘影集『古瓦譜』を使用，マイクロフィルム化すると同時に各種の調査をおこなった。詳しい報告は後刻出版の予定であるが，ここで概要を紹介しておきたい。

『古瓦譜』は８帖からなり，その製作は文政10年から天保３年にかかる。各帖は縦32cm，横24cm内外の和装本で，柘は油墨でないため全体にやや不鮮明である。各帖の表題と製作年，および収録された柘影数は以下のとおりであるが，これらを収めた箱書きに「和漢古瓦譜八帖法金剛院」とあり，総称して『古瓦譜』と呼ぶ所以はここにある。

| | | |
|---|---|---|
| a. | 「宮城神社公家弟宅古瓦彙<br>諸寺伽藍堂譜坊院古瓦彙　所持一　文政十亥年春ヨリ始」 | 101枚 |
| b. | 「宮城神社公家弟宅古瓦彙<br>諸寺伽藍堂□〔坊〕院古瓦彙　他所蔵」（文政十年夏六月） | 86枚 |
| c. | 「南都之分<br>倭州諸寺伽藍堂塔譜古瓦彙　所持二　文政十亥年分」 | 86枚 |
| d. | 「古瓦彙　所持分三　文政十亥□〔四カ〕分」 | 91枚 |
| e. | 「古瓦譜　所持之分□　文政十十一亥子」 | 149枚 |
| f. | 「古瓦譜　他家蔵　文政十二丑蔵二月ヨリ」 | 122枚 |
| g. | 「古瓦譜　壹」（文政十三年寅九月） | 序文＋41枚 |
| h. | 「古瓦集五　所持分　文政寅年<br>并天保元年　二夘年　同三辰年」 | 51枚 |

上記の拓影数を合計すると727枚となるが，実際にはｂが２枚，ｃが５枚，ｇが58枚多く，総数795枚である。うちわけは軒瓦676，平瓦33，瓦経14，文字瓦28，鬼瓦１，塼佛１，その他42である。軒瓦のなかには同一物の別拓が含まれており（三重複するものもある），実数は613となる（軟丸瓦347＋軒平瓦266）。

ほとんどの拓には註記が付されており，出土地ないしは採集地，所持者などが判明し，出土地の是非についても今日の我々の知見と矛盾するところごく僅かである。軒瓦拓を出土地により大別すると，大和297，山城263，近江13，播磨４，河内４などで北は武蔵，南は太宰府におよぶ。出土地点別にすると平安宮66，唐招提寺54，法金剛院（大安寺を含む）45，平安宮42が多い。ｇには「古瓦帳序」と題した大江廣海の手になる序文が付されているが，採拓から集録に至る経過については全く触れていない。川井住職によると『古瓦藍』の作者は宝静誉淳という。これを裏づけるものとしてｇの末尾の「宝静之印」「玉棡」印を挙げ得る。誉淳は唐招提寺の僧で，のち壬生寺を経て法金剛院に移り，ここで没した。三ケ寺関係の拓が多いのも，この故であろう。

（山本　忠尚）

# 高取町の仏像調査

飛鳥資料館・美術工芸研究室

昭和54年7月から55年2月にかけて高取町教育委員会の協力を得て，町域内43ケ寺の550余件に及ぶ仏像彫刻の調査を実施した。この調査は明日香村，桜井市の調査に引き続き，飛鳥及びその周辺の仏教美術作品を対象とした悉皆調査の一環として行ったもので，飛鳥資料館ではその成果に基づきすぐれた仏像彫刻の特別陳列をその都度開催している。今回の調査では白鳳時代から室町時代にかけての作品30軀が見出された。

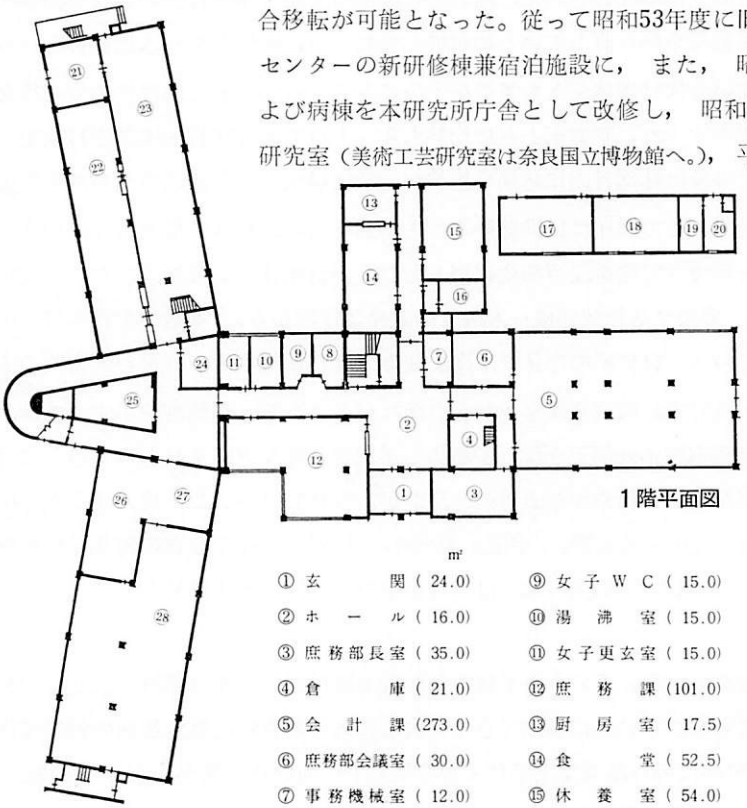
町域内最古の作品として注目されたのは南法華寺（壺坂寺）の銅造観音菩薩立像である。正面に化仏をあらわした三面頭飾を戴き，腹前で両掌を重ねて宝珠を執り，蓮華座上に直立する装飾豊かな小金銅仏で，その形制は大阪府観心寺の観音菩薩立像に類似している。本像の伝来は残念ながら不明であるが，太宝年間の創建と伝え，7世紀末の古瓦や塼仏が出土する古刹にふさわしい遺品といえよう。

平安時代前期に溯る作品は既に重要文化財に指定されている子島寺の十一面観音立像以外には見い出されなかったが，これに続く平安中期の作品としては下土佐・光明寺の観音菩薩立像と越智・光雲寺の文殊菩薩立像が注目された。両者とも後補の手足・漆箔などがかなり像容を損い，特に光雲寺像は面相部を彫り直しているのが惜しまれるが，両像とも一木造りらしい量感のある作品である。光明寺像は頭体部とも奥行を十分にとり，抑揚のある肉付けや要を得た裳の襞の処理などの表現もすぐれ，正側面ともに均勢もよくとれており10世紀末乃至11世紀初の制作と見られる。光雲寺像は体部背面に背刳を施すが，裳に退化した翻波式衣文や渦文をあらわすなど若干古様を示し，その制作は10世紀後半にまで溯ると思われる。なお本像は現在の京都府宇治市に所在した福清寺旧像を江戸時代に移したことが台座銘により知られた。平安後期の作品は22軀を数え，隣接する地域同様一木造りの素朴な作例から，本格的な寄木造りの彫像まで多岐にわたっている。11世紀の作品では南法華寺の大日如来坐像，清水谷西室院の十一面観音立像，上子島・長円寺の地蔵菩薩立像など小像ながらよく整った像容を示す一木像があり，12世紀の作例では西室院不動明王立像，子島寺千手観音立像などいずれも寄木造りになるいかにも平安後期の彫像らしい穏やかな表現の作品が伝えられている。この他，浄土系寺院の本尊のうち，光明寺，松山・天然寺，市尾・如来寺，兵庫・宗運寺などの阿弥陀如来像が12世紀まで溯り，特に光明寺，如来寺などは当時の中央の作風を示す作品として注目された。

鎌倉時代以降の遺例は数少いが，そのうち子島寺の伝坂上田村麻呂倚像は樟材一木造りの神像風の作品で，簡潔な表現ながらいかにも武将らしい表情にあらわされた鎌倉後期の特異な作品として注目され，室町時代の作品では上子島・観音院の十一面観音立像が大永3年（1523）に制作されたことがわかる基準作例として注目された。（大脇　潔）

# 奈良国立文化財研究所庁舎

本研究所は奈良市春日野町に庶務部，三研究室，佐紀町に平城宮跡発掘調査部および埋蔵文化財センター，橿原市に飛鳥藤原宮跡発掘調査部，高市郡明日香村に飛鳥資料館と施設が点在していた。春日野町の庁舎は明治35年の建造物で，奈良公園内の特別風致地区にあり，現状変更は極めて困難な状態であった。さらに，平城宮跡発掘調査部，埋蔵文化財センターは，特別史跡平城宮跡内にある資料館，および収蔵庫を用いて活動を続けてきたが，これらの建物は資料館，収蔵庫としてのみ，仮設的に認められたものであり，平城宮跡発掘調査部と，埋蔵文化財センターは本来的には平城宮跡内に位置すべきものでないことは，すでに昭和44年当時に文化庁の「平城宮跡保存整備委員会」の中で指摘されていたことである。またその後，平城宮跡全域を遺跡博物館として整備しようとする平城宮跡遺跡博物館基本構想もあり，宮跡内には展示資料館，便益施設等を残し，調査研究部や事務室等は，宮跡の外に置くことが望まれていた。また，埋蔵文化財センターの研修生宿泊所は借地内のしかも仮設建築（プレハブ）という状態であった。このような状況の中で施設計画を進めていったところ，幸い平城宮跡西側に隣接する奈良県立病院奈良分院の跡地および建物を譲り受けることができ，本研究所の統合移転が可能となった。従って昭和53年度に旧看護婦寮を埋蔵文化財センターの新研修棟兼宿泊施設に，また，昭和54年度に旧診療棟および病棟を本研究所庁舎として改修し，昭和54年４月に庶務部，二研究室（美術工芸研究室は奈良国立博物館へ。），平城宮跡発掘調査部および埋蔵文化財センターを新庁舎に統合移転した。



1階平面図

m²

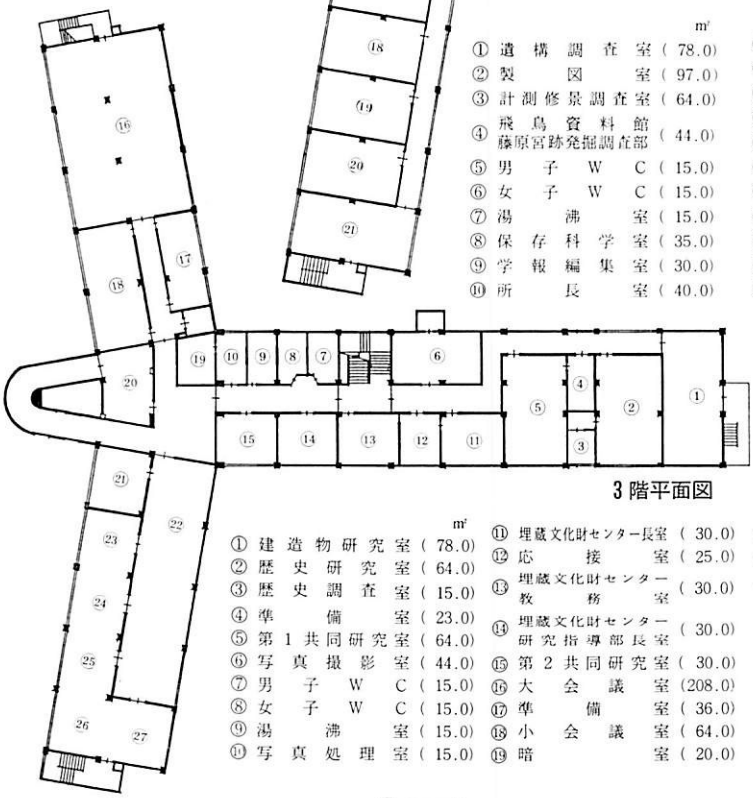
| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ① | 玄関 | (24.0) | ⑨ 女子WC | (15.0) | ⑰ 電気室 (48.0) |
| ② | ホール | (16.0) | ⑩ 湯沸室 | (15.0) | ⑱ 機械室 (46.0) |
| ③ | 庶務部長室 | (35.0) | ⑪ 女子更衣室 | (15.0) | ⑲ 庶務課分室 (12.0) |
| ④ | 倉庫 | (21.0) | ⑫ 庶務課 | (101.0) | ⑳ 脱衣・シャワー室 (13.0) |
| ⑤ | 会計課 | (273.0) | ⑬ 厨房室 | (17.5) | ㉑ 機械室 (32.0) |
| ⑥ | 庶務部会議室 | (30.0) | ⑭ 食堂 | (52.5) | ㉒ 資料庫 (130.0) |
| ⑦ | 事務機械室 | (12.0) | ⑮ 休養室 | (54.0) | ㉓ 第2書庫 (179.0) |
| ⑧ | 男子WC | (15.0) | ⑯ 電話交換室 | (18.0) | ㉔ 写真資料室 (20.0) |
| | | | | | ㉕ 資料整理室 (32.0) |
| | | | | | ㉖ 図書資料室 (64.0) |
| | | | | | ㉗ 図書閲覧室 (37.0) |
| | | | | | ㉘ 第1書庫 (252.0) |
| | | | | | ㉙ 倉庫(地階) (53.0) |

## 施設の概要

所　在　地　奈良市二条町２丁目９－１
敷地面積　8,860㎡
建築面積　庁舎 2,023㎡　研修棟　517㎡
建築延面積　庁舎 5,223㎡　研修棟 1,318㎡
構　　造　鉄筋コンクリート３階建

2階平面図

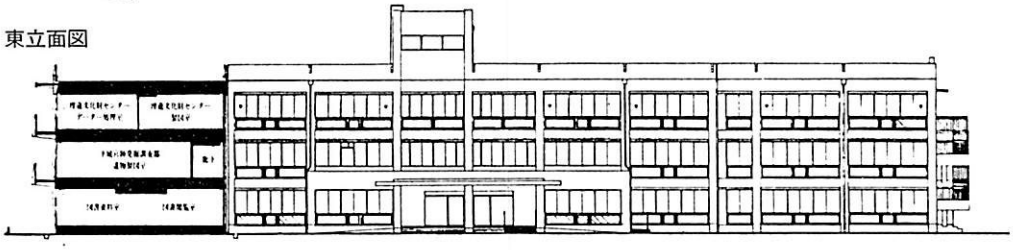
| | ㎡ | | |
|---|---|---|---|
| ① 遺構調査室 | ( 78.0) | ⑪ 応接室 | ( 37.0) |
| ② 製図室 | ( 97.0) | ⑫ 秘書室 | ( 15.0) |
| ③ 計測修景調査室 | ( 64.0) | ⑬ 平城宮跡発掘調査部長室 | ( 30.0) |
| ④ 飛鳥資料館 藤原宮跡発掘調査部 | ( 44.0) | ⑭ 貴重品庫 | ( 60.0) |
| ⑤ 男子WC | ( 15.0) | ⑮ 第3書庫 | (247.0) |
| ⑥ 女子WC | ( 15.0) | ⑯ 平城当番室長室 | ( 34.0) |
| ⑦ 湯沸室 | ( 15.0) | ⑰ 遺物製図室 | ( 56.0) |
| ⑧ 保存科学室 | ( 35.0) | ⑱ 考古第1調査室 | ( 56.0) |
| ⑨ 学報編集室 | ( 30.0) | ⑲ 考古第2調査室 | ( 56.0) |
| ⑩ 所長室 | ( 40.0) | ⑳ 考古第3調査室 | ( 56.0) |
| | | ㉑ 史料調査室 | ( 70.0) |



3階平面図

| | ㎡ | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ① 建造物研究室 | ( 78.0) | ⑪ 埋蔵文化財センター長室 | ( 30.0) | ⑳ 図化室 | ( 38.0) |
| ② 歴史研究室 | ( 64.0) | ⑫ 応接室 | ( 25.0) | ㉑ データー処理室 | ( 32.0) |
| ③ 歴史調査室 | ( 15.0) | ⑬ 埋蔵文化財センター教務室 | ( 30.0) | ㉒ 埋蔵文化財センター研究室 | (144.0) |
| ④ 準備室 | ( 23.0) | ⑭ 埋蔵文化財センター研究指導部長室 | ( 30.0) | ㉓ 情報資料室 | ( 32.0) |
| ⑤ 第1共同研究室 | ( 64.0) | ⑮ 第2共同研究室 | ( 30.0) | ㉔ 遺物処理研究室 | ( 32.0) |
| ⑥ 写真撮影室 | ( 44.0) | ⑯ 大会議室 | (208.0) | ㉕ 考古計画研究室 保存工学研究室 | ( 32.0) |
| ⑦ 男子WC | ( 15.0) | ⑰ 準備室 | ( 36.0) | ㉖ 測量研究室 | ( 46.0) |
| ⑧ 女子WC | ( 15.0) | ⑱ 小会議室 | ( 64.0) | ㉗ 集落遺跡研究室 | ( 23.0) |
| ⑨ 湯沸室 | ( 15.0) | ⑲ 暗室 | ( 20.0) | ㉘ 倉庫（屋上） | ( 24.0) |
| ⑩ 写真処理室 | ( 15.0) | | | ㉙ 倉庫（屋上） | ( 25.0) |

東立面図



# 公開講演会要旨

**古代文献史料にみられる土器**　正倉院文書と延喜式には土器関係の記録が多く，文献史料と考古学的成果の融合が望まれている。正倉院文書には50余にのぼる器名があり，用途上，食器，貯蔵器，調理具に分かれる。このうち食器に焦点をあてると，組み合せでは，麦埦，片盤，饗坏，羹坏，塩坏の5器セット，これから塩坏を欠く4器セット，さらに饗坏を欠く3器セットが抽出できる。この食器のセットに各器の購入価格を加えるならば，①鋺形一水埦二羹杯　②大片埦一片埦二饗杯　③小赤杯二片杯二羹杯　④田杯二窪杯一塩杯という系列化が可能であり，形態による名称と用途による名称とが結合できる。さらに，単に盤，杯と書く場合は片盤，羹杯をさすことも明らかとなった。　（吉田　恵二）

**斑鳩の瓦工たち**　斑鳩の寺院から出土した瓦を中心に斑鳩の歴史的背景について考えてみた。まず，7世紀代の軒瓦を4期25年に編年し，単弁素弁軒丸瓦や忍冬文軒平瓦の型式学的変遷から法隆寺をはじめとする寺院の造営年代について論証し，西院伽藍の創建が定説より遡る可能性を指摘した。また，忍冬文軒平瓦の製作技法にふれ，〝軒平瓦桶巻き作り〟とも呼ぶべき軒平瓦を4枚一度に作る方法ついて論じた。それは回転台の上に瓦当文様を4つ彫りこんだ環状の箆型を置き，その内側に模骨をそわせる。次に，瓦当部を厚くした粘土板を巻き，叩きながら成形すると粘土の可塑性と重圧によって瓦当文様が自然にプレスされる技法である。この技法は飛鳥の造瓦技法と異なる斑鳩の瓦工の独自性といえよう。　（岡本　東三）

**郡衙遺跡をめぐる諸問題**　郡衙は郡庁・正倉・厨・館などに比定し得る建物群からなり，建物規模や配置の企画性等の点で集落と相対的に区別される特徴をもつのが一般的である。これらは水陸交通の要衝に立地しており，物資の集散など都城や国衙との交通関係を重視した選地を行なっている。遺跡の初現は七世紀末頃に求められる例が多く，郡衙が，旧来の豪族支配の単なる延長上としてではなく，中央国家権力と結合した新たな地域支配の政治的拠点として設けられたことを示している。しかし，八世紀後半以降，郡庁の変化，正倉火災，郡衙の移転などが顕著となる。遺跡の存続時期をみると，国衙は十世紀以降も存続しているが，郡衙は九世紀段階で消滅する遺跡が多く，郡衙による地域支配の大きな転換を示唆している。（山中　敏史）

**イタリアにおける町並保存**　イタリアはヨーロッパの中でも，街区保存の事業を先進的に進めている国である。ボローニャやフェラーラなどで確実に事業が進んでいるし，ローマやヴェネツィアでも計画が策定され，事業が進み始めている。私は，1978・11から1979・7にかけて，ローマに滞在しこれらの具体例を学ぶ機会を得た。現地での見聞をふまえて，①イタリアにおける歴史環境の破壊と町並保存の歴史，②イタリアの町並保存の実状を，法的考え方・行財政上の体制・補助のあり方・保存修復工事の技法・住民の生活と要求など，各方面から報告した。イタリアの実際と技法を直ちに，全面的に日本には導入できないが，考え方や事業の進め方には，大いに学ぶべきものがあることを明らかにした。　（上野　邦一）

# 調 査 研 究 彙 報

## 美 術 工 芸 研 究 室

**日本美術彫刻等修理記録の刊行(特別研究)** 本年度は同書のVIとして，京都府下の彫刻等108件をとり上げて整理，研究を行い，図解276頁， 解説209頁，写真196頁にわたる修理記録を公刊した。

**塔本塑像の復元的研究（科学研究）** 薬師寺西塔跡出土塑像断片を中心とした研究で，52年度同塔跡から出土した1864片の整理， 調査を終え， これに関連するものとして宮城県多賀城講堂跡，岡山県久米廃寺，鳥取県斉尾廃寺，群馬県山王廃寺，武蔵国分寺跡などから出土した塑像断片の調査を行った。（田中義恭，佐藤興治，田辺，大脇）

**その他の調査** 岐阜県恵那市，奈良県田原本町，同広陵町等の各教育委員会の依頼によって各市町内の仏教美術を中心とした文化財調査に協力した。また，昨年来奈良県下を中心に仏像の盗難が相継いだが，犯人が奈良県御所警察署に逮捕され，発見された仏像約40件について，同署の依頼で調査を行った。これらの中には平安後期の作品や室町時代の在銘品などが注目すべきもの数点が含まれていた。

## 建 造 物 研 究 室

**重要文化財「船屋形」の修理** 神戸市垂水区舞子町 牛尾吉朗氏の 邸内にあったものを 神戸市が同氏より寄贈をうけ生田区中山手５町目の相楽園内に 移築した 工事である。 53年度は解体工事，54年度は組立工事で工事中の復原的調査と工事指導とを行った。この船屋形はもともと姫路藩主の川御座船として建造されたものであるが，明治初年に船本体は失なわれその屋形部分だけが陸上げされて茶室として使われていた。総二階建てで二階中央の上段の間が御座，その前方が床几の間，後方が次の間と呼ばれる。一階の天井高は本来なら低く1.25mしかないが，今回も船框下の継ぎ足し部分は撤去せず移転前のままとした。上段の間内法長押金具の紋所に表裏あわせて４度の変遷があることから，天和２年（1682）から宝永元年（1704）の間在城した本多家時代に建造され，以後代々の藩主に引き継がれ使用されていることがわかった。なお修理は年度末で完了し，その修理工事報告書が刊行されている。（細見）

**近世社寺建築特別調査** 既実施の 全県的な緊急調査の成果からある 特定の地域または特定の形式を選び，さらに精査を加え重要文化財指定に必要な基礎資料の作製を目的とした。今年度は岡山県津山市を中心に分布する入母屋造妻入り向拝付き本殿（中山造）が対象である。そのうちの八幡神社本殿（津山市北・1669）が54年３月に指定された。（細見・上野・中村雅治）

**桂離宮建築調査** 当研究所で協力している桂離宮調査は，今年度，新御殿，旧役所について，建築技法，後世の変更箇所などについて行った。なお古書院，中書院は今年度竣工した。（工藤）

**文化財建造物修理用資材需給実態調査** 文化庁が継続的に行っている調査で本年度は壁材料， たたき土（床材）が対象である。当研究所は委嘱を受け長崎， 愛知両県のたたき土について現地

調査した。たたき土は文化財建造物や茶室などの古式建築の一部に用いられている程度で商品として流通していないが，原料は不足しておらず，道路工事現場，土採場から入手することは困難ではない。しかし原料，工法には地方差があり，建築の地方色を生かすためにもこの点は大切と思われる。（吉田）

**倉吉市町並調査**　文化庁補助金事業による調査。川に沿った土蔵群が景観的な中心となることはいなめないが，屋敷構，町の構造からは表通りに面した主屋も無視できない。今回の調査で町並の文化財的価値はかなりある，と認められたので保存計画策定が早急に望まれる。（吉田）

**民家の軸部構造の系統的発展に関する研究（科学研究）**民家の軸部構造の類型を整理，分析して年代的な発展と地方的系譜を明らかにしようとする。熊本県を中心とする九州，沖縄各地の現地調査（民家実査と資料調査），民家緊急調査報告書による構造類型の整理を行った。（吉田）

**ギナイ氏研修**　ギナイ氏はトルコのイスタンブール国立工学建築アカデミーの準教授で建築史，古建築修理技術専攻である。昭和54年9月から55年3月迄滞在し，我国の古建築，主として町屋の建築技法と修理技術を調査研究された。氏は国際交流基金の招聘を受け，当研究所が受入れたものである。（吉田）

## 歴史研究室

**東大寺文書調査**　文化庁の委嘱による東大寺未成巻文書の調査で，1974年度から継続。未成巻文書第3部第12（雑）442号から，第6部（楽人舞人）30号までの調書を作製した。但し，そのうち第5部（造営勧進）で別置してある分は未調査である。また写真撮影については，第3部第5（売券）から，第3部第8（譲状）まで，完了した。前年度にひきつづいて，『東大寺文書目録第2巻』（第1部第24雑庄，第25雑，第2部寺法）を刊行した。

**興福寺典籍古文書調査**　従来よりの継続調査。10月。第53・55函の調査完了。また興福寺大和国雑役免坪付帳（東諸郡）および肝要図絵類聚抄の写真撮影をした。

**西大寺典籍古文書調査**　従来よりの継続調査。2月。第76函調査完了。

**仁和寺典籍古文書調査**　従来よりの継続調査。3月。塔中蔵階下書籍の調査をひきつづき実施し，第205～207函の調査を終えた。また「三十帖冊子」附である行遍僧正消息1巻および三十帖策子々細1巻を調査し，写真撮影をした。

**「法曹至要抄」断簡の調査**　3月。岡山県金光町の金光図書館所蔵「法曹至要抄」断簡の調査および写真撮影をした。この断簡は文和2年（1353）具注暦残闕の紙背に，法曹至要抄出挙条と借物条のうち6ケ所が書写されているものである。

**その他の調査**　東寺百合文書調査　6月，8月，1月，文化庁美術工芸課の指定調査への協力。高山寺（協力）　7月。宝生院蔵「尾張国解文」調査　7月，稲沢市の依頼による。東寺観智院金剛蔵聖教調査（協力）　8月，9月。静岡県森町藤江喜重氏所蔵（小杉樞邨旧蔵）書跡等調査（協力）　8月。醍醐寺（協力）　8月。石山寺（協力）　9月，12。正倉院聖語蔵調査（協力）　10月。東京大学史料編纂所（島津家文書など）　1月。

小杉榲邨旧蔵品には，山城国計帳断簡など正倉院文書や藤原定家自筆「明月記」断簡などが含まれており，静岡県より近時目録が刊行される予定である。

**平城宮跡発掘調査部**

**法隆寺境内の調査**　1　調査地は，東院伽藍の伝法堂の西南約15m，東院の西築地に接する位置にあたる。法隆寺が，ここに門を新営することになり，奈良国立文化財研究所と橿原考古学研究所が共同で事前調査を行った。東院伽藍の下層からは，1934年に始った修理工事によって，斑鳩宮跡と推定される大規模な掘立柱建物が発見されており，今調査地点はこれに関連した遺構の存在が予想された。調査は東西5.5m，南北11mの範囲で行った。発掘区の一部は近代の瓦溜などによって破壊されていたが，最も古い時期の遺構としては，斑鳩宮に関連すると考える掘形2を検出した。これは約1.2×1mの規模である。次いで，平安時代の東院修理に関連した掘立柱の東西塀と，瓦を積んで井筒とした井戸がある。この井戸は中心に曲物を2段にいれ，この井戸枠を四角く囲むように6691型と山字形の中心飾をもつ軒平瓦を平積みしている。井中からは後にも述べる隅木蓋瓦の破片が出土。この他，中世の土器を含む不整形の浅い土壙がある。

さて，隅木蓋瓦は，前面と側面の破片であるが復原を試みた。前面には鬼面文を飾り，側面には唐草文を表現している。蓋部上面を山形に作るが，下部は平端なようである。また茅負の隅角に嵌めこむための三角形の刳りがある。現存部の切りこみからすると，隅角を鋭角・鈍角いずれにも復原可能である。前者は真角の建物に，復者は八角円堂への用途を推定できる。確実な寸法は，側面の高さ（7.8cm）と正面の一部のみであるが，幅30cm，長さ39cmに復原できる。文様の特徴からみて，時代は平安初期と推定する。

この隅木蓋瓦や井筒の軒瓦が東院伽藍で使われたものと仮定すると，東院の創建や修理に関する記録などから，貞観年間の修理に製作され，その後の修理時に廃棄されたと推定することもできる。（金子）

**法隆寺境内の調査**　2　昭和53年度からはじまった防災工事に伴う調査である。奈良県教育委員会との共同調査，今年度は，伽藍裏山の通称梵天山の貯水槽建設予定地，西院伽藍の上御堂と地蔵堂の周辺を発掘した。地蔵堂地区で奈良・平安時代の溝を検出した以外，ほとんどの遺構が近世のものである。2・3月。（金子・毛利光）

**伯耆国分寺の発掘**　環境整備にかかる発掘調査で，昨年につづき南門推定地を中心に行なった。調査区は昨年度トレンチの東側で，門の遺構は後

法隆寺東院出土隅木蓋瓦

世の削平が著しく，不明瞭であったが，地山を削り出した基壇南辺の一部を検出した。基壇前面からは瓦類が多く出土している。今回の調査によって，南門の位置をほぼ推定できることとなった。この他，塔の南で，寺域の南限溝を確認した。倉吉市教育委員会。10月。（佐藤巳治，安田）

**出土木製品の調査**　考古第一調査室では今年度は，次の2箇所で行った。天理市布留遺跡の調査。古墳時代の木製刀剣装具多数，倭琴などを実測。5月28～29日（菅原・金子・毛利光・井上）。兵庫県但馬国分寺跡及び姫谷遺跡の調査，人形・馬形・鳥形など平安時代の祭祀具を多量に出土した遺跡。人形，馬形等実測。　2月（金子）

**美濃国分寺環境整備**　大垣市の依頼により，今年度は給水工事，修景植栽工事の実施設計，施工の指導を行なった。（安原・田中哲雄）4月～3月

**三ツ塚廃寺環境整備**　市島町の依頼により，今年度は三ツ塚廃寺西辺部の整地，苑路造成・遺構表示実施設計の指導を行なった。（田中哲雄）11月

**環境整備担当者会諺**　55年1月31日～2月1日。5回目のこの会議は三重県斎宮跡で行なわれた。文化庁・宮城県・福井県・広島県・福岡県の常任担当者の他，京都・滋賀・三重の各府県等の参加もあり，活発な意見交換が行なわれた。主な問題点は斎宮跡の整備に関連して，掘立柱址の整備について，各研究所から事例の発表が行われた。また環境整備全般の問題点についても検討が行なわれた。（田中哲雄・渡辺）

**弥勒寺環境整備**　関市の依頼により，史跡弥勒寺の整備に関連して保存管理計画策定のための指導を行った。（安原・田中哲雄）10月

**埋蔵文化財センター**

**美作国分寺跡の調査**　回廊と寺域，東・西・北限の確定を目的とした調査の指導を行なった。東面回廊，寺域東限を画すとみられる溝，塔の東雨落溝と推定される玉石敷溝等を検出した。岡山県津山市教育委員会。6月（田中琢）

**上原遺跡の発掘調査**　昨年度に引続く調査で，大規模な掘立柱建物群およびその北限・西限を画すとみられる溝を検出した。遺跡の性格解明は来年度の調査に待たなければならないが，遺跡の範囲は，東西約150m，南北150m以上と推定される。7・9・12月。気高町教育委員会。（山中）

**座光寺バイパス遺跡の調査**　郡衙跡とも推定されている恒川遺跡における掘立柱建物群の調査指導，馬骨の取り上げ処理，新井原12号墳墳丘断面の土層はぎとりの指導を行なった。11・2・3月。飯田市教育委員会。（工楽・沢田・秋山）

**薩摩国分寺跡の調査**　講堂では，掘込地業（46.5×14.5m），凝灰岩をたたき込んだ固い地業，礎石を検出した。金堂の北西部では，南北棟5×4間総柱の掘立柱建物を検出した。伽藍中心部の外の南・東・北の三辺では素掘の溝を検出し，寺域確定の手がかりをえた。8月～9月。（岡本，山崎）

**佐賀茶園原遺跡の調査**　サヌカイト原産地内での石器製作所遺跡。良好な生活立地地域内にあ

### 3　飛鳥資料館の運営

**展　示**

第一展示室　常設展示

第二展示室　特別陳列「桜井の仏像」
（1979.3.27～1979.5.6）
特別展示「飛鳥時代の古墳
―高松塚とその周辺―」
（1979.9.28～1979.11.11）

**普　及**

前年同様インフォメーションルームで観覧者の質問に応じている。また特別展示のカタログとして「桜井の仏像」及び「飛鳥時代の古墳」を刊行。

**入館者数**（1979.4.1～1980.3.31開館日数303日）

**模造製作**

高松塚古墳出土品（棺飾金具）
橘寺火頭形塼仏，石のカラト古墳

### 4　埋蔵文化財センターの研修・指導

**研　修**　埋蔵文化財の保護に資することを目的として、主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

(1) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（写真測量課程）
1979年5月9日～5月19日（参加者12名）

(2) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（自然遺物課程）
1979年6月11日～6月23日（参加者12名）

(3) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修
1979年7月23日～8月25日（参加者24名）

(4) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺跡調査課程）
1979年9月17日～10月6日（参加者16名）

(5) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺物保存科学課程）
1979年10月18日～11月2日（参加者13名）

(6) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺跡保存整備課程）
1979年12月3日～12月12日（参加者24名）

(7) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺物整理課程）
1980年1月28日～2月9日（参加者24名）

(8) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修（第1回特殊調査技術課程）
1980年2月14日～2月18日（参加者24名）

(9) 昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（調査計画課程）
1980年3月3日～3月13日（参加者18名）

(10) 研修員受入

ア　御村　精治（度会郡小俣中学校教諭）
垣見　博一（三重県立白子高校教諭）
1979年10月2日～11月20日
榎本　義譲（松阪市第四小学校教諭）
1979年6月4日～8月3日

イ　小嶋　芳孝（石川県立埋蔵文化財センター主事）
1979年6月25日～6月30日

ウ　David Albert Slawson（米国インディアナ大学大学院生）
1979年9月21日～12月5日

エ　Bahira Al-Kaissi（イラク文化芸術省考古総局化学技師）
Thakaa Gazie Magid（イラク文化芸術省考古総局保存技師）
1979年12月17日～12月21日

オ　石井　　毅（財団法人茨城県教育財団主任調査員）
佐野　　正（〃）
1980年3月21日～3月25日

**調査整備等指導**

（北海道）史跡旧下ヨイチ運上家，（青森）弘前城三の丸庭園遺跡，（岩手）萪内遺跡，二戸市上里遺跡，史跡胆沢城跡，（秋田）秋田城跡，史跡払田柵跡，東北縦貫自動車道建設関係遺跡，（福島）慧日寺跡石塔，（群馬）新保遺跡，芳賀団地東部遺跡，（埼玉）辛亥銘鉄剣保存，（石川）和田山・末寺山古墳群，（福井）朝倉氏遺跡，（長野）座光寺バイパス遺跡，松本高校遺跡，（岐阜）史跡美濃国分寺跡，羽生遺跡，史跡弥勒寺

跡，美濃古窯跡群，（静岡）伊庄谷横穴墳群，（愛知）馬見塚遺跡，尾張国府跡，石塚古窯跡，（三重）川原井遺跡，斎宮跡，北堀池遺跡，天華寺廃寺，（滋賀）榿木原遺跡，（京都）栗栖野瓦窯跡，史跡蛇塚古墳，小塩地区山岳山林地域遺跡，恭仁宮跡，上津遺跡，京都市高速鉄道予定地内遺跡，（大阪）亀井遺跡，（兵庫）緑ケ丘遺跡，魚住古窯趾群，福本遺跡，丹波三ツ塚廃寺，（奈良）鍵唐古遺跡，史跡飛鳥寺跡，高安城跡，（和歌山）道成寺遺跡，崎の湯湯壺，船岡山遺跡，（鳥取）上原遺跡，広瀬廃寺跡，伯耆国分寺跡，（島根）尼寺原遺跡，史跡富田城関連遺跡，団原遺跡，出雲国造館跡，（岡山）美作国分寺跡，東大寺瓦窯跡，（広島）寺田廃寺跡，草戸千軒町遺跡，（山口）長門国府周辺遺跡，大内氏遺跡，（徳島）阿波国分寺遺跡，（香川）青ノ山登窯，西村遺跡，（愛媛）永納山城跡，（高知）土佐国衙跡，（福岡）太宰府跡関連史跡，（佐賀）茶園原遺跡，九州横断道遺跡，名護屋城，国府跡，（熊本）平原瓦窯址，（鹿児島）薩摩国分寺跡

**埋蔵文化財ニュース刊行**

第20号　昭和52年度埋蔵文化財関係調査報告書一覧　1979年6月30日

第21号　昭和52年度埋蔵文化財関係記事等掲載一覧（付行政資料）　1979年8月30日

第22号　国分寺等発掘調査関係文献目録　1979年12月17日

第23号　遺跡の露出展示　1980年2月26日

第24号　鉄製遺物の保存法　1980年3月3日

第25号　埋蔵文化財調査センターの現状　1980年3月18日

## 5　その他

**委員会等**

第6回飛鳥資料館運営協議会

1979年5月15日　於飛鳥資料館

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1979年5月25日・26日　於平城宮跡資料館

集落町並保存対策に関する研究集会

1979年12月4日・5日　於文化会館

**外国出張**

坪井清足　ドイツ考古学研究所150周年記念国際研究討論会議出席，ドイツ古代都城遺跡視察及び調査研究のためドイツ連邦共和国に派遣。

1979年4月15日～同年5月4日

佐原　真　ドイツ考古学研究所150周年記念国際研究討論会議出席及びドイツ古代都城の調査研究のためドイツ連邦共和国に派遣。

1979年4月15日～同年5月27日

木下　正史　「日本考古展」出品物の開梱，陳列，撤収及び会期中における管理保全のためのキューレーターとしてアメリカ合衆国・カナダに派遣。

1979年4月26日～同年6月1日

宮本長二郎　第2回アジア太平洋文化財等保護会議出席及び韓国内の建築遺跡の調査のため大韓民国に派遣。

1979年5月27日～同年6月7日

工藤圭章　文部省在外研究員として建造物保存と修理技術の比較研究のためスペイン・デンマーク・スウェーデンに派遣。

1979年6月4日～同年7月28日

坪井清足　米国ミシガン大学主催による日本考古学に関する国際シンポジウムに参加及びアメリカ先史史跡の保存に関する調査と遺跡の視察のためアメリカ合衆国に派遣。

1979年10月3日～同年10月15日

山本忠尚　「日本考古展」出品物の開梱，陳列，撤収及び会期中における管理保全のためのキューレーターとしてアメリカ合衆国に派遣。

1979年11月3日～同年12月5日

猪熊兼勝　文部省在外研究員として古代墳墓の築造法に関する調査研究のためブラジル・ペルー・グァテマラ・メキシコに派遣。

1979年11月25日～1980年1月23日

西村　康　「日本古代文化史展」出品物の開梱，陳列，撤収及び会期中における管理保全のためのキューレーターとしてアメリカ合衆国に派遣。

1980年1月29日～同年3月6日

田中　琢　ギリシャにおける文化財の保護の沿革とその保存活用体系の調査研究のためギリシャに派遣。

1980年3月17日～同年3月31日

**協力事業等**

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており，1972年度から当研究所が文化

り宅地造成など開発にさらされる。国・県の補助金を受け，史跡指定，保存計画に伴う範囲確認調査。石器製作に関する豊富な資料を出土し，新知見も多い。佐賀県多久市教育委員会。6月。（松沢）

**芳賀団地東部遺跡**　住居跡の探査に磁気探査がどのように利用できるかの検討を市教委に依頼され，現地で測定。前橋市教育委員会。12月。（西村，岩本圭輔）

**栗栖野瓦窯**　瓦窯跡群の実態を把握するための確認調査として計画されたボーリング，磁気探査，発掘のうち，磁気探査を全面的に援助。探査面積2100㎡強，延4日間の測定で，窯跡と推定される磁気異常を6個所確認。京都市埋蔵文化財研究所。5月。（西村，岩本圭輔）

**萪内遺跡出土足跡の切り取り**　岩手県盛岡市所在。縄文人足跡の一部を130×130cmの大きさで二ケ所切り保存することになった。ウレタンフォームを利用して切り取り工事をおこない，溶剤を利用して土壌を乾燥させ，合成樹脂でこれを硬化して仕上げとした。日本では最古の人足跡と言われ，博物館等に広く公開の予定。（沢田・秋山）

**上里遺跡出土人骨の取り上げ**　岩手県二戸市所在。人骨八体が埋納された土壙を現場で精査できないため，室内に出土状態のまま搬入することになった。切り取り作業の工程を現地指導した。（沢田）

**榿木原遺跡出土登窯の移設保存**　滋賀県大津市所在。大津京時代の登窯で，間口4.9，奥行6.3，高さ5.2m。窯内壁面を合成樹脂で硬化，窯内部をウレタンフォームで充填補強，窯口を除く三側面を鉄筋コンクリートで保護し，これをコロで国道バイパスルートから30m移動する計画。本年度は窯内の樹脂硬化とウレタンフォームの充填に係る現地指導をおこなった。（遺物処理，保存工学研究室）

**蛇塚古墳石室の応急保存処理**　京都市所在。巨大な岩石を組みあげた石室の構造上の安定はきわめて悪く，根本的な保存対策を急務とするものである。今回は，これら組みあげ岩石の目地を埋める漆喰ようのものの剝落防止の処理をおこなった。（沢田，秋山，内田）

**伊庄谷横穴群出土木棺の取り上げ**　静岡市所在。同市は300×150cmの範囲に広がる木棺を出土状態のまま取り上げ，展示することを計画。ウレタンフォームを現場発泡させて木棺を梱包・保護し，取り上げた。これら一連の取り上げ工法，並びに保存処理について現地指導した。（町田，沢田）

**研究集会「遺物保存の技術検討会」**　3月17，18日の両日，埋蔵文化財センター研修棟にて60名が参加して開催された。出土遺物の保存処理事業は，今日広く理解されるようになり，当埋蔵文化財センターが主催する「保存科学課程」の研修も軌道にのり，各地の機関でも活発に保存処理がおこなわれつつある。本検討会では各機関の担当官が一堂に会して，保存処理の実例を報告し合った。12名の講演発表の後，参加者相互の経験を生かしての討論がおこなわれた。なお，今回のテーマには，出土遺物の中でも，特に破壊しやすく，保存の困難な金属製遺物と木製遺物の保存問題を取り上げた。（遺物処理研究室）

# 奈良国立文化財研究所要項

## Ⅰ　事業概要

### 1　研究普及事業

**公開講演会**

(1)　1979年5月19日　第45回公開講演会
「古代文献史料にみられる土器」　吉田　恵二
「斑鳩の瓦工たち」　岡本　東三

(2)　1979年11月17日　第46回公開講演会
「郡衙遺跡をめぐる諸問題」　山中　敏史
「イタリアにおける町並保存」　上野　邦一

**現地説明会**

(1)　1979年5月26日　平城京左京三条四坊七坪発掘調査現地説明会　亀井　伸雄

(2)　1979年7月21日　山田寺第3次発掘調査現地説明会　川越　俊一

(3)　1979年8月26日　平城宮跡第119次発掘調査現地説明会　加藤　允彦

(4)　1979年9月8日　大官大寺第6次発掘調査現地説明会　千田　剛道

(5)　1979年9月19日・20日　薬師寺東僧房発掘調査現地説明会　菅原　正明

(6)　1979年12月1日　平城宮跡第117次発掘調査現地説明会　立木　修

(7)　1979年11月24日　藤原宮跡第27次(東面北門)発掘調査現地説明会　小林　謙一

(8)　1980年3月8日　平城宮跡第120次発掘調査現地説明会　中村　雅治

**平城宮跡資料館・覆屋公開**

(1)　春季特別公開　1979年4月28日～5月6日　見学者　6,601名
秋季特別公開　1979年10月20日～11月4日　見学者　11,460名

(2)　見学者数

| 区　分 | 資料館 | 覆　屋 | 計 |
|---|---|---|---|
| 1979年 | 39,503 | 42,205 | 81,708 |
| 累　計 | 325,684 | 623,503 | 949,187 |

＊資料館は1970年度・覆屋は1968年度以降

### 2　1979年度文部省科学研究費補助金による研究

| 種　別 | 研究課題 | 研究代表者 | 交付願 |
|---|---|---|---|
| 一般研究A | 大和国荘園の復原的研究 | 田中　稔 | 19,000千円 |
| 一般研究B | 塔本塑像の復元的研究 | 田中義恭 | 3,000 |
| 一般研究C | 魏晋南北朝時代墳墓の構造的研究 | 町田　章 | 500 |
| 〃 | 飛鳥時代石造物の研究 | 猪熊兼勝 | 500 |
| 〃 | 古代高床倉庫の系譜的研究 | 木下正史 | 1,950 |
| 〃 | 民家の軸部構造の系統的発展に関する研究 | 吉田　靖 | 800 |
| 〃 | 竪穴住居の構造と立地条件に関する研究 | 宮本長二郎 | 1,300 |
| 一般研究D | 大画面の経典説話図の研究 | 百橋明穂 | 450 |
| 〃 | 縄文時代の小形磨製石斧の研究 | 土肥　孝 | 440 |
| 〃 | 奈良・平安時代墳墓の基礎的研究 | 黒崎　直 | 450 |
| 〃 | 西日本における妻入町家群の町形成に関する基礎研究 | 上野邦一 | 420 |
| 奨励研究A | 木簡の書道史的研究 | 今泉隆雄 | 800 |
| 〃 | 近畿地方における縄文土器の編年と地域性 | 岡本東三 | 700 |
| 〃 | 古代・中世における土器容量の変遷過程 | 吉田恵二 | 700 |
| 〃 | 古代寺院遺構の研究 | 山中敏史 | 700 |
| 〃 | 瓦製作技法の伝播と地域的変容の研究 | 山崎信二 | 700 |
| 〃 | 七世紀寺院の系譜的研究 | 松本修自 | 300 |
| 〃 | 日本上代庭園の植物生態に関する研究 | 光谷拓実 | 700 |
| 計 | 18件 | | 33,410 |

### 3　飛鳥資料館の運営

**展　示**

第一展示室　常設展示

第二展示室　特別陳列「桜井の仏像」
（1979.3.27～1979.5.6）
特別展示「飛鳥時代の古墳
―高松塚とその周辺―」
（1979.9.28～1979.11.11）

**普　及**

前年同様インフォメーションルームで観覧者の質問に応じている。また特別展示のカタログとして「桜井の仏像」及び「飛鳥時代の古墳」を刊行。

**入館者数**（1979.4.1～1980.3.31開館日数303日）

| | 普通観覧 | 団体観覧 | 有料計 | 無　料 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一　般 | 46,321 | 21,179 | 170,869 | 6,817 | 177,686 |
| 高・大 | 17,811 | 33,298 | | | |
| 小・中 | 14.160 | 38,100 | | | |
| 計 | 78,292 | 92,577 | | | |

**模造製作**

高松塚古墳出土品（棺飾金具）
橋寺火頭形塼仏，石のカラト古墳

### 4　埋蔵文化財センターの研修・指導

**研　修**　埋蔵文化財の保護に資することを目的として、主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

(1)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（写真測量課程）
1979年5月9日～5月19日（参加者12名）

(2)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（自然遺物課程）
1979年6月11日～6月23日（参加者12名）

(3)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修
1979年7月23日～8月25日（参加者24名）

(4)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺跡調査課程）
1979年9月17日～10月6日（参加者16名）

(5)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺物保存科学課程）
1979年10月18日～11月2日（参加者13名）

(6)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺跡保存整備課程）
1979年12月3日～12月12日（参加者24名）

(7)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺物整理課程）
1980年1月28日～2月9日（参加者24名）

(8)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修（第1回特殊調査技術課程）
1980年2月14日～2月18日（参加者24名）

(9)　昭和54年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（調査計画課程）
1980年3月3日～3月13日（参加者18名）

(10)　研修員受入

ア　御村　精治（度会郡小俣中学校教諭）
垣見　博一（三重県立白子高校教諭）
1979年10月2日～11月20日
榎本　義譲（松阪市第四小学校教諭）
1979年6月4日～8月3日

イ　小嶋　芳孝（石川県立埋蔵文化財センター主事）
1979年6月25日～6月30日

ウ　David Albert Slawson（米国インディアナ大学大学院生）
1979年9月21日～12月5日

エ　Bahira Al-Kaissi（イラク文化芸術省考古総局化学技師）
Thakaa Gazie Magid（イラク文化芸術省考古総局保存技師）
1979年12月17日～12月21日

オ　石井　　毅（財団法人茨城県教育財団主任調査員）
佐野　　正（〃）
1980年3月21日～3月25日

**調査整備等指導**

（北海道）史跡旧下ヨイチ運上家，（青森）弘前城三の丸庭園遺跡，（岩手）萪内遺跡，二戸市上里遺跡，史跡胆沢城跡，（秋田）秋田城跡，史跡払田柵跡，東北縦貫自動車道建設関係遺跡，（福島）慧日寺跡石塔，（群馬）新保遺跡，芳賀団地東部遺跡，（埼玉）辛亥銘鉄剣保存，（石川）和田山・末寺山古墳群，（福井）朝倉氏遺跡，（長野）座光寺バイパス遺跡，松本高校遺跡，（岐阜）史跡美濃国分寺跡，羽生遺跡，史跡弥勒寺

跡，美濃古窯跡群，（静岡）伊庄谷横穴墳群，（愛知）馬見塚遺跡，尾張国府跡，石塚古窯跡，（三重）川原井遺跡，斎宮跡，北堀池遺跡，天華寺廃寺，（滋賀）榿木原遺跡，（京都）栗栖野瓦窯跡，史跡蛇塚古墳，小塩地区山岳山林地域遺跡，恭仁宮跡，上津遺跡，京都市高速鉄道予定地内遺跡，（大阪）亀井遺跡，（兵庫）緑ケ丘遺跡，魚住古窯趾群，福本遺跡，丹波三ツ塚廃寺，（奈良）鍵唐古遺跡，史跡飛鳥寺跡，高安城跡，（和歌山）道成寺遺跡，崎の湯湯壺，船岡山遺跡，（鳥取）上原遺跡，広瀬廃寺跡，伯耆国分寺跡，（島根）尼寺原遺跡，史跡富田城関連遺跡，団原遺跡，出雲国造館跡，（岡山）美作国分寺跡，東大寺瓦窯跡，（広島）寺田廃寺跡，草戸千軒町遺跡，（山口）長門国府周辺遺跡，大内氏遺跡，（徳島）阿波国分寺遺跡，（香川）青ノ山登窯，西村遺跡，（愛媛）永納山城跡，（高知）土佐国衙跡，（福岡）太宰府跡関連史跡，（佐賀）茶園原遺跡，九州横断道遺跡，名護屋城，国府跡，（熊本）平原瓦窯址，（鹿児島）薩摩国分寺跡

**埋蔵文化財ニュース刊行**

第20号　昭和52年度埋蔵文化財関係調査報告書一覧　1979年6月30日

第21号　昭和52年度埋蔵文化財関係記事等掲載一覧（付行政資料）　1979年8月30日

第22号　国分寺等発掘調査関係文献目録　1979年12月17日

第23号　遺跡の露出展示　1980年2月26日

第24号　鉄製遺物の保存法　1980年3月3日

第25号　埋蔵文化財調査センターの現状　1980年3月18日

## 5　その他

**委員会等**

第6回飛鳥資料館運営協議会

1979年5月15日　於飛鳥資料館

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1979年5月25日・26日　於平城宮跡資料館

集落町並保存対策に関する研究集会

1979年12月4日・5日　於文化会館

**外国出張**

坪井清足　ドイツ考古学研究所150周年記念国際研究討論会議出席，ドイツ古代都城遺跡視察及び調査研究のためドイツ連邦共和国に派遣。

1979年4月15日～同年5月4日

佐原　真　ドイツ考古学研究所150周年記念国際研究討論会議出席及びドイツ古代都城の調査研究のためドイツ連邦共和国に派遣。

1979年4月15日～同年5月27日

木下　正史　「日本考古展」出品物の開梱，陳列，撤収及び会期中における管理保全のためのキューレーターとしてアメリカ合衆国・カナダに派遣。

1979年4月26日～同年6月1日

宮本長二郎　第2回アジア太平洋文化財等保護会議出席及び韓国内の建築遺跡の調査のため大韓民国に派遣。

1979年5月27日～同年6月7日

工藤圭章　文部省在外研究員として建造物保存と修理技術の比較研究のためスペイン・デンマーク・スウェーデンに派遣。

1979年6月4日～同年7月28日

坪井清足　米国ミシガン大学主催による日本考古学に関する国際シンポジウムに参加及びアメリカ先史史跡の保存に関する調査と遺跡の視察のためアメリカ合衆国に派遣。

1979年10月3日～同年10月15日

山本忠尚　「日本考古展」出品物の開梱，陳列，撤収及び会期中における管理保全のためのキューレーターとしてアメリカ合衆国に派遣。

1979年11月3日～同年12月5日

猪熊兼勝　文部省在外研究員として古代墳墓の築造法に関する調査研究のためブラジル・ペルー・グァテマラ・メキシコに派遣。

1979年11月25日～1980年1月23日

西村　康　「日本古代文化史展」出品物の開梱，陳列，撤収及び会期中における管理保全のためのキューレーターとしてアメリカ合衆国に派遣。

1980年1月29日～同年3月6日

田中　琢　ギリシャにおける文化財の保護の沿革とその保存活用体系の調査研究のためギリシャに派遣。

1980年3月17日～同年3月31日

**協力事業等**

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており，1972年度から当研究所が文化

庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが，1979年度の状況は下記の通り

| 区　分 | 面　積 | 購入額 |
|---|---|---|
| 1979年度 | 23,333.46㎡ | 416,473,779円 |
| 国有地合計 | 200,609.41 | 3,410,466,310 |

## Ⅱ　図書及び資料

図書　50,514冊

| 区　分 | 種　別 | 購　入 | 寄　贈 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 1979年 | 和漢書 | 1,750 | 2,847 | **4,597** |
| | 洋　書 | 274 | 56 | 330 |
| 累　計 | 和漢書 | 27,311 | 19,738 | 47,049 |
| | 洋　書 | 3,020 | 445 | 3,465 |

写真　191,904点（1979年度末現在）

## Ⅲ　研究成果刊行物

1979年度刊行物

| 名　　称 | |
|---|---|
| 学　報　第37冊 | 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ |
| 学　報　第38冊 | 研究論集Ⅵ |
| 史　料　第16冊 | 日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ |
| 史　料　第17冊 | 平城宮木簡㈢図版 |
| 史　料　第18冊 | 藤原宮木簡㈡図版 |
| 史　料　第19冊 | 東大寺文書目録第２巻 |
| 図　録　第６冊 | 飛鳥時代の古墳 |
| 基準資料第７冊 | 瓦編７ |
| 概　報　他 | 昭和53年度平城宮発掘調査概報 |
| | 飛鳥・藤原宮発掘調査概報９ |
| | 藤原宮出土木簡概報 |

### 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

| 年度 | 名　　称 |
|---|---|
| 1954 | 第１冊　仏師運慶の研究 |
| | 第２冊　修学院離宮の復原的研究 |
| 1955 | 第３冊　文化史論叢 |
| 1956 | 第４冊　奈良時代僧房の研究 |
| 1957 | 第５冊　飛鳥寺発掘調査報告 |
| 1958 | 第６冊　中世庭園文化史 |
| | 第７冊　興福寺食堂発掘調査報告 |
| 1959 | 第８冊　文化史論叢Ⅱ |
| | 第９冊　川原寺発掘調査報告 |
| 1960 | 第10冊　平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 |
| 1961 | 第11冊　院家建築の研究 |
| 1962 | 第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶 |
| | 第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察 |
| | 第14冊　レースと金亀舎利塔に関する研究 |
| | 第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査 |
| 1963 | 第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査 |
| 1965 | 第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査 |
| | 第18冊　小堀遠州の作事 |
| 1967 | 第19冊　藤原氏の氏寺とその院家 |
| 1969 | 第20冊　名物裂の成立 |
| 1971 | 第21冊　研究論集Ⅰ |
| 1973 | 第22冊　研究論集Ⅱ |
| 1974 | 第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査 |
| | 第24冊　高山－町並調査報告－ |
| 1975 | 第25冊　平城京左京三条二坊 |
| | 第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ |
| | 第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ |
| | 第28冊　研究論集Ⅲ |
| | 第29冊　木曽奈良井－町並調査報告－ |
| 1976 | 第30冊　五条－町並調査の記録－ |
| 1977 | 第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ |
| | 第32冊　研究論集Ⅳ |
| | 第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 |
| | 第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ |
| 1978 | 第35冊　研究論集Ⅴ |
| | 第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ |

奈良国立文化財研究所史料

| 年度 | 名　　称 |
|---|---|
| 1954 | 第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製） |
| 1955 | 第２冊　西大寺叡尊伝記集成 |
| 1963 | 第３冊　仁和寺史料　寺誌編１ |
| 1964 | 第４冊　俊乗坊重源史料集成 |
| 1966 | 第５冊　平城宮木簡１　図版 |
| 1967 | 第６冊　仁和寺史料　寺誌編２ |
| 1969 | 第５冊　平城宮木簡１　解説（別冊） |
| 1970 | 第７冊　唐招提寺史料１ |
| 1974 | 第８冊　平城宮木簡２　図版・解説 |
| | 第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ |
| 1975 | 第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ |
| 1976 | 第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ |
| 1977 | 第12冊　藤原宮木簡Ⅰ　図版・解説 |
| | 第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ |
| 1978 | 第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ |
| | 第15冊　東大寺文書目録第１巻 |

奈良国立文化財研究所基準資料

| 年度 | 名　　称 |
|---|---|
| 1973 | 第1冊　瓦編1　解説 |
| 1974 | 第2冊　瓦編2　解説 |
| 1975 | 第3冊　瓦編3 |
| 1976 | 第4冊　瓦編4 |
| | 第5冊　瓦編5 |
| 1978 | 第6冊　瓦編6 |

飛鳥資料館図録

| 年度 | 名　　称 |
|---|---|
| 1976 | 第1冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏 |
| | 第2冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇 |
| 1977 | 第3冊　日本古代の墓誌 |
| 1978 | 第4冊　日本古代の墓誌　銘文編 |
| | 第5冊　古代の誕生仏 |

## Ⅳ　定　員

| | 指定職 | 行政一 | 行政二 | 研究職 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1978年度 | 1 | 23 | 6 | 69 | 99 |
| 1979年度 | 1 | 23 | 6 | 69 | 99 |

## Ⅴ　予　算（1979年度）

| | |
|---|---|
| 人　件　費 | 381,976千円 |
| 運　営　費 | 573,415 |
| 事　業　管　理 | 10,049 |
| 一　般　研　究 | 53,984 |
| 特　別　研　究 | 2,164 |
| 発　掘　調　査 | 346,254 |
| 宮跡整備管理 | 47,558 |
| 飛鳥資料館運営 | 45,234 |
| 埋蔵文化財センター運営 | 68,172 |
| 施　設　費 | 643,417 |
| 施設整備費 | 425,599 |
| 平城宮跡地等整備費 | 108,660 |
| 各　所　修　繕 | 9,158 |
| 不動産購入費 | 100,000 |
| 計 | 1,598,808 |

## Ⅵ　施　設

**土　地**　32,311㎡（当所所管）

新　庁　舎　8,860㎡　　飛鳥資料館　17,092㎡
飛鳥資料館宿舎　1,343㎡　　郡山宿舎　80㎡
春　日　野　5,136㎡

1,187,534.67㎡（文化庁所管）

平城宮跡地区　986,054.73㎡
藤原宮跡地区　200,609.41㎡
飛鳥稲渕宮殿跡地　870.53㎡

**建　物**

| 建　物 | 新庁舎 | 平　城 | 藤　原 | 飛鳥資料館 | 春日野 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ㎡ | ㎡ | ㎡ | ㎡ | ㎡ | ㎡ |
| 事　務　室 | 543 | 1,820 | 503 | 152 | 797 | 3,815 |
| 研　究　室 | 1,433 | | | | | 1,433 |
| 資料・図書室 | 1,021 | | | | 191 | 1,212 |
| 会　議　室 | 338 | 192 | | 42 | 40 | 612 |
| 講　堂 | | | | 89 | 109 | 198 |
| 展　示　室 | | 360 | | 648 | | 1,008 |
| 写　真　室 | 90 | 192 | 61 | 49 | 86 | 478 |
| 覆屋・展示棟 | | 1,518 | | | | 1,518 |
| 車　庫 | | 363 | 217 | 94 | 20 | 694 |
| 倉庫・収蔵庫 | 123 | 5,882 | 1,512 | | | 7,517 |
| 研　修　棟 | 1,318 | | | | | 1,318 |
| そ　の　他 | 1,673 | 511 | 152 | 1,608 | 200 | 4,144 |
| 計 | 6,539 | 10,838 | 2,445 | 2,682 | 1,443 | 23,947 |
| 重要文化財 旧米谷家住宅 | | | | | | 198 |
| 合　計 | | | | | | 24,145 |

**主要工事**

(1)　施設整備費

| | 千円 |
|---|---|
| 図書資料棟改修工事 | 5,600 |
| 埋蔵文化財センター研修棟床改修その他工事 | 4,042 |
| （建設省近畿地方建設局委任工事分） | |
| 奈良国立文化財研究所新庁舎建築改修工事 | 264,770 |
| 〃　　電気〃 | 83,880 |
| 〃　　機械〃 | 85,300 |

(2)　平城宮跡地等整備費

| | 千円 |
|---|---|
| 平城宮跡環境整備工事 | 57,500 |
| 藤原宮跡環境整備工事 | 6,700 |
| 特別史跡平城宮跡地形調査 | 1,670 |
| 平城宮跡地水質及び土質調査工事 | 5,450 |
| 平城宮跡内構内道路補修工事 | 628 |
| 平城宮跡水銀灯取設工事 | 1,200 |
| 〃南棟覆屋補修工事 | 660 |
| 平城資料館シャッター取設工事 | 4,697 |

(3)　庁　費

| | 千円 |
|---|---|
| 機械室棟熱源機器その他設備工事 | 27,000 |
| 埋蔵文化財センター研修棟視聴覚設備工事 | 4,925 |
| 〃　　ガス冷暖房機取設工事 | 7,300 |
| 飛鳥資料館庭園整備等工事 | 2,620 |
| 〃　　裏山購入予定地測量 | 563 |
| 特別史跡藤原宮跡地整備工事測量 | 641 |

## Ⅶ　人事異動

（1979年4月1日～1980年3月31日）

4月1日　庶務部庶務課長に転任　三森　武雄
国立国際美術館庶務課長に転任
音川啓太郎
埋蔵文化財センター教務室長に転任
織井　弘一
福井工業高等専門学校庶務課長に転任
岡本　清
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室長に昇任　加藤　優
庶務部会計課経理係長に昇任
冬野　徹
埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官に昇任　沢田　正昭・西村　康
滋賀大学教育学部助教授に転任
小笠原好彦
平城宮跡発掘調査部考古第一調査室長に配置換　工楽　善通
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室長に配置換　森　郁夫
平城宮跡発掘調査部史料調査室長に配置換　鬼頭　清明
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第一調査室長に配置換　佐藤　興治
飛鳥資料館学芸室長に配置換
猪熊　兼勝
埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理研究室長に配置換　町田　章
庶務部庶務課庶務係長に配置換
西田　健三
文部技官採用　上原　真人
事務補佐員採用
大場　範子・竹島　弘美
研究補佐員採用　泉　雄二
4月22日　辞職　秋本　喜子
5月1日　事務補佐員採用　藤本　照子
6月1日　庶務部会計課用度係長に配置換
乾　敏光
研究補佐員採用　盛　峰雄
6月2日　辞職　広瀬　雅信
9月1日　研究補佐員採用　大林　達夫
10月20日　大阪大学学生課に転任　大西　肇
11月1日　庶務部会計課課長補佐に昇任
廣澤　常一
国立大洲青年の家庶務課長に転任
吉田　博次
12月1日　庶務部会計課に転任　外嶋　義広
1月16日　平城宮跡発掘調査部長に転任
岡田　英男
文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官に転任　工藤　圭章
飛鳥藤原宮跡発掘調査部長に配置換
狩野　久
1月29日　辞職　牧田　道子
2月1日　文部技官採用　内田　昭人
3月30日　辞職　内田　誠
3月31日　辞職　吉田　恵二

## Ⅷ　組織規定

### 文部省設置法　抜萃

昭和24年法律第146号
昭和43年6月15日一部改正

第36条　第43条に規定するもののほか，文化庁に次の機関を置く。

国立文化財研究所（前後略）

第41条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2　国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

| 名　　称 | 位　　置 |
|---|---|
| 東京国立文化財研究所 | 東　京　都 |
| 奈良国立文化財研究所 | 奈　良　市 |

3　国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

4　国立文化財研究所及びその支所の内部組織は文部省令で定める。

### 文部省設置法施行規則　抜萃

昭和28年1月13日文部省令第2号，追加昭和43年6月15日文部省令第20号
昭和45年4月17日文部省令第11号，
昭和48年4月12日文部省令第6号，
昭和49年4月11日文部省令第10号，
昭和49年4月11日文部省令第10号，
昭和50年4月2日文部省令第13号，
昭和51年5月10日文部省令第16写，

昭和52年4月18日文部省令第10号，
昭和53年4月5日文部省令第19号，
昭和53年9月9日文部省令第33号

第5章　文化庁の附属機関

第4節　国立文化財研究所

第2款　奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条　奈良国立文化財研究所に，所長を置く。

2　所長は所務を掌理する。

（内部組織）

第124条　奈良国立文化財研究所に，庶務部，美術工芸研究室，建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2　前項に定めるもののほか，奈良国立文化財研究所に，飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条　庶務部に，次の二課を置く。

一　庶務課

二　会計課

2　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

一　職員の人事に関する事務を処理すること。

二　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四　この研究所の所掌事務に関し，連絡調整すること。

五　この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

3　会計課においては，次の事務をつかさどる。

一　予算に関する事務を処理すること。

二　経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四　庁舎及び設備の維持，管理に関する事務を処理すること。

五　庁内の取締りに関すること。

（美術工芸研究室等の事務）

第127条　美術工芸研究室においては，絵画，彫刻，工芸品，書跡その他の有形文化財（次項及び第3項に規定するものを除く），及び工芸技術に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

2　建造物研究室においては，建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

3　歴史研究室においては，考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

（平城宮跡発掘調査部の六室及び事務）

第128条　平城宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，考古第三調査室，遺構調査室，計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，平城宮跡に関し，次項から第六項までに定める事務を処理するほかその発掘を行う。

3　考古第一調査室，考古第二調査室及び考古第三調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

5　計測修景調査室においては，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務）

第129条　飛鳥藤原宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，遺構調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関し，次項から第五項までに定める事務を処理するほか，その発掘を行う。

3　考古第一調査室及び考古第二調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び

調査研究，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥資料館）

第130条　飛鳥資料館においては，飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し，国民の理解を深めるため，この地域に関する考古資料，歴史資料その他の資料を収集し，保管して公衆の観覧に供し，あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

（飛鳥資料館の館長）

第131条　飛鳥資料館に，館長を置く。

2　館長は，館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

第132条　飛鳥資料館に，庶務室及び学芸室を置く。

2　庶務室においては，飛鳥資料館の庶務，会計等に関する事務を処理する。

3　学芸室においては，次の事務をつかさどる。

一　飛鳥地域に関する考古資料，歴史資料，建造物，絵画，彫刻，典籍，古文書その他の資料の収集，保管，展示，模写，模造，写真の作成，調査研究及び解説を行うこと。

二　飛鳥地域に関する図書，写真その他の資料の収集，整理，保管，展示，閲覧及び調査研究を行うこと。

三　飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

（埋蔵文化財センター）

第133条　埋蔵文化財センターにおいては，次の事務をつかさどる。

一　埋蔵文化財に関し，調査研究及びその結果の公表を行うこと。

二　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して，専門的，技術的な研修を行うこと。

三　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，専門的，技術的な指導及び助言を行うこと。

四　埋蔵文化財に関する情報資料の作成，収集，整理，保管及び調査研究を行い，並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，その利用に供すること。

（埋蔵文化財センターの長）

第134条　埋蔵文化財センターに長を置く。

2　前項の長は，埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

第135条　埋蔵文化財センターに，教務室，研究指導部及び情報資料室を置く。

（教務室の事務）

第136条　教務室においては，研修の実施に関する事務を処理するほか，埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

（研究指導部の五室及び事務）

第137条　研究指導部に，考古計画研究室，集落遺跡研究室，遺物処理研究室，測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2　考古計画研究室においては，第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

3　集落遺跡研究室においては，集落遺跡に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務（遺物処理研究室，測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

4　遺物処理研究室においては，遺物の処理に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5　測量研究室においては，埋蔵文化財の測量に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

6　保存工学研究室においては，遺跡の保存整備に関し，第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

（情報資料室の事務）

第138条　情報資料室においては，第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

## 職　員　（1980年6月1日現在）

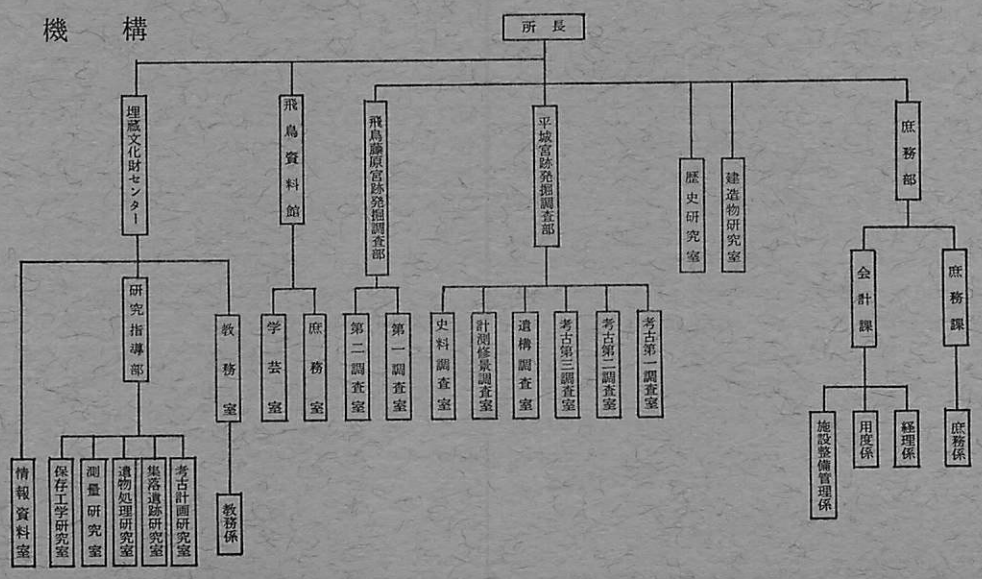
| 所属 | | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|---|
| | | 坪井　清足 | 文部技官　所長 | |
| 庶務部 | | 森　春見 | 文部事務官　部長 | |
| | 庶務課 | 三森　武雄 | 文部事務官　課長 | |
| | | 萩原　陽雄 | 文部事務官　課長補佐 | |
| | | 藤原　賢二 | 文部事務官　庶務係長 | |
| | | 西　徹 | 文部事務官 | 庶務人事 |
| | | 木寅　忠雄 | 文部事務官　警務員長 | 警備 |
| | | 森田　光治 | 文部事務官　警務員 | 警備 |
| | | 岡田　博兄 | 文部事務官　警務員 | 警備 |
| | | 日高　参夫 | 文部事務官　専門員 | 平城事務 |
| | | 八幡　扶桑 | 文部技官専門職員(併任) | 写真 |
| | | 宍戸　雅子 | 事務補佐員 | 庶務人事 |
| | | 港　悦子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | | 村田　恵子 | 事務補佐員 | 庶務 |
| | | 宮本　宣代 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| | | 中川かよ子 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| | | 中垣　睦美 | 事務補佐員 | 図書資料 |
| | | 寺田千鶴子 | 事務補佐員 | 平城事務 |
| | | 城本きよの | 業務補佐員 | 庁務 |
| | 会計課 | 金塚　勇 | 文部事務官　課長 | |
| | | 廣澤　常一 | 文部事務官　課長補佐 | |
| | | 福島　郁夫 | 文部事務官　課長補佐 | |
| | | 冬野　徹 | 文部事務官　経理係長 | |
| | | 忠　利二 | 文部事務官 | 経理 |
| | | 前川　重子 | 事務補佐員 | 経理 |
| | | 橋本　伴子 | 事務補佐員 | 経理 |
| | | 大西　和子 | 事務補佐員 | 経理 |
| | | 新井　耕治 | 文部事務官　用度係長 | |
| | | 刀谷　敏博 | 文部事務官 | 用度 |
| | | 中西　建夫 | 文部技官 | 自動車運転 |
| | | 中村美千代 | 事務補佐員 | 用度 |
| | | 藤本きよえ | 事務補佐員 | 用度 |
| | | 太田　博子 | 事務補佐員 | 用度 |
| | | 福島　郁夫 | 文部事務官　施設整備管理係長(併任) | |
| | | 渡辺　康史 | 文部技官 | 整備管理 |
| | | 奥村　末儀 | 文部技官　(併任) | 施設 |
| | | 堀内　博子 | 事務補佐員 | 施設 |
| | | 西田　健三 | 文部事務官　専門職員 | 藤原事務 |
| 建造物研究室 | | 吉田　靖 | 文部技官　室長 | 建築 |
| | | 亀井　伸雄 | 文部技官　(併任) | 建築 |
| | | 清水　真一 | 文部技官　(併任) | 建築 |
| | | 加藤　允彦 | 文部技官　(併任) | 遺跡庭園 |
| | | 上野　邦一 | 文部技官　(併任) | 建築 |
| | | 福山　敏男 | 調査員　(非常勤) | 建築 |
| | | 綾村　幸子 | 研究補佐員 | 資料整理 |
| 歴史研究室 | | 田中　稔 | 文部技官　室長(取扱) | 歴史 |
| | | 巽　淳一郎 | 文部技官　(併任) | 考古 |
| | | 綾村　宏 | 文部技官　(併任) | 歴史 |
| | | 今泉　隆雄 | 文部技官　(併任) | 歴史 |
| | | 土肥　孝 | 文部技官　(併任) | 考古 |
| | | 山崎　信二 | 文部技官　(併任) | 考古 |
| | | 堀池　春峰 | 調査員　(非常勤) | 歴史 |
| | | 高田久美子 | 研究補佐員 | 資料整理 |

| 所属 | | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|---|
| 平城宮跡発掘調査部 | | 岡田　英男 | 文部技官　部長 | |
| | 考古第一調査室 | 工楽　善通 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 菅原　正明 | 文部技官 | 考古 |
| | | 甲斐　忠彦 | 文部技官 | 考古 |
| | | 金子　裕之 | 文部技官 | 考古 |
| | | 上原　真人 | 文部技官 | 考古 |
| | | 八幡　扶桑 | 文部技官　専門職員 | 写真 |
| | | 佃　幹雄 | 文部技官　専門職員 | 写真 |
| | | 池田千賀枝 | 事務補佐員 | 写真 |
| | | 吉村　司朗 | 技能補佐員 | 保安 |
| | | 石川千恵子 | 研究補佐員 | 公開 |
| | 考古第二調査室 | 森　郁夫 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 田辺　征夫 | 文部技官 | 考古 |
| | | 安田竜太郎 | 文部技官 | 考古 |
| | | 巽　淳一郎 | 文部技官 | 考古 |
| | 考古第三調査室 | 山本　忠尚 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 千田　剛道 | 文部技官 | 考古 |
| | | 毛利光俊彦 | 文部技官 | 考古 |
| | | 中村　友博 | 文部技官 | 考古 |
| | | 立木　修 | 文部技官 | 考古 |
| | 遺構調査室 | 宮本長二郎 | 文部技官　室長 | 建築 |
| | | 亀井　伸雄 | 文部技官 | 建築 |
| | | 清水　真一 | 文部技官 | 建築 |
| | | 山岸　常人 | 文部技官 | 建築 |
| | 計測修景調査室 | 田中　哲雄 | 文部技官　室長 | 遺跡庭園 |
| | | 加藤　允彦 | 文部技官 | 遺跡庭園 |
| | | 本中　真 | 文部技官 | 遺跡庭園 |
| | | 内田　昭人 | 文部技官 | 建築 |
| | | 森　蘊 | 調査員　(非常勤) | 遺跡庭園 |
| | 史料調査室 | 鬼頭　清明 | 文部技官　室長 | 歴史 |
| | | 綾村　宏 | 文部技官 | 歴史 |
| | | 佐藤　信 | 文部技官 | 歴史 |
| | | 清田　善樹 | 文部技官 | 歴史 |
| | | 木寅　忠雄 | 文部事務官　(兼任) | 警備 |
| | | 森田　光治 | 文部事務官　(兼任) | 警備 |
| | | 岡田　博兄 | 文部事務官　(兼任) | 警備 |
| | | 城本きよの | 業務補佐員　(兼任) | 庁務 |

| 所属 | | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|---|
| 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 | | 狩野　久 | 文部技官　部長 | |
| | 考古第一調査室 | 佐藤　興治 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 上野　邦一 | 文部技官 | 建築 |
| | | 川越　俊一 | 文部技官 | 考古 |
| | | 岩本　正二 | 文部技官 | 考古 |
| | | 井上　直夫 | 文部技官 | 写真 |
| | 考古第二調査室 | 木下　正史 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 今泉　隆雄 | 文部技官 | 歴史 |
| | | 西口　寿生 | 文部技官 | 考古 |
| | 遺構調査室 | 細見　啓三 | 文部技官　室長 | 建築 |
| | | 岡本　東三 | 文部技官 | 考古 |
| | | 土肥　孝 | 文部技官 | 考古 |
| | | 松村　恵司 | 文部技官 | 考古 |
| | 史料調査室 | 加藤　優 | 文部技官　室長 | 歴史 |
| | | 黒崎　直 | 文部技官 | 考古 |
| | | 小林　謙一 | 文部技官 | 考古 |
| | | 井上　和人 | 文部技官 | 考古 |
| | | 西田　健三 | 文部事務官　事務総括(併任) | 事務 |
| | | 飯田　信男 | 文部技官　(併任) | 自動車運転 |
| | | 石谷　幸子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | | 稲垣　耕正 | 技能補佐員 | 自動車運転 |
| | | 望月　正治 | 技能補佐員 | 保安 |
| | | 宮川　伴子 | 研究補佐員 | 資料整理 |
| | | 泉　雄二 | 研究補佐員 | 考古 |
| | | 盛　峰雄 | 研究補佐員 | 考古 |
| | | 大林　達夫 | 研究補佐員 | 考古 |
| | | 滝本　正志 | 研究補佐員 | 考古 |
| 飛鳥資料館 | | 坪井　清足 | 文部技官　館長(取扱) | |
| | 庶務室 | 森口　節之 | 文部事務官　室長 | 事務 |
| | | 外嶋　義広 | 文部事務官 | 事務 |
| | | 奥村　末儀 | 文部技官 | 施設 |
| | | 飯田　信男 | 文部技官 | 自動車運転 |
| | | 米田一二三 | 警務員 | 警備 |
| | | 吉村　都子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | | 藤本　照子 | 事務補佐員 | 事務 |
| | | 乾　春雄 | 技能補佐員 | 保安 |
| | | 藤本　清 | 警務補佐員 | 警備 |
| | | 福井　敏子 | 業務補佐員 | 庁務 |

| 所属 | | 氏名 | 官職 | 担当 |
|---|---|---|---|---|
| 飛鳥資料館 | 学芸室 | 猪熊　兼勝 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 大脇　潔 | 文部技官 | 考古 |
| | | 津村　広志 | 文部事務官 | 図書普及 |
| | | 藤沢　一夫 | 調査員(非常勤) | 考古 |
| 埋蔵文化財センター | | 田中　稔 | 文部技官　センター長 | |
| | 教務室 | 織井　弘一 | 文部事務官　室長 | 事務 |
| | | 小林　雅文 | 文部事務官 | 事務 |
| | | 竹島　弘美 | 事務補佐員 | 事務 |
| | 研究指導部 | 田中　琢 | 文部技官　部長 | |
| | 考古計画研究室 | 松沢　亜生 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 岩本　圭輔 | 文部技官 | 考古 |
| | 集落遺跡研究室 | 佐原　真 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 山崎　信二 | 文部技官 | 考古 |
| | 遺物処理研究室 | 町田　章 | 文部技官　室長 | 考古 |
| | | 秋山　隆保 | 文部技官 | 保存科学 |
| | | 沢田　正昭 | 文部技官　(併任) | 保存科学 |
| | 測量研究室 | 木全　敬蔵 | 文部技官　室長 | 測量 |
| | | 松本　修自 | 文部技官 | 建築 |
| | | 伊東　太作 | 文部技官　(併任) | 測量 |
| | | 西村　康 | 文部技官　(併任) | 考古測量 |
| | 保存工学研究室 | 安原　啓示 | 文部技官　室長 | 遺跡庭園 |
| | | 光谷　拓実 | 文部技官 | 遺跡庭園 |
| | | 伊東　太作 | 文部技官　主任研究官 | 測量 |
| | | 沢田　正昭 | 文部技官　主任研究官 | 保存科学 |
| | | 西村　康 | 文部技官　主任研究官 | 考古測量 |
| | | 杉田　繁治 | 調査員(非常勤) | 埋文情報 |
| | | 栗田　靖之 | 調査員(非常勤) | 埋文情報 |
| | 情報資料室 | 岩本　次郎 | 文部技官　室長 | 歴史 |
| | | 山中　敏史 | 文部技官 | 考古 |

## 機構



# ANNUAL BULLETIN
## OF
## NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
## 1980

CONTENTS


Page

Preface ····· 1
Our archeological study of the Nara Palace site in last twenty years ····· 2
Our archeological study of the Asuka and Fujiwara Palace sites
in last ten years ····· 6
Survey of Buddhist art in Tenri-shi, city in Nara pref. ····· 10
Some srt object kept in the “Bishamonten” sculpture
owned by Chosen-ji Temple ····· 12
Report of templesand shrines at edo period in Kagawa pref. ····· 14
Survey of the historic town “Imai-cho” in Nara pref. ····· 16
Survey of cultural properties in Yamato-koriyama-shi ····· 17
Report of the second symposium of the conservation of historic towns
meeting at Nara-shi ····· 18
Old documents on the reverse of "Denbun-sho” and "Taisoyokan-sho”
Owned by Ninna-ji Temple ····· 19
Exavation study of the Nara Palace site and the Nara metropolis site ····· 22
Exavation study of the Asuka and Fujiwara Palace sites ····· 36
Survey of the garden site at the former “Shimoyoichi-Unjoya”
in Yoichi-cho,Hokkaido ····· 47
Survey of the garden site at “Sannomaru” in Hirosaki Castle, Aomori pref. ····· 39
Photogrametric survey of the stone pagoda
at “Tokuichi-byo” in Enichi-ji, Temple ····· 49
Survey of the roof-tile kilns for Todaiji Temple by magnetic Prospect ····· 50
Execution of arrangement plan at the Nara Palace site
and the Fujiwara Palace site ····· 52
Report of the conservation science of sites and relics ····· 54
Survey of the materials and works at ancient period for the
reconstruction buildings with original style at the Nara Place site ····· 57
Study of the “Kogafu” (rubbings of old roof-tiles)
owned by Hokongo-in temple ····· 58
Study of Buddhist statues in Takatori-cho,Nara pref. ····· 59
Introduction to the new office building of the Institute ····· 60
Summaries of the public lectures by the Institute ····· 62
Brief reports of other studies and surveys ····· 63
Organization and activities of the Institute ····· 68



Published by
Nara National Cultural Properties Research institute
Nara, 1980

# ANNUAL BULLETIN
## OF
## NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
## 1980

CONTENTS


Page

Preface ..... 1
Our archeological study of the Nara Palace site in last twenty years ..... 2
Our archeological study of the Asuka and Fujiwara Palace sites in last ten years ..... 6
Survey of Buddhist art in Tenri-shi, city in Nara pref. ..... 10
Some art objects kept in the "Bishamonten" sculpture owned by Chôsen-ji Temple ..... 12
Report of templesand shrines at edo period in Kagawa pref ..... 14
Survey of the historic town "Imai-chô" in Nara pref. ..... 16
Survey of cultural properties in Yamato-kôriyama-shi ..... 17
Report of the second symposium of the conservation of historic towns meeting at Nara-shi ..... 18
Old documents on the reverse of "Denbun-shô" and "Taisoyôkan-shô" owned by Ninna-ji Temple ..... 19
Exavation study of the Nara Palace site and the Nara metropolis site ..... 22
Exavation study of the Asuka and Fujiwara Palace sites ..... 36
Survey of the garden site at the former "Shimoyoichi-Unjoya" in Yoichi-chô, Hokkaidô ..... 47
Survey of the garden site at "Sannomaru" in Hirosaki Castle, Aomori pref. ..... 48
Photogrametric survey of the stone pagoda at "Tokuichi-byô" in Enichi-ji, Temple ..... 49
Survey of the roof-tile kilns for Tôdaiji Temple by magnetic Prospect ..... 50
Execution of arragement plan at the Nara Palace site and the Fujiwara Palace site ..... 52
Report of the conservation science of sites and relics ..... 54
Survey of the materials and works at ancient period for the reconstruction buildings with original style at the Nara Place site ..... 57
Study of the "Kogafu" (rubbings of old roof-tiles) owned by Hôkongô-in temple ..... 58
Study of Buddhist statues in Takatori-chô, Nara pref ..... 59
Introduction to the new office building of the Institute ..... 60
Summaries of the public lectures by the Institute ..... 62
Brief reports of other studies and surveys ..... 63
Organization and activities of the Institute ..... 68



Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1980